

坊主山古墳群出土品報告書

坊主山古墳群出土品報告書

2020年9月

奈良大学文学部文化財学科

二〇二〇年

奈良大学文学部文化財学科



坊主山 1 号墳主要出土遺物

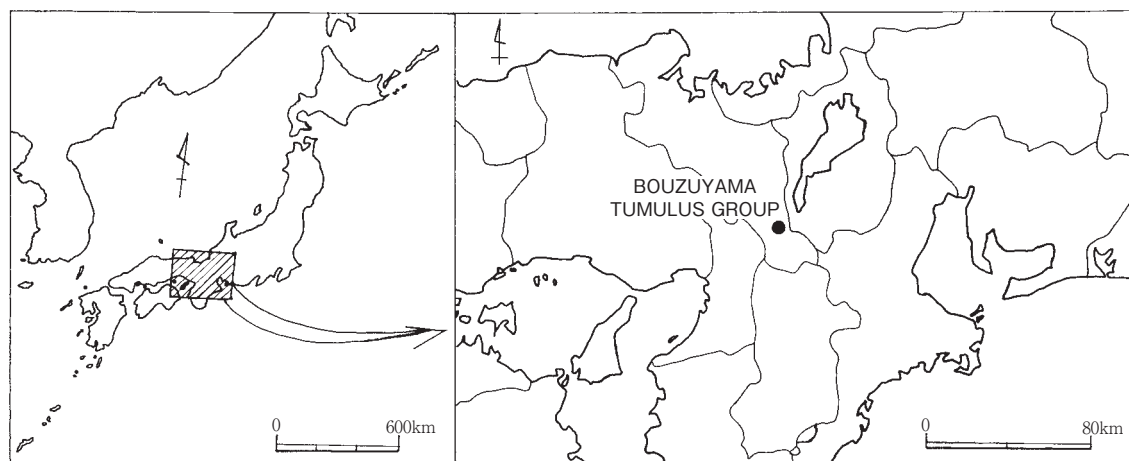
坊主山古墳群出土品報告書

2020年9月

奈良大学文学部文化財学科

例 言

1. 本書は京都府宇治市広野町寺山に所在した坊主山古墳群出土品の整理報告書である。発掘調査は1964年5～9月に京都府教育委員会が実施した。出土品は山城郷土資料館に保管されている。
2. 整理作業と報告書作成は2013年5月から2020年9月まで、奈良大学文学部文化財学科で行った。
3. 金属製品のX線写真撮影は魚島純一、大江克己、坂本直也による。
4. 遺物の写真撮影は牛嶋茂氏による。
5. 本書の作成において諫早直人、植野浩三、鐘方正樹、北山大熙、小林青樹、坂井秀弥、廣瀬 覚、広瀬繁明、福山博章、細川康晴、松尾史子、森島康雄の各氏からご教示を賜った。
6. 本書の執筆は泉 眞奈、上野あさひ、漆原尚輝、辛川あかり、小林友佳、静 幸穂、竹川可純、田口裕貴、築山弥矢、土屋隆史、堤 圭三郎、豊島直博、中川恋歌、古谷真人、松島隆介が分担して行った。製図の担当者は挿図目次に記した。
7. 本書の編集は豊島直博が行った。
8. 遺物の実測図、写真データ、主要な金属器のX線写真は山城郷土資料館で保管している。



坊主山古墳群の位置

坊主山古墳群出土品報告書

目 次

卷頭図版

例 言

第1章 報告書作成の経緯と経過	豊島直博	1
1 整理報告に至る経緯		1
2 作業の経過		1
第2章 発掘調査の概要	〃	2
1 周辺の古墳		2
2 1号墳の調査の概要		4
3 2号墳の調査の概要		6
第3章 1号墳の出土遺物		9
1 出土遺物の種類と数量	〃	9
2 武器		10
(1) 大 刀	〃	10
(2) 鉄 矛	辛川あかり	12
(3) 鉄 鏃	松島隆介	13
3 武具(胡籙)	土屋隆史	18
(1) 金具組成		18
(2) 出土状況		18
(3) 短冊形B 2類吊手金具		20
(4) 収納部金具		21
(5) 勾玉状金具		22
4 馬 具		22
(1) 杏 葉	上野あさひ	22
(2) 鞍 金 具	〃	22
(3) 鐙 金 具	〃	23
(4) 辻 金 具	〃	24
(5) 責 金 具	〃	26
(6) 不明金具	〃	26
(7) 銅 鈴	築山弥矢	26
(8) 鉄 鐸	中川恋歌・漆原尚輝	29
5 工具(鉄斧)	中川	31

6	装身具	31
(1)	銅 釧	古谷真人 31
(2)	金 環	〃 31
(3)	玉 類	小林友佳 32
7	須恵器	32
(1)	脚付子持壺	田口裕貴 33
(2)	短頸壺	竹川可純 33
(3)	甕	古谷 34
8	埴輪	泉 真奈 35
(1)	円筒埴輪	35
(2)	形象埴輪	38
(3)	出土埴輪の位置づけ	40
第4章 2号墳の出土遺物		43
1	出土遺物の種類と数量	豊島 43
2	西棺出土遺物	44
(1)	武器	豊島・松島 44
(2)	工具	漆原 47
(3)	装身具	豊島 48
(4)	須恵器	竹川 48
3	東棺出土遺物	50
(1)	武器(鉄鏃)	松島 50
(2)	馬具	豊島 53
(3)	装身具	古谷・豊島 53
(4)	須恵器	静 幸穂・竹川 54
第5章 総括		豊島 59
1	古墳の年代	59
(1)	1号墳の年代	59
(2)	2号墳の年代	59
2	古墳の階層性	60
3	古墳群の性格	60
図 版		

図 版 目 次

巻頭図版 坊主山1号墳主要出土遺物

- 図版1 1 1号墳遠景（南から）
2 1号墳周辺の削平状況（南から）
- 図版2 1 1号墳北側くびれ部埴輪出土状況（北から）
2 1号墳木棺検出状況（北西から）
3 須恵器出土状況（南東から）
- 図版3 1 三輪玉付大刀出土状況（北東から）
2 三輪玉出土状況1（北東から）
3 三輪玉出土状況2（北東から）
- 図版4 1 胡籬出土状況1
2 胡籬出土状況2
3 胡籬出土状況3（南東から）
- 図版5 1 金環出土状況
2 棺外北西部馬具出土状況（北西から）
3 棺外南東部銅鈴・鉄鐸出土状況（北西から）
- 図版6 1 2号墳遠景（南から）
2 2号墳西棺検出状況（南から）
- 図版7 1 西棺北側木口部検出状況（東から）
2 西棺検出状況（須恵器取り上げ後、南から）
- 図版8 1 2号墳東棺北部須恵器・馬具出土状況（南東から）
2 東棺南部鉄鏃・須恵器出土状況（東から）
3 東棺内耳環・歯牙出土状況
- 図版9 1 三輪玉付大刀
2 鉄 矛
3 金銅装鈎革上部飾板
4 三輪玉
- 図版10 1号墳出土鉄鏃（1）
- 図版11 1号墳出土鉄鏃（2）
- 図版12 1号墳出土鉄鏃（3）
- 図版13 1 1号墳出土鉄鏃（4）
2 鉄 斧
- 図版14 胡 籬
- 図版15 1 杏葉・不明金具（表）

- 2 杏葉・不明金具（裏）
- 図版16 1 杏葉・不明金具・鉸具
2 鐙金具
- 図版17 1 辻金具・責金具・不明金具
2 銅鈴・鉄鐸
- 図版18 金属製品X線写真（1 2号墳出土大刀、2 杏葉、3 鉄斧）
- 図版19 1 銅釧・金環
2 玉 類（1）
3 玉 類（2）
- 図版20 脚付子持壺
- 図版21 短頸壺・甕
- 図版22 円筒埴輪（1）（外面）
- 図版23 円筒埴輪（1）（内面）
- 図版24 1 円筒埴輪（2）（外面）
2 円筒埴輪（2）（内面）
- 図版25 1 朝顔形埴輪（外面）
2 朝顔形埴輪（内面）
- 図版26 形象埴輪基部（1）
- 図版27 1 形象埴輪基部（2）（外面）
2 形象埴輪基部（2）（内面）
- 図版28 1 形象埴輪基部（3）（外面）
2 形象埴輪基部（3）（内面）
- 図版29 形象埴輪（1）
- 図版30 形象埴輪（2）
- 図版31 1 形象埴輪（3）
2 1号墳出土埴輪
- 図版32 1 2号墳西棺出土大刀
2 2号墳西棺出土短刀
3 2号墳出土刀子、鑷子、不明鉄器
- 図版33 2号墳西棺出土鉄鏃
- 図版34 2号墳西棺出土須恵器
- 図版35 1 2号墳西棺出土台付壺
2 2号墳出土須恵器
- 図版36 2号墳東棺出土鉄鏃（1）
- 図版37 2号墳東棺出土鉄鏃（2）

- 図版38 2号墳東棺出土須恵器(1)
 図版39 2号墳東棺出土須恵器(2)
 図版40 1 2号墳東棺出土須恵器(3)
 2 2号墳東棺出土耳環
 3 土製丸玉

挿 図 目 次

坊主山古墳群の位置(築山製図).....	iii
図1 坊主山古墳群周辺の古墳分布図(豊島作成).....	2
図2 1・2号墳測量図(堤1965報告を一部改変し、北門製図).....	4
図3 1号墳木棺実測図(堤1965報告を一部改変し、豊島製図).....	5
図4 2号墳西棺実測図(堤1965報告を一部改変し、北門製図).....	7
図5 三輪玉出土状況図(豊島製図).....	10
図6 三輪玉の計測方法(豊島製図).....	10
図7 金銅装鈎革上部飾板実測図(豊島製図).....	10
図8 三輪玉の細部写真1(豊島撮影).....	10
図9 三輪玉の細部写真2(豊島撮影).....	10
図10 三輪玉付大刀実測図(豊島製図).....	11
図11 鉄矛実測図(漆原製図).....	12
図12 鉄鏃の型式(松島製図).....	14
図13 1号墳出土鉄鏃実測図(1)(豊島製図).....	14
図14 1号墳出土鉄鏃実測図(2)(静製図).....	15
図15 1号墳出土鉄鏃実測図(3)(静製図).....	16
図16 1号墳出土鉄鏃実測図(4)(豊島製図).....	17
図17 1号墳出土胡籜実測図(土屋隆史製図).....	19
図18 1号墳出土胡籜復元図(土屋隆史製図).....	21
図19 1号墳出土馬具実測図(1)(上野製図).....	23
図20 1号墳出土馬具実測図(2)(静製図).....	24
図21 1号墳出土馬具実測図(3)(上野製図).....	25
図22 1号墳出土銅鈴実測図(鈴木郁哉製図).....	27
図23 1号墳出土鉄鐸、鉄斧実測図(河田製図).....	30
図24 1号墳出土装身具実測図(豊島製図).....	32
図25 1号墳出土須恵器実測図(田口、土屋博史、古谷製図).....	34
図26 1号墳出土埴輪実測図(1)(泉製図).....	36

図27	1号墳出土埴輪実測図(2)(泉製図).....	37
図28	1号墳出土埴輪実測図(3)(泉製図).....	38
図29	1号墳出土埴輪実測図(4)(泉製図).....	39
図30	2号墳西棺出土大刀の把間(豊島撮影).....	44
図31	2号墳西棺出土大刀の鞘口(豊島撮影).....	44
図32	2号墳西棺出土大刀、短刀実測図(豊島製図).....	45
図33	2号墳西棺出土鉄鏃実測図(竹川製図).....	46
図34	2号墳出土工具実測図(金田製図).....	48
図35	2号墳西棺出土須恵器実測図(土屋博史製図).....	49
図36	2号墳東棺出土鉄鏃実測図(1)(豊島製図).....	51
図37	2号墳東棺出土鉄鏃実測図(2)(金田製図).....	52
図38	2号墳東棺出土耳環実測図(豊島製図).....	53
図39	坊主山古墳群出土ガラス小玉(1)(豊島撮影).....	54
図40	坊主山古墳群出土ガラス小玉(2)(豊島撮影).....	54
図41	坊主山2号墳東棺出土須恵器実測図(土屋博史製図).....	55
図42	南山城の首長系譜(杉本1992をもとに豊島作成).....	61

表 目 次

表1	1号墳の出土遺物.....	9
表2	三輪玉観察表.....	10
表3	銅鈴の分類と編年.....	28
表4	1号墳出土玉類観察表.....	33
表5	1号墳出土円筒埴輪観察表.....	37
表6	1号墳出土形象埴輪観察表.....	41
表7	2号墳の出土遺物.....	43
表8	2号墳東棺出土須恵器観察表.....	57
表9	坊主山古墳群の諸要素.....	60

第1章 報告書作成の経緯と経過

1 整理報告に至る経緯

坊主山古墳群は京都府宇治市広野町寺山に所在した古墳群で、1基の前方後円墳と2基の円墳で構成される。1964年に墓地の拡張と宅地開発に伴い、前方後円墳の1号墳と円墳の2号墳が発掘調査された。1号墳では後円部の埋葬施設から多くの副葬品、墳丘から埴輪が出土した。2号墳では2基の埋葬施設から多くの副葬品が出土した。これらの遺物は現在、京都府立山城郷土資料館に収蔵されている。

発掘調査の成果についてはすでに報告されているが（堤1965）、正式な報告書は刊行されていない。ただし、出土遺物の一部については個別に詳細な報告がなされている。1号墳出土の三輪玉付大刀については堤圭三郎による報告（堤1968）、森島康雄による報告がなされている（森島2013）。1号墳出土の胡籬については土屋隆史による報告がある（土屋2012）。これらの個別報告によって、坊主山古墳群出土品の重要性が認識され、全容の公表が望まれた。

本書の編者である豊島は古墳時代の刀剣を研究しており、三輪玉付大刀の復元検討にも関わった。2013年に山城郷土資料館に出土遺物の整理と報告書作成を打診したところ、快諾を得た。2013年6月より遺物を奈良大学文学部文化財学科に借用し、遺物整理作業を開始した。

2 作業の経過

2013年6月以降、大学の実習室で整理作業を行った。作業は原則として毎週月曜日から水曜日の午後、教員と学生が授業の空き時間と放課後に行った。遺物が多く、作業は予想以上に難航した。中心メンバーも卒業・修了して入れ替わったが、2018年度末に実測を終え、遺物を山城郷土資料館に返却した。2019年11月に牛嶋茂氏に依頼し、山城郷土資料館で遺物の写真撮影を行った。その後、報告書の編集作業に入り、2020年8月にすべての作業を終了した。

作業には多くの学生が参加したが、とくに重要な役割を果たしたのは下記の参加者である。

大江克己、清水早織、間所克仁、岩永祐貴、柴田拓也、土屋博史、泉 眞奈、田口裕貴、鈴木郁哉、静 幸穂、竹川可純、北門幸二郎、築山弥矢、古谷真人、古林舞香、上野あさひ、漆原尚輝、松島隆介、辛川あかり、小林友佳、中川恋歌、金田将徳、河田哲也。

遺物借用の手続き、保管中の遺物の閲覧等では森島康雄、松尾史子、細川康晴の各氏のお世話になった。また、整理作業中に遺構写真の存在が判明したので、森島氏からデジタルデータの提供を受け、一部を図版に使用した。さらに、遺構の実測図が京都府埋蔵文化財調査研究センターに保管されていることを福山博章氏からご教示いただき、それも借用した。しかし、概報に掲載された実測図以外は見当たらず、とくに2号墳東棺の出土状況図は発見できなかった。坊主山古墳群の調査は緊急調査であり、東棺の実測図が作成されなかった可能性もある。（豊島直博）

第2章 発掘調査の概要

先述したとおり、坊主山古墳群の調査内容はすでに概要が報告されているが、周辺の遺跡には触れられていない。そこで周辺の古墳について個別に紹介し、つぎに1965年の概要報告をまとめ、再報告したい。

1 周辺の古墳 (図1)

坊主山古墳群は、南山城最大級の古墳群である久津川古墳群の1支群に位置づけられる。杉本宏は久津川古墳群を大谷川扇状地に立地する中央群、その周囲の丘陵上に立地する周辺群、中央群北方丘陵上に散在する北群に区分しており(杉本1991:171頁)、坊主山古墳群は北群に属する。そこで、ここでは久津川古墳群北群の古墳について概観したい。

宇治一本松古墳 (4) 宇治一本松古墳は坊主山古墳群の東方約1.5kmの丘陵頂部に位置し、久津川古墳群では最も高い標高約130mに単独で存在する。1963年に京都府立城南高校地歴部によって発掘調査された。埋葬施設は長さ約5.3m、幅1mの竪穴式石室で、粘土棺床から割竹形木棺の使用が推定された。

出土遺物は銅鏡片1点、碧玉製管玉2点、鉄剣1点、鉄斧1点、鉞2点、刀子片2点、不明鉄



図1 坊主山古墳群周辺の古墳分布図
(国土地理院発行2万5千分の1地形図「宇治」を使用)

器2点、土師器、円筒埴輪片である。築造時期は前期後半に位置づけられる（山田1966）。

その後、宇治市教育委員会によって測量調査が行われ、一辺28mの方墳である可能性が指摘された（杉本1983）。さらに、1994年に古墳南東側尾根の追加測量が行われ、全長約61mの前方後円墳である可能性が指摘された（奥村1996）。

庵寺山古墳（3） 庵寺山古墳は坊主山古墳群の北東約700mに位置する。1944年の小林行雄らによる調査を含め、4回の発掘調査が行われている。直径56m、高さ9mの円墳である。墳丘は二段築成または三段築成で、葺石をもち、墳頂部に方形埴輪列を巡らす。

埋葬施設は長さ約9.6m、幅約5m、深さ約1mの粘土槨で、棺床の形状から箱形木棺と考えられる。副葬品には倣製対置式神獸鏡1点、大刀3点、短刀6点、剣2点のほか、斧、鉋、鑿、錐、刀子、鎌、穂摘具、鍬・鋤先、釣針、魚叉などの農工漁具が多数ある。埴輪には円筒埴輪、鱗付円筒埴輪のほか、蓋形埴輪、鞍形埴輪、家形埴輪、甲冑形埴輪などの形象埴輪がある。築造時期は古墳時代前期末頃に位置づけられる（荒川・魚津・内田1998）。

金比羅山古墳（2） 金比羅山古墳は坊主山1号墳の南に隣接する位置にある。1964年に宅地造成に伴い、京都府教育委員会による発掘調査が行われた。直径約40mの円墳で、葺石をもち、墳丘裾に円筒埴輪列を巡らす。

埋葬施設は墳頂部で2基の粘土槨、墳丘裾付近で2基、外堤上で1基の円筒埴輪棺を確認した。墳頂部の第1槨は南北約8m、東西約3m、深さ約1mの墓壙に、全長6.7m、幅90～80cmの割竹形木棺を安置する。棺内から斜縁二神二獸鏡と玉類、棺外から竪櫛、鉄製刀剣、農工具が出土した。第2槨は第1槨の西側に位置し、南北約4m、東西約2m、深さ約1mの墓壙に、全長約2mの組み合わせ式埴輪円筒棺を安置する。棺内から玉類、棺外から農工具が出土した。

出土遺物のうち、斜縁二神二獸鏡は「吾作明鏡」で始まる銘文をもつ舶載鏡である。また、農工具に蕨手刀子を含み、古墳の築造時期は前期末～中期初頭頃に位置づけられる（吉本1965）。

一里山古墳（5） 坊主山古墳群と谷を隔てた北側尾根の先端には一里山古墳があった。墳丘は消滅しているが、畑の中には円筒埴輪列があり、古墳の存在が推定できる（井上・山田1973）。

また、一里山古墳の東約300mで古相の円筒埴輪と朝顔形埴輪が採集されており（6）、前期古墳の存在が推定されている（鐘方1985）。

伊勢田塚古墳（7） 伊勢田塚古墳は坊主山古墳の北約1kmにある。1972年に城南高校地歴部によって調査された。墳丘は削平され、陶棺が直葬されていた。陶棺は四注式家形土師質陶棺で、副葬品等は出土していない（山田・北川1973）。

久津川古墳群北群の動向 以上が久津川古墳群北群の主要な古墳である。北群の築造は前期中頃の宇治一本松古墳に始まり、前期末頃の庵寺山古墳、中期初頭の金比羅山古墳と続く。中期中葉から後半には築造が中断し、それは久津川車塚古墳（13）、芭蕉塚古墳（11）など、南山城最大級の前方後円墳が築造された時期に当たる。本書で報告する坊主山古墳群は後期前半に属し、久津川古墳群では最後に築かれる古墳群として、その性格が注目される。

（豊島）

2 1号墳の調査の概要

古墳群の立地 坊主山古墳群の所在地は現在のJR奈良線新田駅の南東約200m、曹洞宗円蔵院の東方裏山にあたり、前方後円墳1基、円墳2基が丘陵尾根上に東西に並ぶ。調査に際し、東端の前方後円墳が1号墳、西へ向かって2号墳、3号墳と命名された。概要報告では破壊される1・2号墳のみを発掘調査し、3号墳は現状のままとされているが、現在では3号墳も確認できない。

墳丘の構造 1号墳は宅地造成に先立ち、1964年8月26日～9月16日まで発掘調査された。調査担当者は京都府教育委員会文化財保護課の堤圭三郎氏である。以下は堤氏による1965年の報告をもとに、豊島が編集した概要である。

1号墳は後円部径27m、前方部幅18m、全長45m、後円部高さ4m、前方部高さ2.5mの西向きの前方後円墳で、後円部頂の標高は53.5mである(図2)。後円部墳頂には直径1.5m、深さ1.5mの既掘孔が存在した。墳丘に円筒埴輪列はあったが、段築や葺石は認められない。

埴輪は後円部東南と、北側くびれ部で確認された。後円部東南では円筒埴輪の底部が2個体出土し、幅約30cm、深さ10cmの溝を掘って樹立されていた。北側くびれ部では11個体の円筒埴輪が確認された(図版2-1)。前方部と後円部の接続部では墳頂寄りに約20cm離れて1個体の円筒埴輪が樹立され、付近に家形埴輪の破片が多数散乱していた。このほか、前方部中央付近とくびれ部で人物埴輪と動物埴輪片が発見された。

埋葬施設の構造 後円部中央に主軸を北西にとる木棺が存在した(図版2-2)。墓壙は確認されず、盛土の上に2本の枕木状の木材を置き、その上に木棺を安置し、さらに盛土をする。ただし、木棺直上には黄色みを帯びた砂質土を薄く敷いた痕跡があるとされている。木棺は木質の

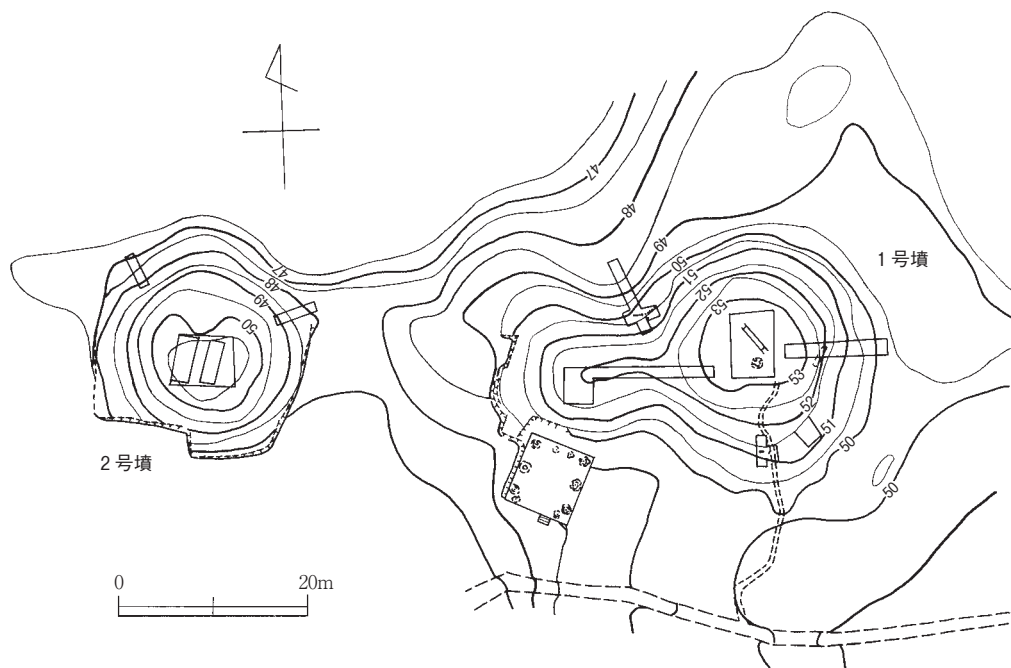


図2 1・2号墳測量図

痕跡によりほぼその大きさが確かめられた。側板の長さ3.6m、小口板は側板の端よりやや内側にあり、両小口板間の長さは3.0mであった。幅は南端で0.6m、北端で0.55mである。

遺物の出土状況 棺内の副葬遺物は金環2点、玉類多数、銅釧1点、鉄斧1点、大刀1点、三輪玉13点、鉄鏃一括である。棺外遺物は須恵器脚付子持壺1点、須恵器甕1点、銅鈴2点、鉄鐸1点、鉄矛1点、馬具一括である（図3）。

棺内遺物の鉄斧は南側小口板の内側0.5mの位置にあり、顎と思われる骨片が付着し、周囲には臼歯が遺存していた。また、管玉、丸玉、勾玉などが緒に繋がれた状態で出土した。したがって、南に頭部を置く伸展葬であったと推測される。銅釧は棺中央よりやや南寄りの東側にあり、付近には水晶切子玉があった。右腕に装着されていたものであろう。

大刀は棺南部西側寄りにあり、刃の部分の内側に、切先を北に向けて置かれていた。三輪玉は把の内側約10cmの位置に、把とほぼ併行に10点、さらにその下に把と直角に3点、計13点が出土した。三輪玉は刀身に近い方が大きく、把頭の方ほど小さいものであった（図版3）。

鉄鏃は約50点が束になって胡籐に収められていた。玉類は水晶丸玉、切子玉、ガラス管玉、丸玉、小玉、碧玉製勾玉などで、小玉は床面いっばいに散乱し、丸玉は胡籐の南部に集中して発見された。

棺外遺物のうち、須恵器は南側小口板の外側に接してあり、東側が脚付子持壺、西側が甕であった（図版2-3）。銅鈴2点は南側小口板から45cm離れた位置にあり、木箱に収められていたようで、木質の痕跡が認められた。

鉄鐸は銅鈴2点の間で出土した（図版5-3）。矛は南側小口板付近の棺上に、切先を南に向けて置かれていた。馬具類は北側小口板の外側に置かれ、一部は攪乱されていた（図版5-2）。

前方部では埋葬施設を確認できなかったが、後円部東側斜面に白砂を用いた施設があることが、ブルドーザーによる削平工事中にわかった。東側から削っているうちに断面に厚さ10cmの白砂の層が発見され、周囲から須恵器短頸壺2個が出土した。墳頂部からの距離は5.9m、深さ3.0m

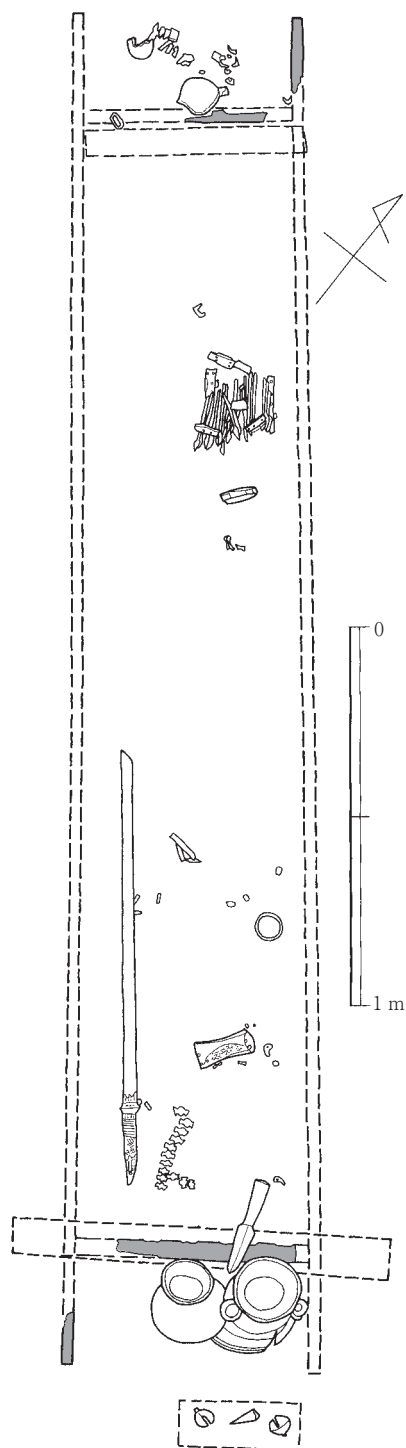


図3 1号墳木棺実測図

で、主軸は墳頂部の施設とほぼ直角であることがわかった。ただし、断面には墓壙の線が見られず、その性質を明らかににはできないが、埋葬施設であることは間違いない。

3 2号墳の調査の概要

調査の経緯と経過 2号墳は1号墳の西約20mに位置する円墳である。1964年5月初旬に京都府立城南高校の山田良三教諭から、2号墳が工事により破壊されそうだという知らせを受け、京都府教育委員会文化財保護課による緊急調査が行われた。調査は5月15日に開始され、6月23日に終了した。調査担当者は堤圭三郎氏である。

墳丘の構造 2号墳は東西南の三方を墓地のために削られていて、現存の大きさは東西22m、南北24mであるが、本来は直径約25mの円墳であったと思われる。残存する高さは3mであった(図2)。発掘前には墳頂部北寄りに土取をしたと思われる直径約2m、深さ約1mの穴があった。外部施設としての葺石、埴輪列の存在は認められなかった。

東棺の構造と遺物出土状況 埋葬施設は東西に並んで2基あった。東側の埋葬施設は地表下約1.5mにあるやや赤みを帯びた黄色土層(地山)をわずか20cmほど掘り込んで、その中に長さ3m、幅0.7mの組み合わせ式木棺を安置していた。

棺内遺物の遺存状態は良く、2体の人体を埋葬したことが遺存した臼歯によって判明した(図版8-3)。1体は北を枕にして伸展の位置に人骨片が遺存していた。棺内遺物は銅環2点、鉄環2点がそれぞれ対にあり、頸部にはガラス小玉2種、棺中央に土製丸玉、切先を南に向けた鉄鏃一括(図版8-2)、さらに棺南端に蓋付埴1点であった。鉄鏃は東にして靫に収められていたものであろう。また、棺材の一部が鉄鏃の付近と南端部に見られ、朱の痕跡も各所にあり、とくに歯には鮮やかな朱の付着したものがあった。

棺外遺物は棺の北部、南部の2カ所にあり、北部は棺床より約50cm高く、南部は約25cm高かった。北部では須恵器埴2点、杯2点と馬具と思われる鎖状の鉄片(図版8-1)、南部では高杯2点(1は有蓋)、杯11点であり、いずれも原位置を保っていると思われる。

棺の覆土にとくに精良な土砂を用いたことは認められず、直接礫を含んだ土砂を置いたと思われる。これらの封土の中には須恵器、土師器の細片が多数含まれていた。

西棺の構造と遺物出土状況 西側の埋葬施設は東側よりも約1.1m深く、地表下約2.6mの深さにあった。地表の腐植土を除去したところ、ただちにU字状の断面をもつ灰色土が現れ、墓壙の存在を暗示した。この灰色土は褐色土と交互に層をなし、かなり深部に達することが予想されたので、墓壙の壁面を探しながら掘り下げた。

墓壙は表土下で長さ5.6m、幅2.4m、底部で長さ4.6m、幅1.9mの大きなもので、内部主体は組み合わせ式木棺と思われる(図4、図版6-2)。木棺の両端には明灰色の精良な粘土塊が木口板をふさぐように置かれており、それはあたかも蒲鉾を厚く切ったような形を呈していた(図版7-1)。しかも、木棺の両側板がこの粘土塊をはさむような形であったから、この粘土塊は木棺安置の後、その木口にはめこまれたと考えられる。したがってその上面が蒲鉾形の曲線を描

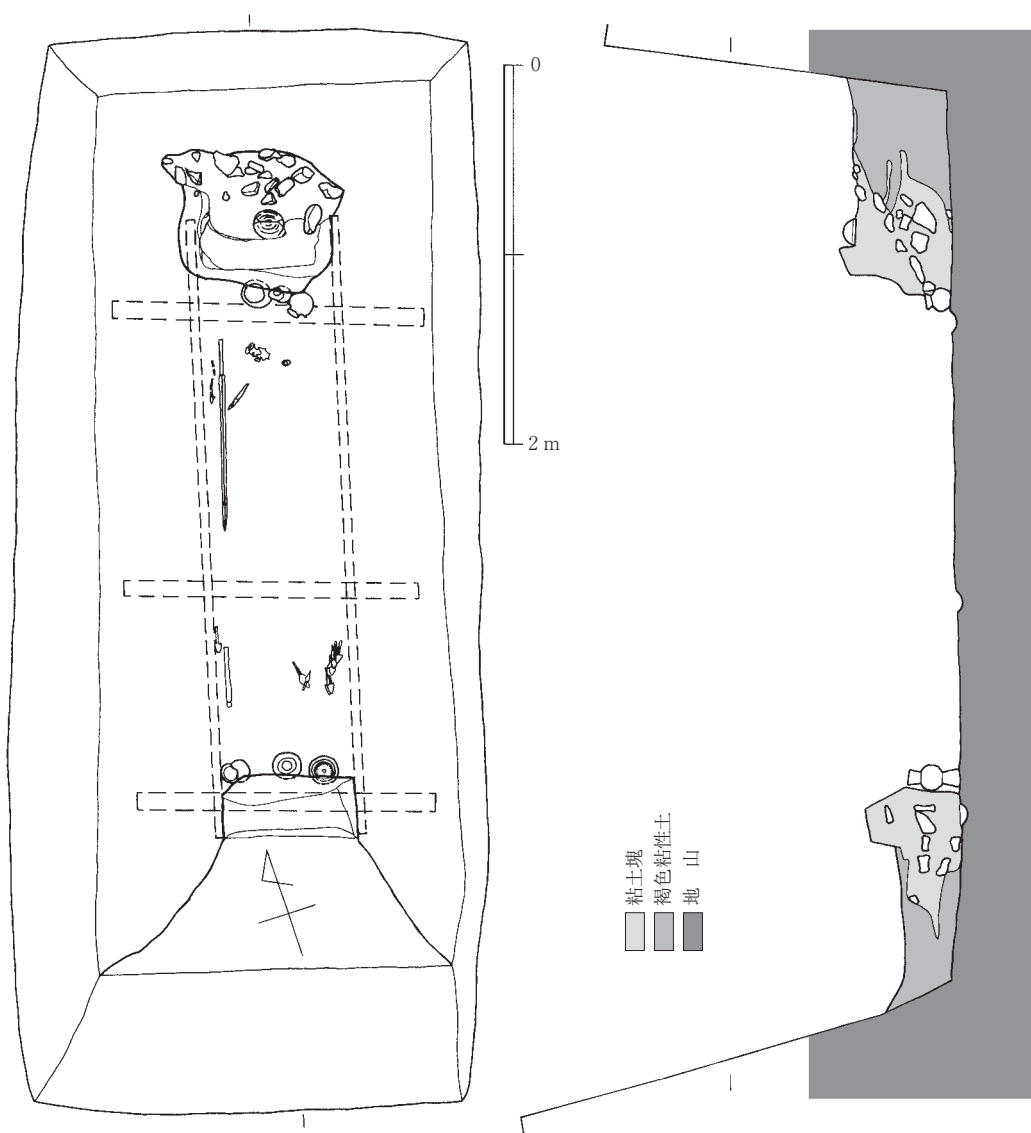


図4 2号墳西棺実測図

くことは、木棺の蓋が水平な板ではなく、丸太の曲面を残したものであったと考えられる。なお、この粘土塊の中には拳大の河原石が多数詰め込まれていたが、これは粘土を節約するためよりも、むしろ粘土を固めるための措置であったと思われる。さらに、北側の粘土塊は、蒲鋒形の塊の北方に河原石を混ぜ、次第に高く墓壙壁面まで続いていた。

床面には朱の痕跡があり、それを追求すると、木棺に直交する半円状の断面をもつ溝が3本発見された。溝の中には黒褐色の腐蝕質のものがあり、その底部は非常に固くしまっていたので、これらは木棺を安置する際に直接土の上に置かず、3本の丸太か半円状の棒の上に置いたものと思われる。それぞれの長さは北から165cm、155cm、155cmであった。

木棺材の痕跡も各所で見られ、とくに南側粘土塊の内側では2点の台杯壺の肩の部分に木棺の木口板の痕跡と思われる主軸に直角な木質が付着していたので、木棺の長さを決める手がかりが得られた。すなわち、両木口板間の長さが2.7m、幅0.7m、高さは北で0.6m、南で0.5mあり、

木棺の蓋は丸太の曲線をもった組み合わせ式であったと思われる。床面の高さは南北ともほぼ同じであった。

棺内出土の遺物は、北端に須恵器壺2点、提瓶1点、南端に台付壺2点（1点は有蓋）、壺1点、北部に金環1点、北部西側に刃部を上、切先を南に向けた直刀1点、鉄鏃2点、棺中央よりやや南に刀子、鉄鏃一括等であった。なお、金環の出土した頭部付近には緑錆が発見された。これは薄い金銅板で、装身具と考えられるが、原形を推し量ることはできなかった。

棺外遺物として現状を保って出土したものに、北側粘土塊の上に2点重ねて伏せて置かれた須恵器蓋杯があった。

さらに、木棺安置後、その被覆に使われた灰色土と黄褐色土の互層の中からは、小さく割れた須恵器破片多数が発見された。これらはいずれも完全に復元することはできないが、その器形を推し量ることができる程度で、埋葬の途中に故意に投入されたと考えられる。

古墳群の年代 坊主山古墳群はいずれも古墳時代後期の特色を備えている。1号墳の年代を6世紀前半と考えると、2号墳はそれよりやや下ると考えられる。両古墳の付近には、坊主山1号墳とほぼ同じ時期に発掘調査を行った金比羅山古墳、1961年に調査された西山古墳群、さらに古くから知られた車塚古墳をはじめとする久津川七ツ塚古墳など数多くの古墳があり、南山城の一大古墳群として著名である。今回発掘調査を行った坊主山古墳群についても、これらの多くの古墳群との関連において考察されねばならない。さらに、個々の出土遺物の考察、正確な築造年代などについては、遺物の十分な整理を経て考察すべきである。

(堤1965報告を豊島要約)

第3章 1号墳の出土遺物

1 出土遺物の種類と数量

概報によれば、1号墳では棺内から武器約50点（三輪玉付大刀1点、鉄鏃約50点）、武具（胡籥）1点、工具（鉄斧）1点、装身具（銅釧1点、金環2点、碧玉勾玉1点、水晶丸玉、切子玉、ガラス管玉、丸玉多数、小玉多数）、棺外から武器（矛）1点、馬具一括（杏葉など、銅鈴2点、鉄鐸1点）、須恵器2点（子持台付壺1点、甕1点）、墳丘から須恵器2点（埴）、埴輪（円筒埴輪13点、家形埴輪、人物埴輪、動物形埴輪）が出土したと報告されている。

その後、遺物や出土状況を検討した結果、いくつか概報とは異なる点が明らかになった（表1）。まず、金環2点は棺の両側の離れた位置で出土しており（図版5-1）、指輪の可能性が高い。丸玉と小玉については、糸に通して一括で保管されているが、注記等はなく、1号墳と2号墳のものを区別できなかった。銅鈴と鉄鐸は近接して出土している。馬に付けられる共鳴具と考え、馬具に含めて報告する。埴輪では、円筒埴輪の総量は概報の出土状況写真に比べて少ない。すべての円筒埴輪を取り上げていないと思われる。形象埴輪では家形埴輪、盾形埴輪、人物埴輪、鶏形埴輪、馬形埴輪の存在が判明した。（豊島）

表1 1号墳の出土遺物

位置	種類	器種	概報	現 状
棺内	武器	大刀	大刀1、三輪玉13	大刀1、三輪玉13、鈎草上部飾板1
		鉄鏃	約50	平根鏃7、長頸鏃48
	武具	胡籥	1	1
	工具	鉄斧	1	1
	装身具	銅釧	1	1
		金環	2	指輪2
		碧玉勾玉	1	ヒスイ勾玉1
		水晶丸玉		瑪瑙丸玉1
		切子玉		多角形ガラス玉3、円柱状ガラス玉1
		ガラス管玉		ガラス管玉9
	丸玉	多数	帰属不明	
	小玉	多数	帰属不明	
棺外	武器	鉄矛	1	1
	馬具	杏葉など	一括	杏葉3、鞍金具3、鎧金具6、辻金具17、責金具9、不明金具4
		銅鈴	2	2
		鉄鐸	1	1
	須恵器	脚付子持壺	1	1
	甕	1	1	
墳丘	須恵器	埴	2	2
	埴輪	円筒埴輪	13	胴部13、底部2
		形象埴輪	家、人物、動物	家、盾、人物、鶏、馬

2 武器

(1) 大 刀 (図10、図版9)

①大 刀

図10は棺内から出土した三輪玉付大刀である。全長118.5cm、身の最大幅4.5cm、厚さ0.9cm、茎の長さ21.0cmで、極めて大型の大刀である。切先はゆるやかな曲線を描く。関は二段で、茎尻は隅切尻である。茎に直径0.3cmの目釘穴を2カ所もつほか、関付近に直径0.4cmの鑷本穴をもつ。

堤圭三郎による報告では、出土した当初は木製把の痕跡が良く残り、把間には糸が巻かれている様子が窺える (図5、堤1968: 9頁)。現状では茎と刀身の一部に木質がわずかに付着するのみで、装具の構造は不明である。

表2 三輪玉観察表

番号	最大幅	中央幅	中央高	備 考
M1	3.4	2.9	1.6	表面に漆状のもの付着
M2	3.4	2.8	1.5	両側に紐付着、裏面に鑄バリ
M3	3.5	2.7	1.4	両側に紐付着、裏面に鑄バリ
M4	3.4	2.6	1.3	両側に紐付着
M5	2.9	2.4	1.3	両側に紐付着、一部にスが入る
M6	2.9	2.4	1.3	両側に紐付着
M7	2.9	2.4	1.2	片側に紐付着
M8	3.0	2.3	1.3	両側に紐付着
M9	2.9	2.1+	1.2	一部欠損、両側に紐付着
M10	2.8	2.3	1.2	両側に紐付着
M11	2.8	2.3	1.1	両側に紐付着
M12	3.0	2.3	1.4	片側に紐付着、片側に布付着
M13	2.7	2.0	1.1	片側に紐付着、裏面に鑄バリ

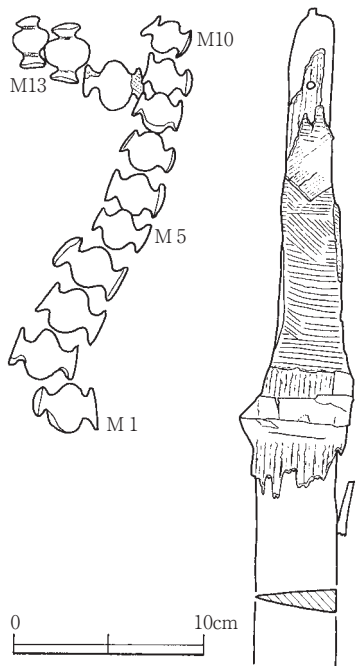


図5 三輪玉出土状況図

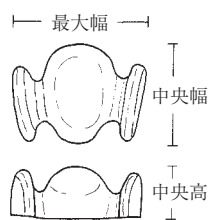


図6 三輪玉の計測方法

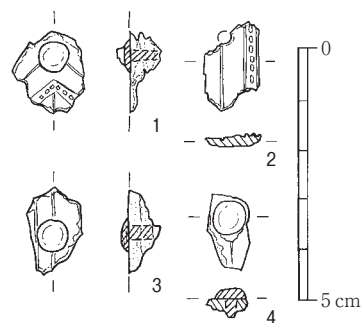


図7 金銅装鈎革上部飾板実測図



図8 三輪玉の細部写真1



図9 三輪玉の細部写真2

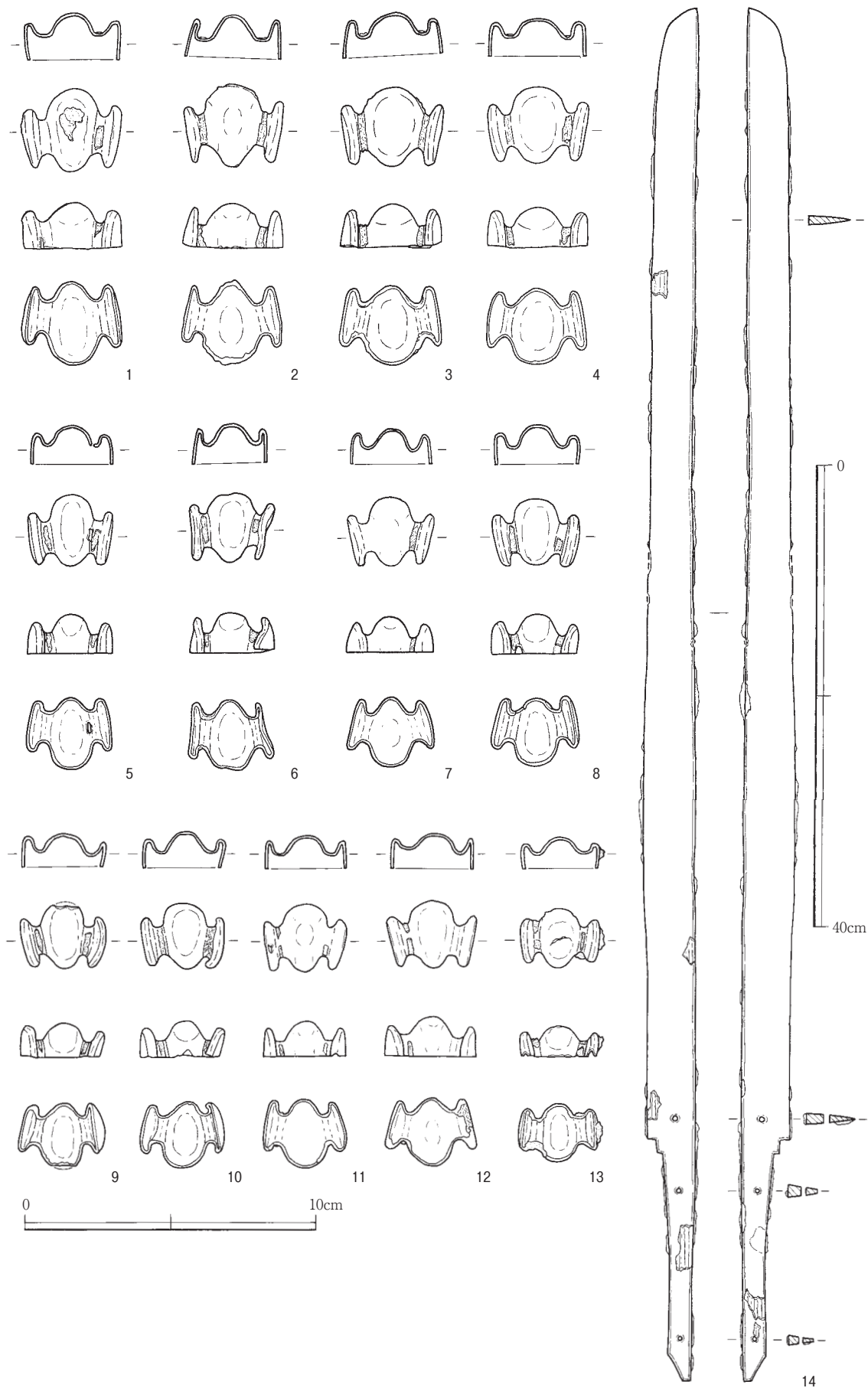


図10 三輪玉付大刀実測図

②三輪玉

図10-1~13は金銅製三輪玉である。三輪玉は把の刃部側で13点が整列して出土し、堤圭三郎はそれらにM1~M13の番号を付して報告した(図5、堤1968)。現状でも1~13の注記がされており、それを踏襲する。

表2に三輪玉の法量をまとめた。最大幅は2.7~3.5cm、中央幅は2.0~2.9cm、中央高は1.1~1.6cmで、刃部側から把頭側に向かって次第に小さくなる。多くの個体は連結部に紐の痕跡が残り、紐で鈎革に結ばれていたことがわかる。M10では、紐は2本の繊維を交互に編んだように見える(図8)。

また、M5は連結部付近に铸造時のスと思われる隙間が空く。さらに、M2、M3、M13では裏面の端部に鑄バリのようなものが見える(図9)。これらから、三輪玉は铸造品の可能性が高い⁽¹⁾。

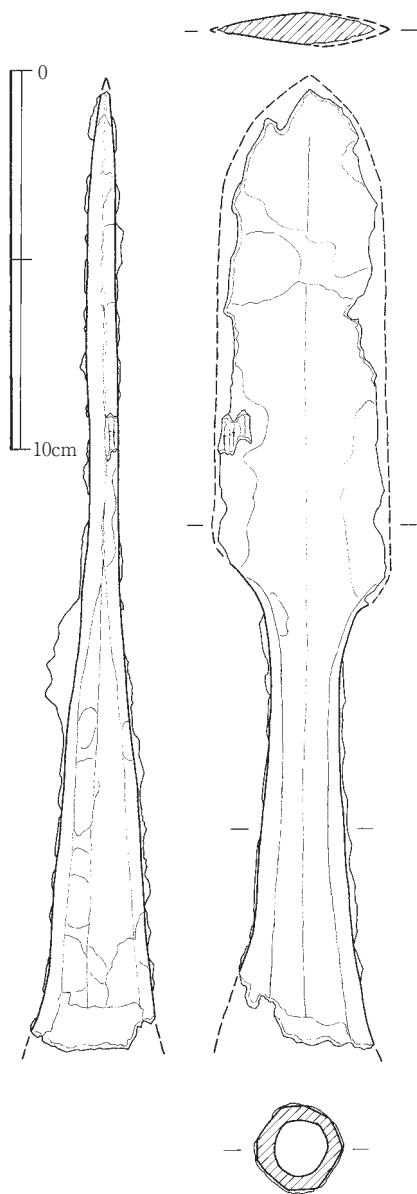


図11 鉄矛実測図

③金銅装鈎革上部飾板

図7-1~4は骨角製刀装具片である。いずれも片面が平坦な板状の骨片に、直径0.7cmの鉄地金銅張の鋌を打ち込む。1は直線の沈線の交点に鋌を打ち、2本の突線と列点文を浮き彫りにする。2は鋌を欠くが、鋌を打ち込んだ穴が残る。1と同様、沈線と、2条の突線に囲まれた列点文を浮き彫りにする。3・4は沈線による直線文のみが認められる。

すでに森島康雄が報告したとおり、これらは鈎革の裏面に取り付けられた装飾板の破片と考えられ(森島2013)、深谷淳は鈎革上部飾板と呼ぶ。深谷の研究によれば、長野県溝口の塚古墳(佐々木・澁谷編2001)、大阪府峯ヶ塚古墳(下山・吉澤編2002)で類例が出土している(深谷2008)。

(豊島)

(2) 鉄矛(図11、図版9-2)

1号墳出土鉄矛 図11は棺外から出土した鉄矛である。切先と袋部端部を欠き、残存長は25.3cmである。刃部の残存長は12.6cm、刃部の最大厚は0.8cmである。刃部の断面形状は薄い菱形を呈し、中央に鑄が形成される。関の大きさは1.3cmで、ゆるやかな曲線を描く。

袋部の残存長は10.8cm、最大幅が3.2cmで、関から袋部端部へ緩やかに広がる。袋部の端部を欠き、袂りの

有無は確認できない。袋部の断面形は八角形で、袋部の合わせ目は確認できない。袋部に目釘穴らしきものは認められない。

刃部の一部に木質が付着するが、鞘ではなく棺材の一部とみられる。また、袋部の内面に有機質が付着し、柄の痕跡と考えられる。

鉄矛の位置づけ 本例は刃部の形態が臼杵勲による分類の広鋒鑄造り、袋部の形態が有関八角袋に当たり、4世紀後葉～5世紀に盛行する型式とされる（臼杵1985）。また、袋部の断面形は高田貫太による分類の多角形袋式に当たり、高田編年Ⅱ期（5世紀中葉～6世紀前半）に位置づけられる（高田1998）。矛の出土位置に目を向けると、1号墳では大刀、鉄鏃など、他の武器はすべて棺内から出土している。いっぽう、鉄矛は棺外（棺上）に配置されている。高田はこうした配置を「僻邪」の意味をもつ配置であると考えている（高田1998：57頁）。

また、1号墳の鉄矛は袋部の断面形が八角形を呈し、百濟・大伽耶系の鉄矛である（朴1995）。多角形袋式鉄矛は日本列島では熊本県江田船山古墳（本村1991）、福岡県塚堂古墳（児玉1990）、京都府宇治二子山古墳南墳（杉本編1991）、和歌山県大谷古墳（樋口・西谷・小野山1985）、埼玉県埼玉稲荷山古墳（斎藤ほか編1980）などの出土例が挙げられる。いずれも有力な首長の古墳で、垂飾付耳飾や馬具と共伴している。1号墳でも銅釧、金環（指輪）、鉄鐸などの渡来系文物が出土しており、鉄矛もその一環として理解できる。

（辛川あかり）

（3）鉄 鏃（図13～16、図版10～13-1）

1号墳では胡縁に納められた状態で、平根系鉄鏃7点と長頸鏃48点が出土した。以下では川畑純の分類に準じ（図12、川畑2015）、鉄鏃について報告する。

①平根系鉄鏃

大型定角2式（図13-1～3） 川畑分類の大型定角2式の一群である。全長10.6cm～11.4cm、身部長は7.2cm～8.2cm、身部幅は3.1cm～3.3cmの個体群である。3点とも茎の先端を欠く。刃部断面は両丸造り、鏃身下半部および茎部断面は方形をなす。刃部がわずかに膨らみ、刃部関はナデ関、茎関は角関である。3は矢柄が残存する。1、3は漆の付着が認められる。

有頸平根B式（図13-4～7） 川畑分類の有頸平根B式の一群である。すべて腸袂基部から腸袂部分を欠損している。最も残りのよい4は腸袂以外が残存し、全長10.9cm、身部長3.6cm、身部幅2.2cm、頸部長3.2cm、茎部長4.1cmで、他の3個体よりも小型である。5～7は腸袂や茎部を欠損する。身部長6.2～6.5cm、身部幅2.8～3.1cm、頸部長2.0～4.7cm、茎部残存長は2.4～2.7cmである。身部は両丸造りで、頸部断面および茎部断面は方形をなす。関部は角関（4、7）と棘関（5、6）である。4、7は茎部に矢柄が残存する。5、6は布の痕跡が認められる。

②長頸鏃（図14～16）

長頸鏃は48点あり、川畑分類の長頸A1、A2、B1、B2式が含まれる。

長頸A1式（9、10、14、16、18～21、23～28、30、31、40、44～52、55） 鏃身関が直角で

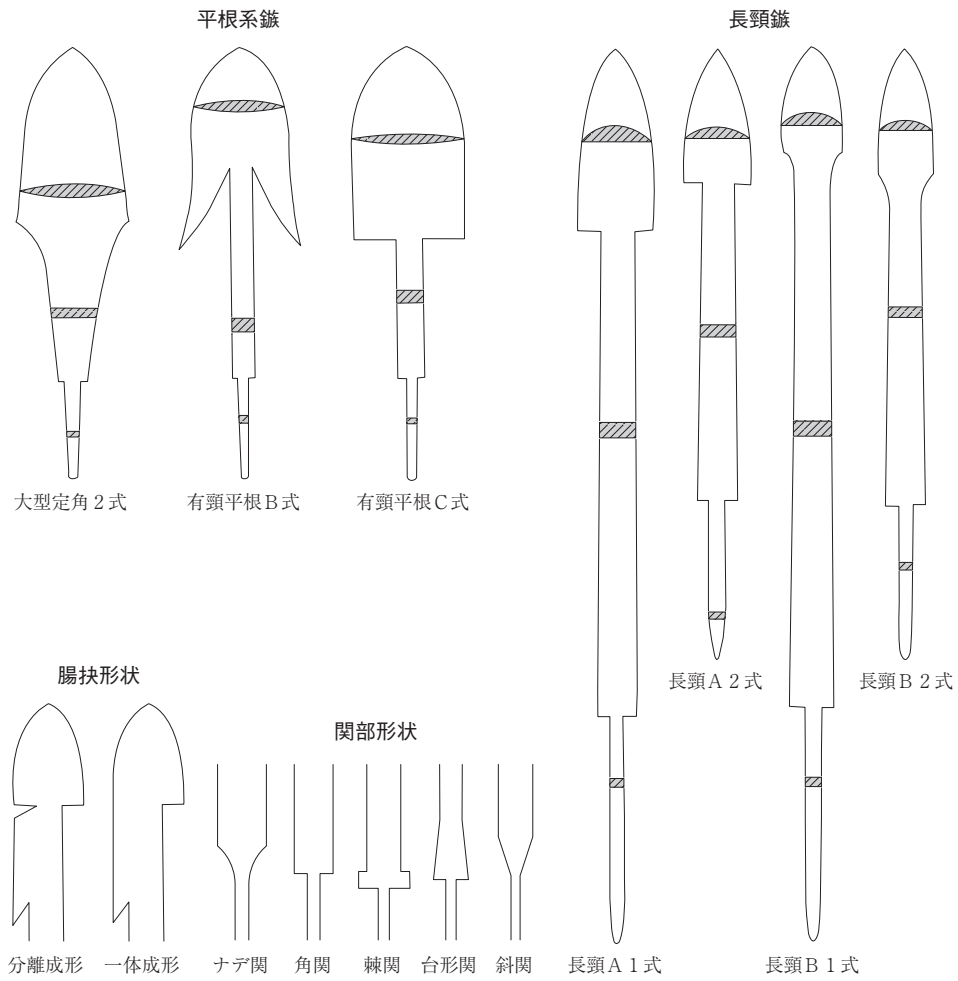


図12 鉄鋤の型式

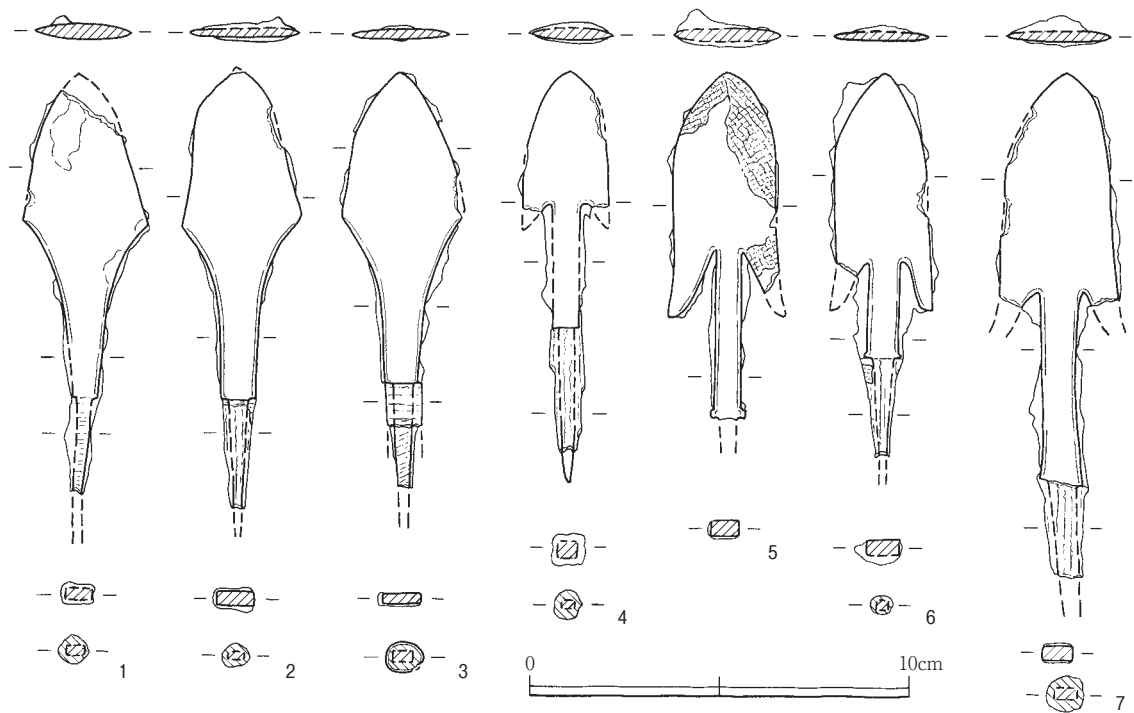


図13 1号墳出土鉄鋤実測図(1)

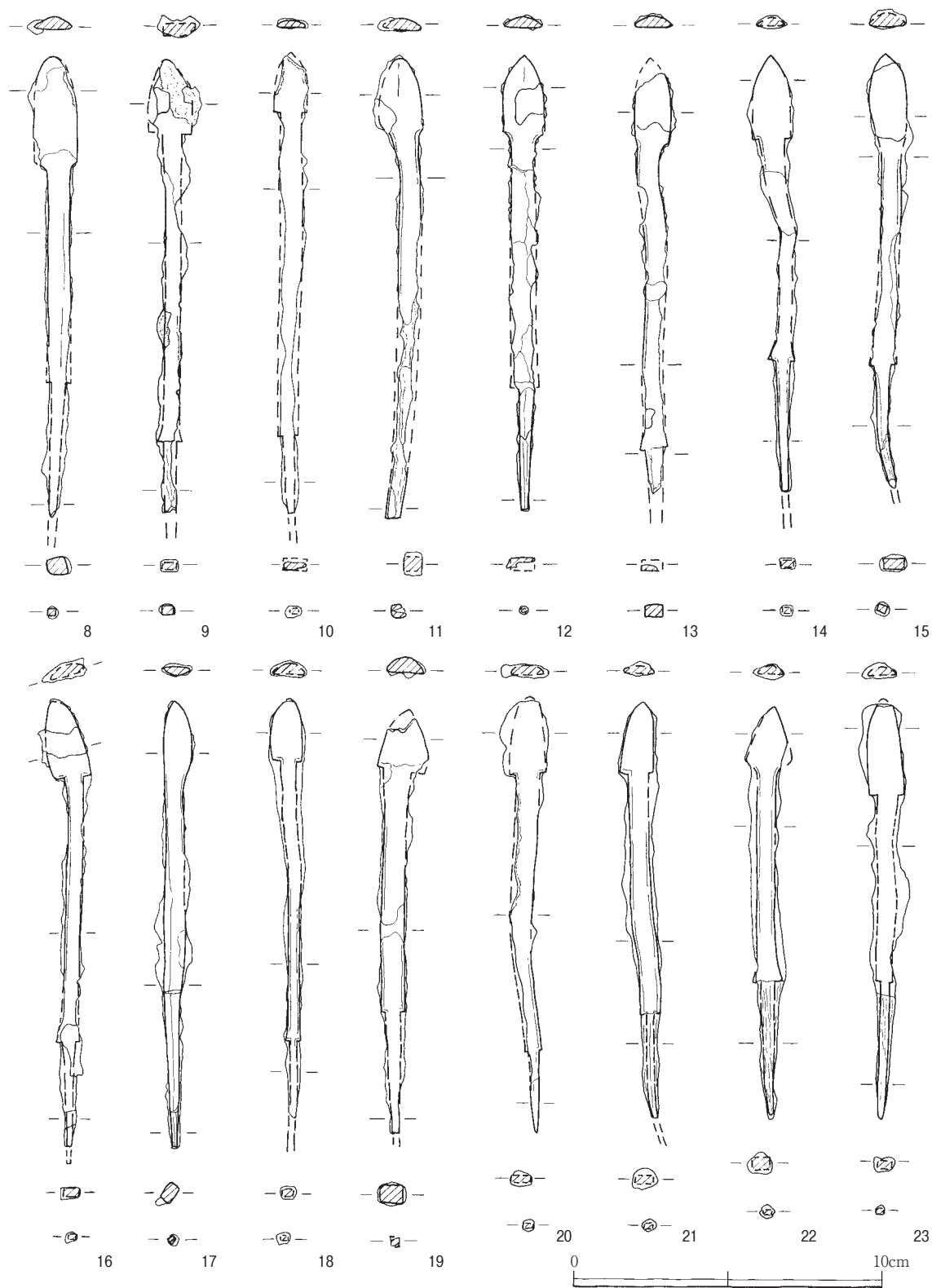


図14 1号墳出土鉄鏃実測図(2)

全長13.5cmを超える一群。完形品は11点(20、23~26、28、40、44、46、49、52)あり、全長13.5~17.6cm、身部長1.9~4.3cm、身部幅0.9~1.8cm、頸部長5.7~8.9cm、茎部長2.2~7.3cmである。身部は片丸造り、頸部断面および茎部断面は方形をなす。関部形状は角関が多く、

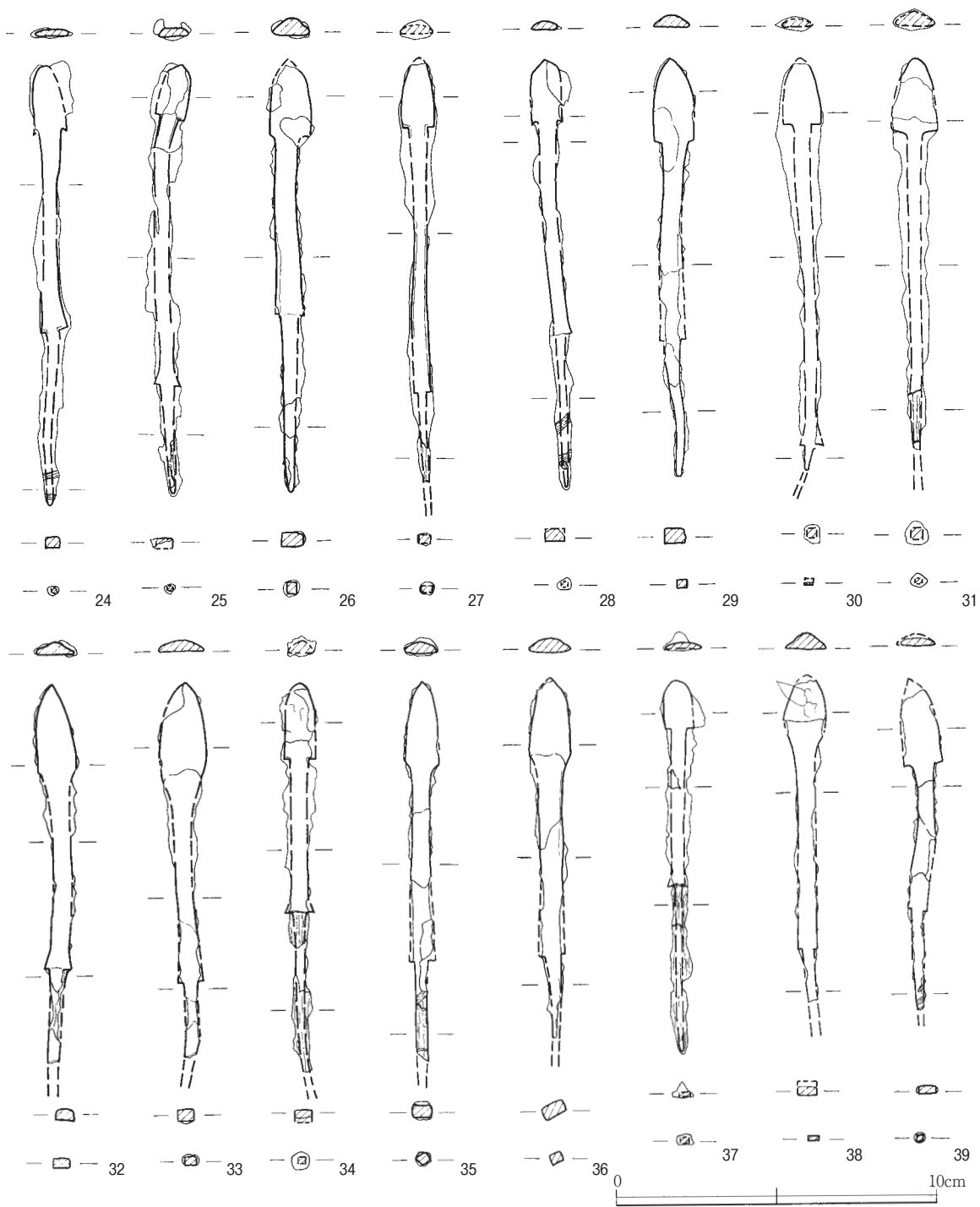


図15 1号墳出土鉄鏃実測図(3)

14や16のような台形関、46のような斜関も混在する。47は頸部に布の痕跡が認められる。また、53に胡籐の一部と考えられる漆の付着が認められる。16、24、28、44、46、48は矢柄の下に樹皮を巻き付けた痕跡が残る。

長頸A2式 (29、34、37、39) 刃関が直角で全長13.5cm未満の一群。完形品は2点(29、37)あり、全長11.6~13.1cm、身部長1.9~2.6cm、身部幅1.1~1.3cm、頸部長4.2~5.9cm、茎部長4.6~5.5cmである。身部は片丸造り、頸部断面及び茎部断面は方形をなす。関部形状に

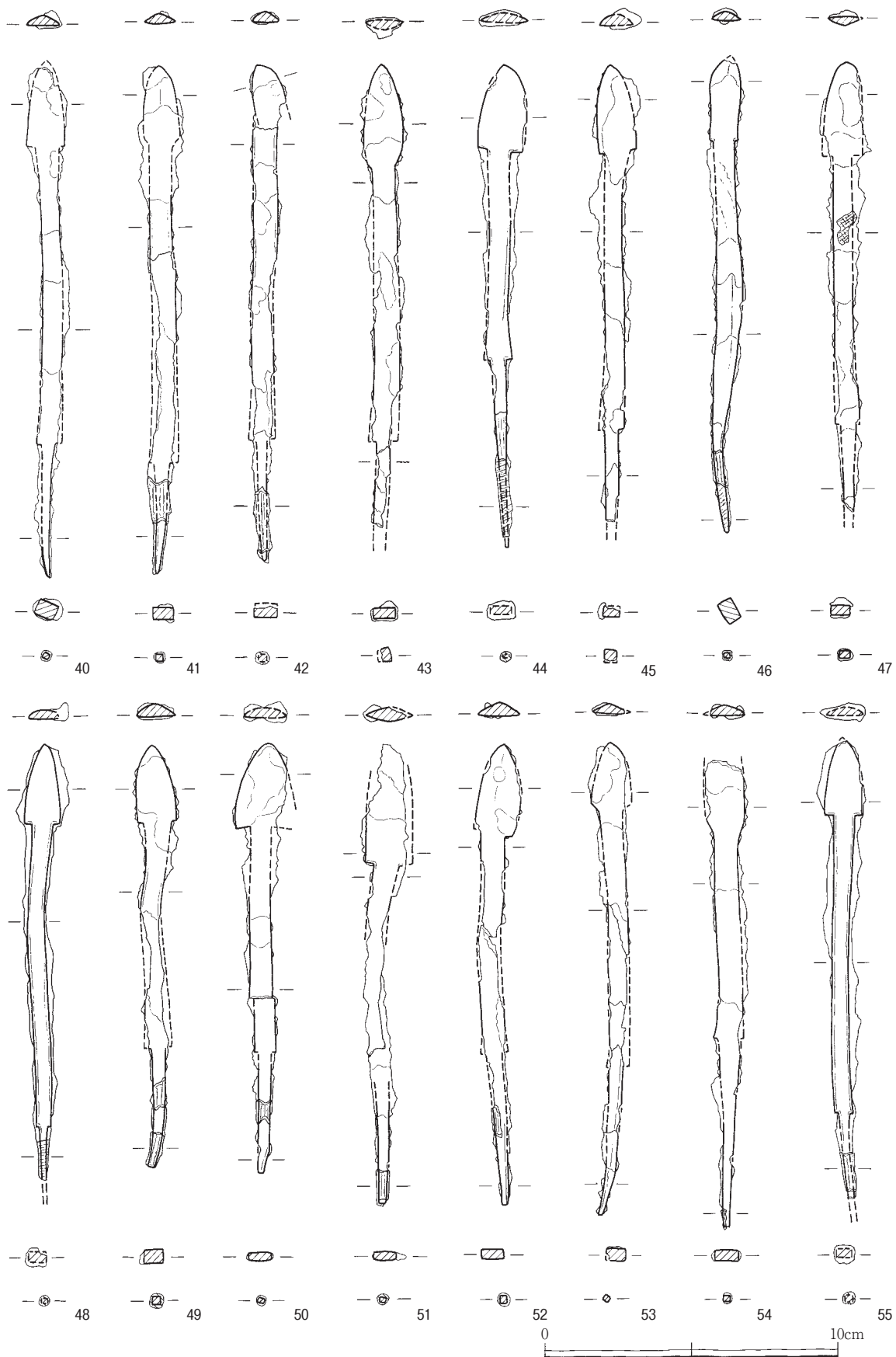


図16 1号墳出土鉄鏃実測図(4)

3 武具（胡籙）

は角関（39）と台形関（34、37）のものがある。39には漆の付着と茎の樹皮巻きが認められる。

長頸B1式（8、11～13、15、17、22、32、33、41、43、53、54） 刃関がナデ関で全長13.5cm以上の一類。完形品が5点（11、12、17、41、53）ある。全長14.1～15.1cm、身部長2.7～3.2cm、身部幅1.1～1.7cm、頸部長7.1～10.6cm、茎部長3.5～3.9cmである。身部は片丸造り、頸部断面および茎部断面は方形をなす。関部形状には角関（8、15、33、54）、台形関（13、32）、斜関（17）のものがある。41に漆の付着が認められる。

長頸B2式（22、35、36、38） 刃関がナデ関で全長13.5cm未満の一類。いずれも茎部を欠損する。残存長10.1～11.9cm、身部長2.2～3.0cm、身部幅1.1～1.4cm、頸部長4.0～5.8cm、茎部残存長2.8～3.9cmである。身部は片丸造り、頸部断面および茎部断面は方形をなす。関部形状は3点（33、36、38）が角関、22が台形関である。35は茎に樹皮巻きが認められる。

（松島隆介）

3 武具（胡籙）（図17、図版14）

先述したように、坊主山1号墳出土胡籙については土屋隆史による詳細な検討と報告がなされている（土屋2012）。本書では事実報告の部分を再録する。復元図も再掲するが、紙数の都合により、復元の根拠となる他の資料との比較については土屋2012文献を参照されたい。

（1）金具組成

1号墳出土の胡籙は、土屋による分類の短冊形B2類吊手金具、収納部金具Bb類（帯形金具B類、山形突起付帯形金具）、円頭形勾玉状金具から構成される短冊形B群である（土屋2011）。短冊形B群は、日本列島では23個体が出土しており、朝鮮半島では百済、大加耶に確認される。以下で各金具を詳しく検討してみよう。

（2）出土状況（図版4）

棺内北東側、被葬者の足元右側から、胡籙金具と鉄鏃約50本が出土している。鉄鏃は胡籙に収められており、束の状態となって出土している。胡籙は、北側を上にして置かれている。底には、半円形の底板が遺存している。

山城郷土資料館には胡籙の出土状況写真が保管されており、図版4-1は発掘過程の様子である。上段に帯形金具B類（図17-3）、中段には山形突起付帯形金具（図17-4）、下段には山形突起付帯形金具（図17-6）が確認できる。中段の金具は山形突起を下向きに、下段の金具は山形突起を上向きにしている。上・中・下段の金具はほぼ均等の間隔を置いて出土している。現存している金具との比率からみて、各段の金具間隔は約12cm、上段から下段までの長さは約30cmである。図版4-2、4-3は完掘後の様子である。図版4-2からは、短冊形B2類吊手金具の左側の部位が確認できる。また、図版4-3からは、下段の山形突起付帯形金具が半円形の底板に装着された状態で出土したことがわかる。

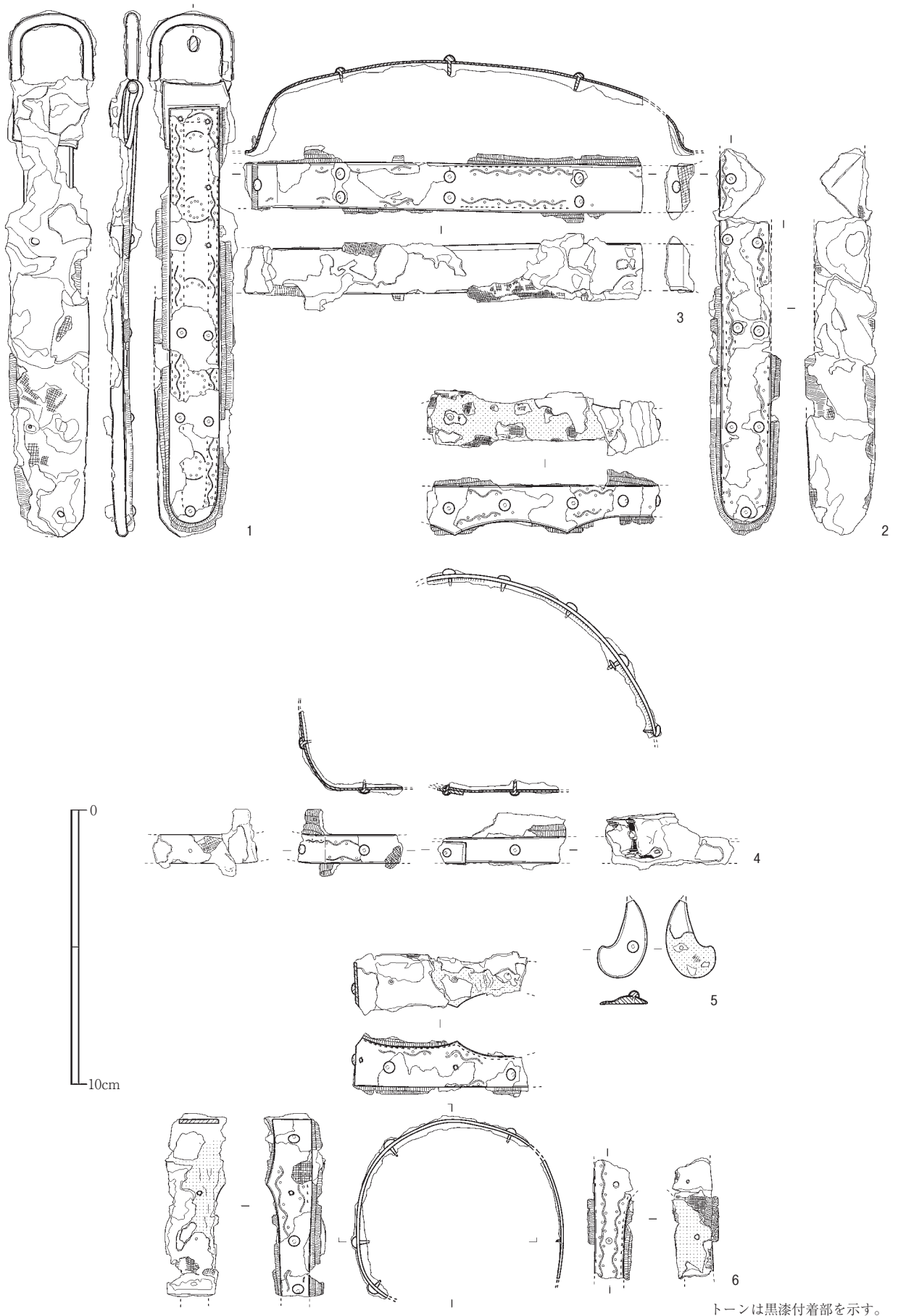


図17 1号墳出土胡籐実測図

鉄鏃は、短頸腸扶柳葉形鏃と長頸柳葉形鏃が確認できる。最前面中央には短頸腸扶柳葉形鏃1点が確認でき、その他大部分は長頸柳葉形鏃である（図版4-1）。縦幅約15cm、横幅約10.5cmの範囲にまとまっている。鏃先端は中段付近に位置しており、鏃先端から底板までは一定の距離がある。おそらく、副葬時に矢先が底板から北側にずれたものと考えられる。

(3) 短冊形B 2類吊手金具（図17-1・2）

左右対となる吊手金具が遺存している。下端が丸くなり、短冊形を呈する。金具上端から下に2番目の鉾は、胡籥本体に対して内側に位置するものであり、1が左側、2が右側の吊手金具であることがわかる。金具は鉄地金銅張製、鉾は鉄地銀張製である。

彫 金 金具の縁側に沿うように、鉄地金銅張の上から波状列点文が施されている。三角文が密に重なる蹴り彫りで波状文が描き出され、その両側を粗い蹴り彫りによる線文がめぐる。中央部付近には、一定の間隔を置いて同心円状の文様が確認できる。内側には点文が円形にめぐり、外側には密な蹴り彫りによる線文が円形にめぐる。この文様は一定の間隔をおいて5つ確認される。

鉾 鉾は上から2・1・2・2・2・1の順に施される。上から2番目の鉾は内側1つに限られるが、これは帯形金具B類との連結のために機能していたと考えられる。また下端の鉾が1つになるのは、金具下端が丸くなることに起因するだろう。

軸 受 金具上端に鉸具を連結するための軸受構造はみられないものの、革を折り曲げた軸受の代用物が確認される。金具とともに鉾留されることで固定されている。鉸具は刺金のないD字状を呈するものである（土屋の分類でいう鉸具iii類）。

有機質構造 金具裏側には有機質がきわめて良好に遺存している。有機質は大きく3層からなる。まず、金具直下には平織物がみられる。撚り目が確認できないため、おそらく平絹であると考えられる。平絹の左右縁には、撚りのある麻糸によって刺繍が施される。いわゆる縁かがりであり、二重構造である。複数からなる縁かがりの製作方法として、富山県朝日長山古墳出土胡籥金具を分析した沢田むつ代は、「幅の異なる複数の平絹の両端（裁ち目）にそれぞれ撚り糸で縁かがりを施し、それを重ね合わせる」という方法を想定している（沢田2006）。しかし、本例を見るかぎり、複数の布を重ね合わせているとは考えにくく、一枚の布に縁かがりが二重に施されていると考えるほうが妥当であると考えられる。

金具から2層目には、革痕が遺存している。革は、金具とほぼ同じ大きさである。端部は、帯状に巻き込まれていたようであり、図17-1の個体には、それがよく観察できる。

金具から3層目には、平織物がわずかに遺存している。おそらく1層と同様に平絹であると思われるが、革の下に付着しているため、1層とは区別される。これは、胡籥の背板部につけられた平絹である可能性が考えられる。このように有機質は3層からなり、すべて金具上からの鉾留によって固定されている。

(4) 収納部金具

帯形金具B類1点と山形突起付帯形金具2点からなる。金具は鉄地金銅張製、鋳は鉄地銀張製である。

①帯形金具B類 (図17-3)

吊手金具上端から下へ2~4cmの箇所に接合される帯形金具である。断面はΩ形に近い形態を呈しており、両端は屈曲して吊手金具の下側へともぐりこむ。

彫金と鋳 彫金は吊手金具と同様の特徴を有する。金具中央部では、鋳が縦2つセットとなって施されるが、両端部では中央に1つが施される。

有機質構造 金具裏側には有機質がきわめて良好に遺存している。有機質は大きく2層からなる。まず、金具直下には平絹がみられ、平絹の上下縁側には、三重構造の縁かがりが施される。左右両端付近には、縦方向の縁かがりの痕跡がみられる。これは、本来吊手

金具に付着していたものであったと考えられる。吊手金具裏面に第1層の平絹がつけられた後に、吊手金具が帯形金具B類と接合されたことを示しているだろう。

金具から2層目には、革痕が遺存している。革は、金具とほぼ同じ大きさである。遺存状態からは帯状であるか分からないが、おそらく吊手金具と同様に、本来は帯状に巻き込まれた形態であったと考えられる。

②山形突起付帯形金具 (中段) (図17-4)

中段に装着された金具である。山形突起は現状、2カ所にみられるが、おそらく完形では3カ所にみられたと考えられる。裏側には金具の合わせ目がみられる。

彫金と鋳 山形突起の縁に沿うように、鉄地金銅張の上から波状列点文が施されている。鋳は金具中央付近に1つずつ施される。

有機質構造 金具裏側には有機質が良好に遺存している。有機質は大きく2層からなる。まず、金具直下には平絹がみられ、平絹の上下縁側には、四重構造の縁かがりがみられる。平絹の裏面には、黒漆らしきものが付着している。おそらく、平絹の裏につく革との接着剤の役割を果たしていたと考えられる。金具から2層目には、金具とほぼ同じ幅の革痕が遺存している。革の裏面には獣毛のような痕跡が付着している。これは、胡縁収納部に由来するものであったと考えられる。

③山形突起付帯形金具 (下段) (図17-6)

下段に装着された金具である。金具上端には最低3カ所に山形突起が確認できる。断面半円形を呈しており、中段の山形突起付帯形金具と比べて、かなり小さい復元径が想定される。彫金、鋳、有機質構造は中段の山形突起付帯形金具とほぼ同様である。

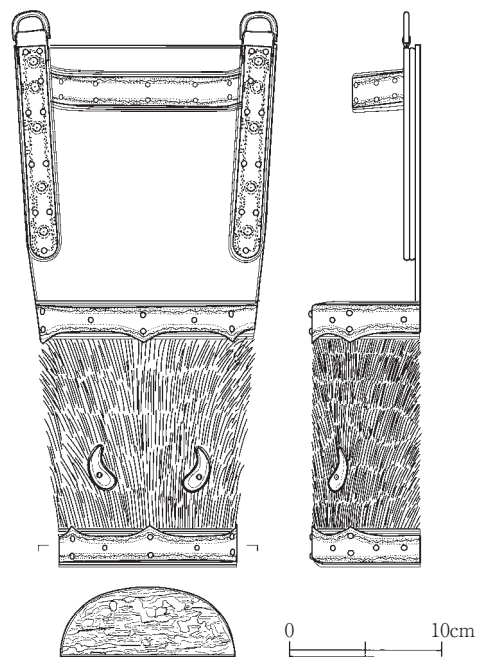


図18 1号墳出土胡縁復元図

(5) 勾玉状金具 (図17-5)

円頭形勾玉状金具の右側の個体である。金具は鉄地金銅張製、鉾は鉄地銀張製である。円頭部先端は尖っており、鉾は本体の中央部付近に位置する。表面の遺存状態がよくないため明確ではないが、おそらく文様はないであろう。裏面には黒漆とともに獣毛が付着している。おそらく胡籐本体に由来するものである。

以上が胡籐金具の個別報告である。図18に全体の復元図を示す。

(土屋隆史)

4 馬 具

馬具は棺外から杏葉、鍔金具、鞍金具、辻金具、責金具、不明金具が出土した。

(1) 杏 葉 (図19、図版15・16)

1～3、6、7は杏葉とその破片である。1、2は鉄地金銅張無文心葉形杏葉、3は吊金具の破片、6は杏葉と辻金具が銹で結合した破片、7は立聞の破片である。

1はほぼ完形で、全長10.8cm、最大幅9.2cm、最大厚0.6cmである。下部が突出する楕円形の鉄地板の上に金銅板を重ね、心葉形の縁金を置く。縁金の上には37個の鉄鉾を密に打つ。立聞は縦2.0cm、横3.0cmで、4ヶ所に鉾を打つ。現在は金銅板がほとんど緑青色に変色しているが、一部に金が遺存する。2は地板の半分が遺存している。残存長7.6cm、残存幅6.6cm、厚さ1.0cmである。鉄地金銅張で、鉾を密に打つ。鉄地板を2枚重ね、その上に金銅板と縁金を重ねる。地板の下部が突出し、無文であることから、1と同様に無文の心葉形杏葉と考えられる。3は杏葉の吊金具。現存部は長さ3.2cm、幅1.9cm、最大厚0.7cmを測り、7の吊金具とほぼ同大である。鉾孔は5ヶ所にあり、そのうちの1ヶ所に鉄鉾が遺存する。6は杏葉の立聞と辻金具が銹で結合したもの。立聞は鉾を2つもち、中央には縦0.3cm、横0.6cmの吊金具を通す孔をもつ。立聞にわずかに金が遺存する。7は立聞と吊金具の破片。2ヶ所ある鉾孔のうちの1ヶ所には鉄鉾が遺存している。

1～7の杏葉とその破片より、杏葉は少なくとも3個体以上あったと思われる。

(2) 鞍 金 具 (図19、図版16-1)

9～11は鉸具である。9は残存長6.2cm、幅4.9cmである。厚さ0.7cmの鉄棒を曲げて輪金をつくり、両端をT字状の鉄棒で固定する。刺金部は5.5cmで、断面形状は長方形を呈する。10は残存長5.4cm、幅3.2cmである。鉄棒を曲げて隅丸方形の輪金を作り、基部に刺金を巻き付ける。刺金の一部が巻き付いて遺存する。11は厚さ0.7cmの鉄棒の破片で、両端が折損している。屈曲する位置や厚さから、9に類似する輪金の一部とみられる。

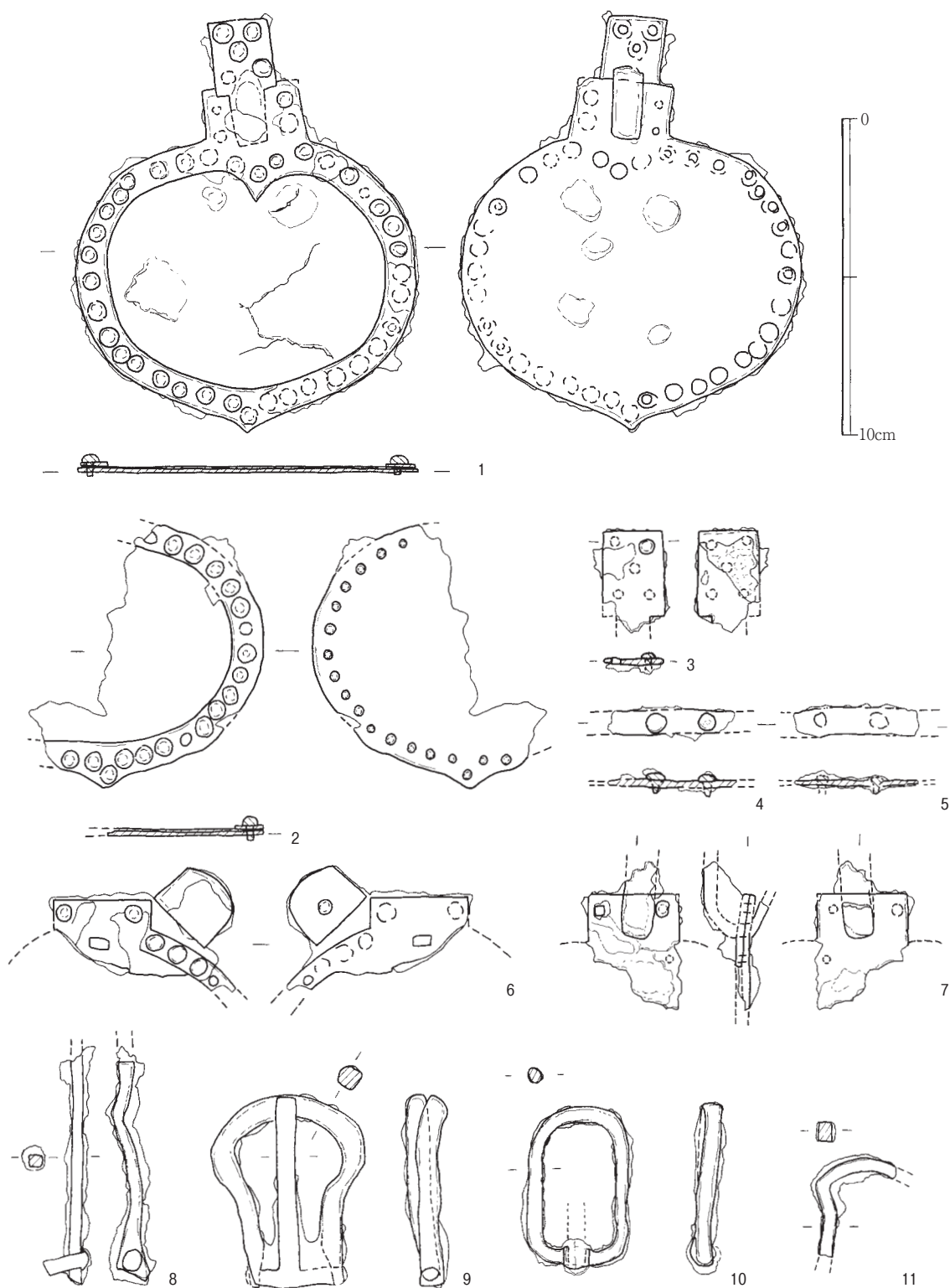


図19 1号墳出土馬具実測図(1)

(3) 鍍金具(図20、図版16-2)

12~17は木製壺鍍を構成する金具である。12~14は鍍の兵庫鎖の破片。天地は不明で、いずれも接合できない。12は残存長5.6cm、幅0.7cm、厚さ0.7cmである。断面形状は楕円形で、両端部がゆるやかに屈曲する。13は残存長6.5cm、幅0.8cm、厚さ0.7cmであり、両端部は90°に捩

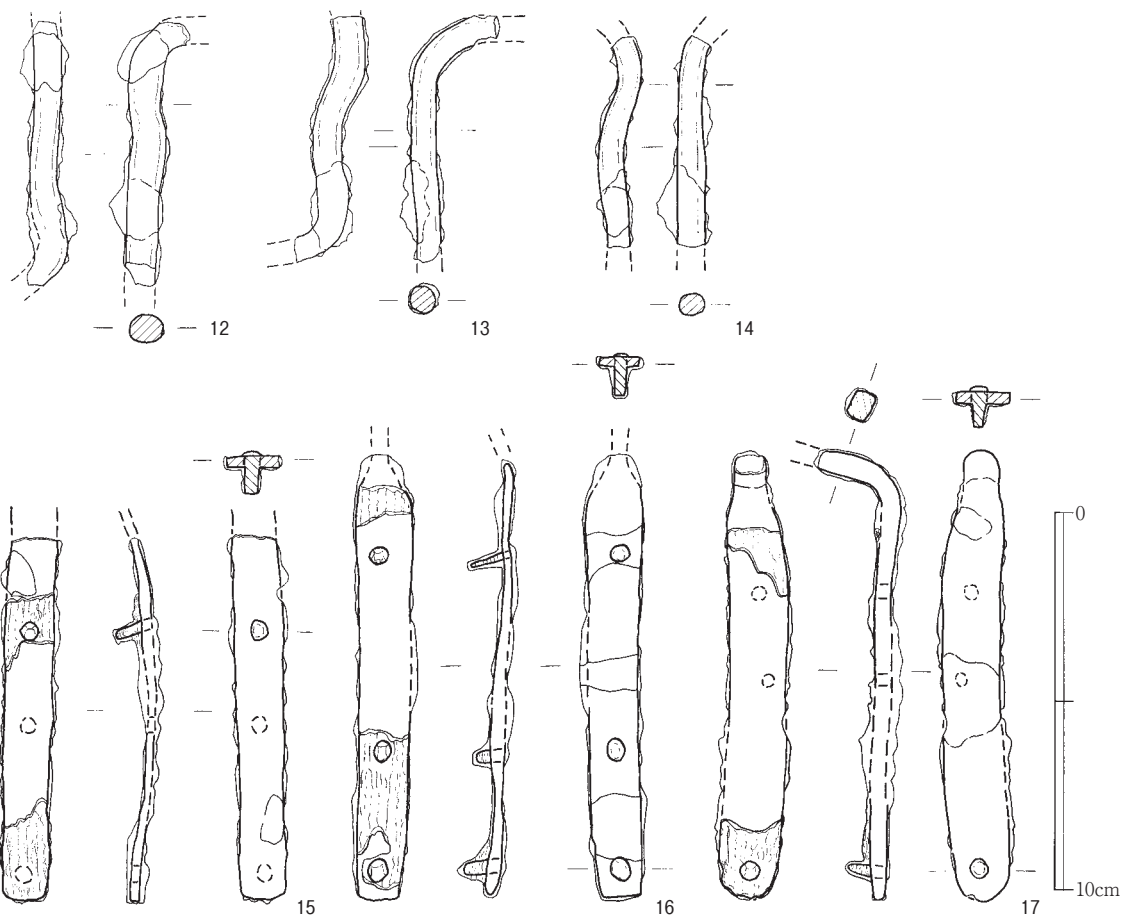


図20 1号墳出土馬具実測図(2)

れている。断面形は丸い。14は残存長5.6cm、幅0.8cm、厚さ0.9cmである。断面形状は楕円形を呈する。

15～17は鐙を固定するU字形金具の破片である。鉄鉤で木製鐙を固定する部分（固定部）には、鉤脚や固定部裏面の長軸に平行して木質が遺存する。15は内側に反り、残存長9.6cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmである。鉤の頭部径は0.5cm、鉤脚部の長さは1.1cm。固定部先端の両隅は丸みを帯びる。固定部先端から0.7cm、以下鉤の中心距離で4.0cm、2.4cmの位置に鉤を打つ。16は残存長11.7cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmである。鉤頭径は0.6cm、鉤脚部の最大長1.2cmである。鉤は残存最下端から0.7cm、以下鉤間3.3cm、5.3cmの計3ヶ所に打つ。17は固定部と、もう片方の固定部とをつなぐ部分（吊り部）が遺存する。残存長11.8cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmで、鉤頭径は約0.7cm、鉤脚部の最大長は1.2cmである。固定部先端の両隅は15、16に比べ、丸みを帯びる。鉤は固定部先端から0.7cm、以下鉤間5.1cm、2.3cmの計3ヶ所に打つ。

(4) 辻金具 (図21、図版17-1)

辻金具は2種類出土している。

18～21は環状辻金具である。18～20の外径はほぼ同大で、18が4.2cm、19は4.2cm、20は

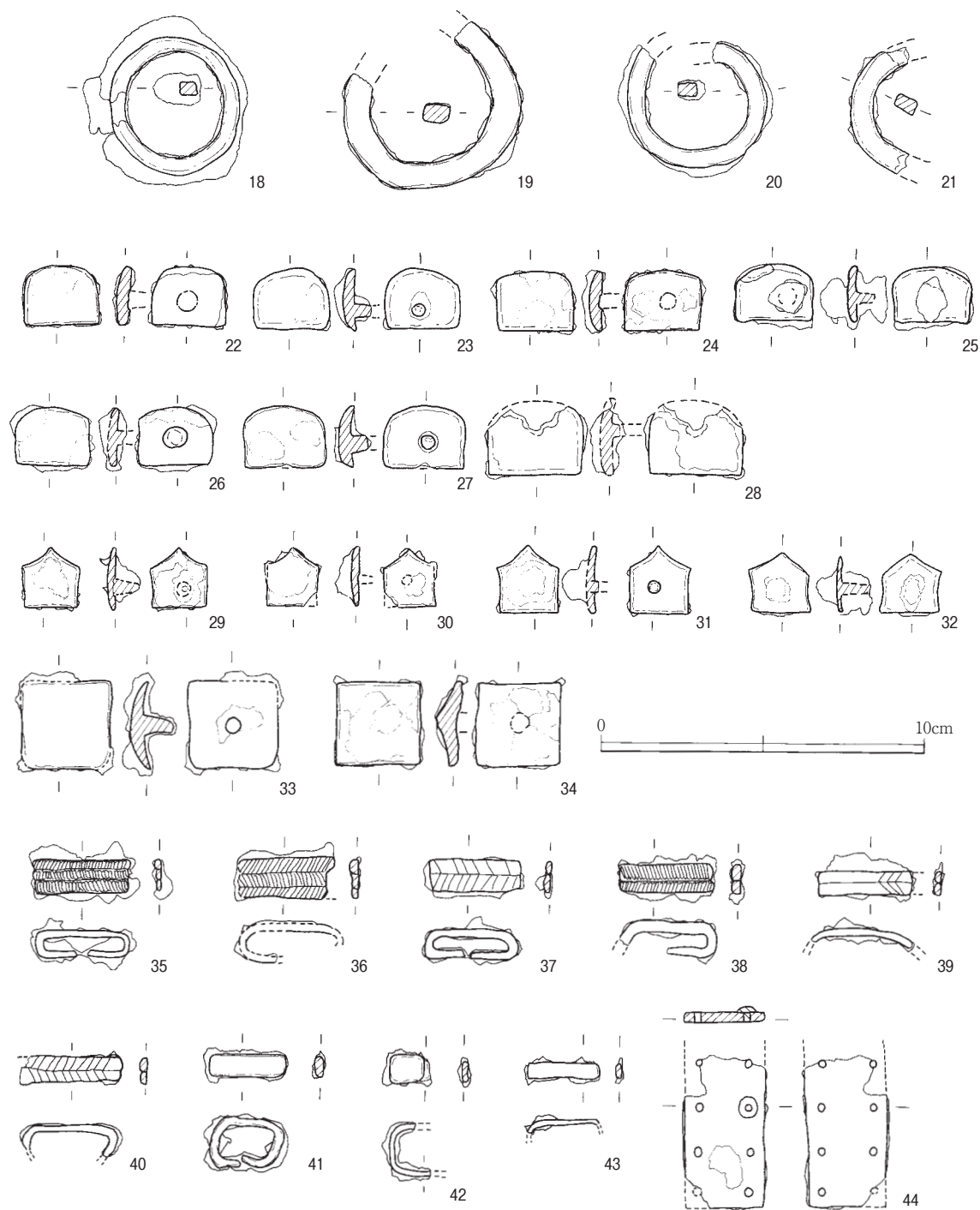


図21 1号墳出土馬具実測図(3)

4.3cmである。18は正円に近く、19、20は楕円形を呈する。断面形は長方形である。

22~34は辻金具である。頭部表面に銕はみられない。22~28は爪形、29~32は五角形、33、34は正方形の辻金具である。爪形の辻金具は平面の長さ2.2~2.9cm、幅1.7~2.3cmである。25の脚長は0.5cmで、それ以外は折損のため不明である。22、24、28は表面の一部に鍍金が観察できる。22、23、25は裏面の銕脚の付近に有機質が遺存する。29~32は五角形を呈し、平面長1.6~1.8cm、幅1.8~2.1cmである。32の脚長は0.8cmで、他は折損のため不明である。29、31は頭

部に一部鍍金が残る。33は一辺2.7cm、34は2.6cmを測り、表面中央に向かってゆるやかに突出する。脚は残存最大長0.9cmである。

(5) 責金具 (図21、図版17-1)

責金具には3条1組のもの(35、36)、2条1組のもの(37~40)、1条のもの(41~43)がある。35、36は長さ約3cm、幅約1cmで、1条の幅は約0.5cmである。皮を挟み込む部分の横幅は約2.5cmである。ともに線刻が観察できる。

37~40は2条1組で構成される。長さ2.8~3.1cm、幅0.7~1cmである。皮を挟み込む部分の横幅は約2.3cmである。刻みを綾杉状に組み合わせる。37~39は内面に有機質が遺存する。40は表面に銀装が観察できる。

41~43は1条で構成され、表面に線刻は施されない。また、41~43は他の責金具よりも一回り小さく、長さ2.1~2.4cm、幅0.4~0.8cmである。41と43は内面に有機質が遺存する。

(6) 不明金具 (図19・21、図版15~17)

4、5、8、44は器種が不明な馬具の破片である。

4は残存長4.0cm、幅0.7cm、厚さは0.3cmである。鉄製で、径0.5~0.6cmの鉤を2カ所に打つ。5は残存長3.9cm、幅0.9cm、厚さは0.2cmである。鉄製で、4と同様、径0.4~0.5cmの鉤を2カ所打つ。4と5は同一個体と考えられるが、接合しない。鞍の縁金具の可能性もあるが、器種は不明である。

8は残存長7.2cmの棒状品で、基部に別材の棒状品を差し込む。9~11と同様、鞍金具の一部の可能性もあるが、特定できない。

44は吊金具状の部品で、残存長4.7cm、幅2.5cm、厚さ0.3cmである。鉄製の長方形板に8つの鉤を2列に等間隔に打つ。鉤は1ヶ所のみ遺存する。鉄地金銅張で、裏面に有機質が遺存する。杏葉の吊金具に似るが、それよりも大きい。

(上野あさひ)

(7) 銅 鈴 (図22、図版17-2)

① 1号墳出土銅鈴

坊主山1号墳では、棺外の南側で銅鈴が2点出土している。表面に木質の痕跡が認められ、木箱に収められていた可能性が高い。本書では馬鈴と推定し、馬具に含めて報告する。

1は銅鈴を正面から見て、鈕を含む縦5.5cm、横5.1cm、奥行き4.9cmである。鈕は方形で、高さ0.8cm、幅1.5cm、中心に0.5cmの円形鈕孔をもつ。腹帯は幅0.2~0.3cmの突帯で、細かい刻み目を施す。上部には鑄造時に湯が回らなかった2カ所の小孔があく。鈴口の向きは鈕と同一で、幅0.5cmの鈴口が腹帯まで回る。下半部には楕円形の圈文を4ヶ所もつ。内部には直径1.5cmの石製丸をもつ。

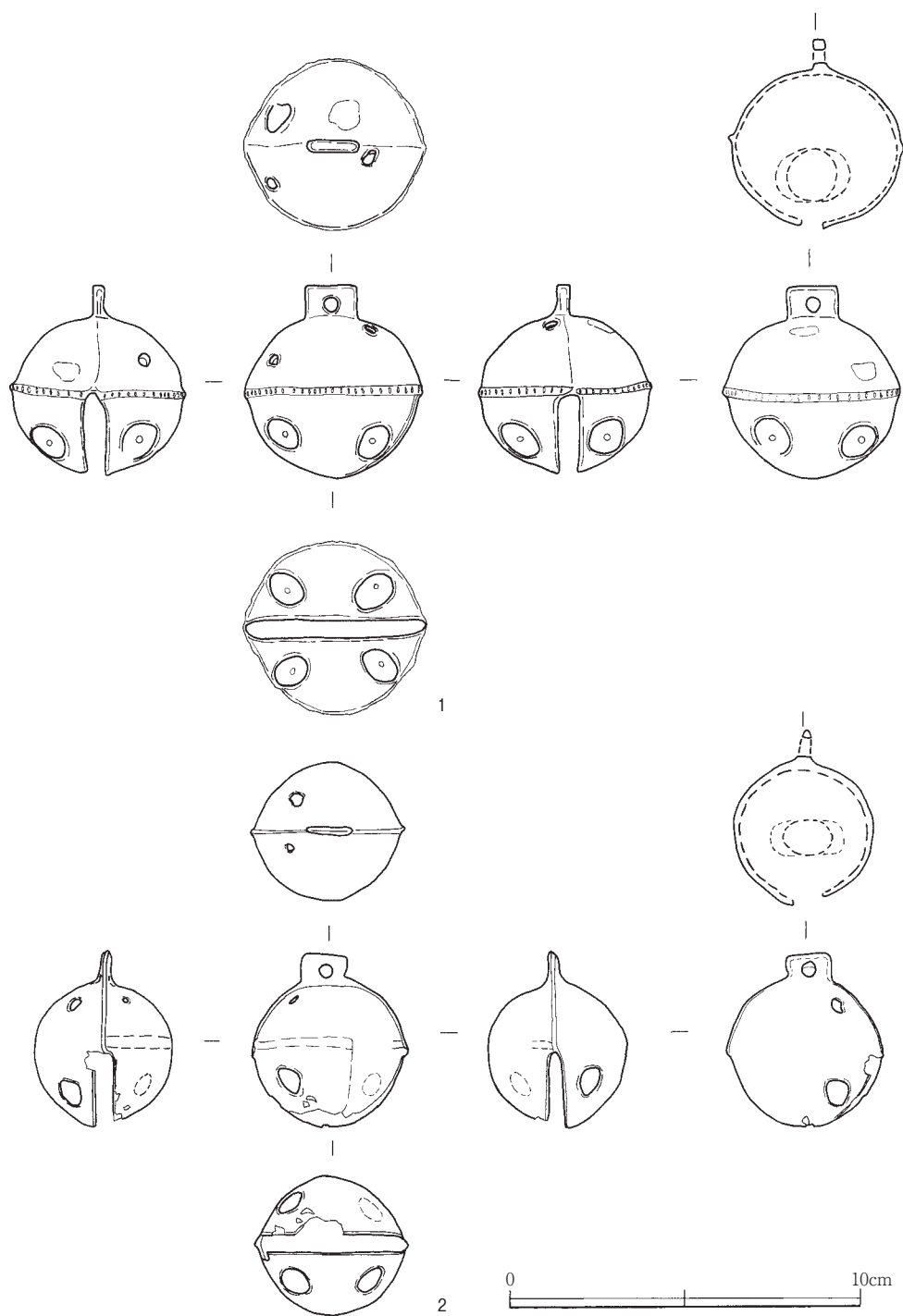


図22 1号墳出土銅鈴実測図

2は鈕を含む縦4.9cm、横4.4cm、奥行4.0cmで、1よりも一回り小さい。鈕は方形で、縦0.9cm、幅1.4cm、中心に直径0.4cmの円形鈕孔をもつ。腹帯は0.2~0.3cmの突帯だが、不明瞭で、刻み目は見えない。上部には鑄造時に湯が回らなかった円孔が2カ所ある。鈴口の向きは鈕と同一で、幅0.4cmの鈴口が腹帯まで達する。下半部には楕円形の圈文を4ヶ所もつが、1ほど明瞭ではない。内部には長径1.4cmの楕円形の石製丸をもつ。

表3 銅鈴の分類と編年

期	陶器編年	球形鈴	八角形鈴	備 考
I	TK23	方形鈕で素文で小型(径2cm) 方形鈕で圈文	なし	舶載品
II	TK47~TK10	環形・方形鈕の大型 (径4cm前後以上) 方形鈕で素文	なし	
III	MT85	環形鈕 方形鈕で素文・腹帯2条	鈕座持ち小型 鈕座持ち大型 鈕座持ち大型で内部に小鈴	八角形鈴の初現 鈕座持ち・入子式出現
IV	TK43	環形鈕 方形鈕で素文・腹帯2条 方形鈕で珠文	鈕座なしの出現(小型) 鈕座持ち小型 鈕座持ち大型で内部に小鈴 (径・高4~4.5cm) 花形鈕座の大型(ナスビ型) 鈴口が鈕と直角方向	出土例の増加=最盛期
V	TK209	環形鈕 方形鈕で珠文	花形鈕座の大型(ナスビ型)	以降、出土例が減少

②銅鈴の研究史

つぎに、古墳時代の銅鈴の研究史をまとめ、1号墳出土例の位置づけを考えたい。

加古千恵子の研究 (加古1975) 加古千恵子は兵庫県二見谷古墳群の報告において、古墳時代の銅鈴についてまとめた。日本の銅鈴は単独の鈴で、球体を呈し、鈴口が1つのものが大半を占める。これらの特徴は朝鮮三国期に由来する。単独の鈴、鈴鏡、鈴釧、鈴杏葉、環鈴、鈴付鏡板、鈴付雲珠など多様であるが、鈴鏡や鈴釧は日本独自のものである。中期古墳から出土がみられ、後期の例が圧倒的に多い。

形象埴輪の装着例から、鈴付刀子、帯金具に付く例、手鈴、脚結鈴、冠、腰鎧、動物にも付けられるなど用途が広い。馬鈴として用いられる場合は、胸繫や尻繫に垂下して使用されたと思われる。馬具を伴わない例や、伴う場合でも副葬位置が馬具と異なる例もある。

また、加古は全国の鈴を集成し、分布が東日本に偏ること、次いで中部・畿内に多く、鈴鏡、鈴釧、鈴杏葉と同じ分布を示すと指摘した。

白木原宜の研究 (白木原1997・2002) 白木原宜は銅鈴の製作技法を検討した。鈴の製造技法は2つに大別され、1つは本体の上下を別造りし、腹帯部で横方向に接合する鍛造鈴、もう1つは鋳型を合わせて製作し、鈴口の延長線上、つまり縦方向に接合する鋳造鈴である。内部は中空にする必要があるため、中子を用いて鋳造するが、巾木だけで支持するものは巾木・鈴口が長く、巾木と型持を併用して支持するものは巾木・鈴口が短い。これは外見と対応し、前者は球形鈴、後者は八角形鈴となる。

分類は球形鈴、八角形鈴ともに、①鈕座の有無および形状(球形鈴にはない)、②鈕と鈴口の方角、③鈕の形状、④鈴口端部の形状、⑤腹帯、⑥唇状突起(球形鈴にはない)、⑦文様(八角形鈴にはない)の7要素から分類した(白木原1997)。

年代について、鈴付青銅器は出土古墳の年代観から、5世紀末頃に国産が始まるとした。いっ

ぼう、八角形鈴は6世紀中頃が初現である。さらに、鈕と鈴口が直交し、径4～5cm前後のものは、6世紀後半～7世紀初頭に位置づける（白木原2002）。

朝岡俊也の研究（朝岡2018） 朝岡俊也は鈴の機能を検討した。初期の鈴は身分表象の機能をもつが、6世紀後半における馬具の大量生産とともに、装飾的な機能は衰える。また、桃崎祐輔の研究を参考に（桃崎2014）、大型の八角形鈴は古代官道の駅比定地付近で出土することから、駅鈴として用いられたと考えた。

また、朝岡は材質、製作技法、鈕の平面形、腹帯の有無から鈴を分類した。その結果、5世紀後半までは、鑄造品、球形で、腹帯をもたず、径は1.5cm前後であるが、5世紀後半以降は大型化する。また、腹帯1条で鈴口の端部を円形に加工するものがあり、新羅地域に類例が多いことを指摘した。6世紀中頃～7世紀前半では鑄造の八角形で腹帯をもつものが主流となる。さらに、7世紀後半にはそれらが消滅することから、鈴の盛行期は6世紀後半～7世紀前半であると結論づけた。

③ 1号墳出土銅鈴の位置づけ

以上をふまえ、坊主山1号墳出土銅鈴の位置づけをまとめたい。1・2ともに鑄造品で、円形、大型の部類に属する。腹帯は1条で、鈕と鈴口の向きは一致する。以上の特徴から、白木原や朝岡の編年では5世紀後半以降に位置づけられる。また、朝岡の指摘によれば新羅地域の類例と一致し、舶載品の可能性も考えられる。

用途について、本書では馬具に含めて報告したが、加古が指摘したとおり、馬具とは異なる木棺南側に副葬されている点に疑問が残る。今後は鉄鐸との共伴事例を調べる必要がある。

（築山弥矢）

（8）鉄 鐸（図23-1、図版17-2）

① 1号墳出土鉄鐸

図23-1は棺外の南側で出土した鉄鐸の鐸身である。舌は残存しない。全長8.7cm、開口部径4.3cmである。頂部から約1cmが円周の半分ほど開口しており、舌を吊り下げた懸通口の可能性がある。扇形の鉄板を円錐形に巻き、両端は閉じ合わせず、一部が重なる。表面に繊維が付着し、布で巻かれていたと考えられる。

（中川恋歌）

② 鉄鐸の研究史

行田裕美の研究 鉄鐸が初めて認知されたのは1959年の栃木県日光男体山山頂遺跡の発掘調査である。131点の円錐状鉄製品が出土し、鉄鐸という名称が与えられた（佐野1963）。その後、行田裕美や早野浩二が鉄鐸について検討した。行田は岡山県西吉田北1号墳出土の鉄鐸を報告する際に、朝鮮半島を含めた資料を集成し、形態と機能、出土傾向、消長と分布について考察した（行田1997）。行田は鉄鐸を「鉄の鐸身に舌をぶら下げたもの」と定義し、鐸身、舌の大きさに多様性を見いだした。また、鉄板が三角形なら円錐形、方形なら筒型になるとして、鉄鐸の形態と素材の関係に言及した。

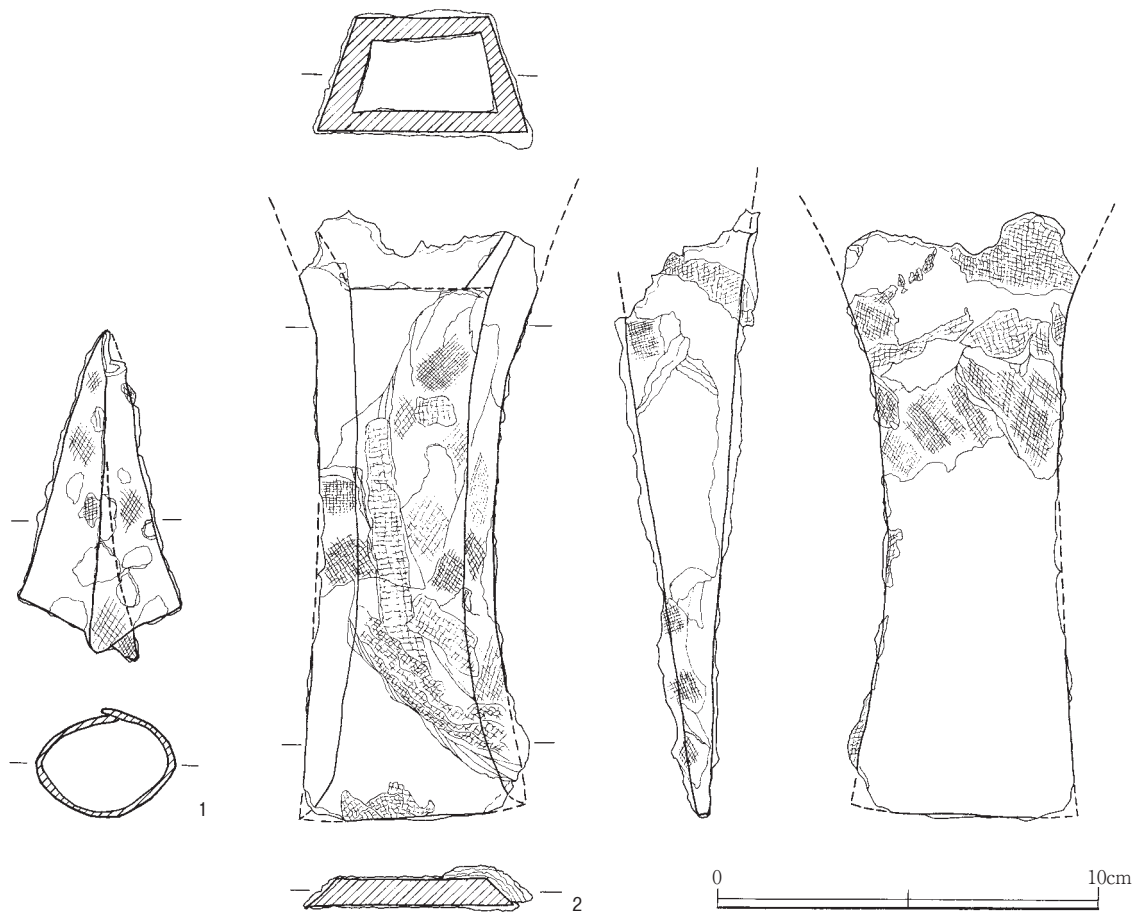


図23 1号墳出土鉄鐸、鉄斧実測図

早野浩二の研究 その後、早野浩二が行田の集成を基礎に改めて鉄鐸を検討した（早野2008）。早野は鉄鐸の出現する時期はTK216型式期頃であるとし、以後は古墳時代を通じて存在するとした。分布は九州に多く、瀬戸内から東海・近畿にかけて点在し、中部高地・北関東に及ぶと述べた。さらに、鉄鐸の型式については形状や大きさから分類することは難しいと述べる。

金東淑の研究 鉄鐸は朝鮮半島でも出土している。金東淑は嶺南地方の6～7世紀代の墳墓出土鉄鐸を対象に遺構の規模、共伴遺物、副葬位置、外面観察を行い、鉄鐸所持者の性格を推測した（金2009）。金は朝鮮半島出土鉄鐸所持者の性格は大きく3つに分類できるとして、第1に鉄技術の所有者である匠尺身分の集団、第2に豪民層あるいは土農層、第3に宗教儀礼を執り行う巫俗人に整理した。

高慶秀の研究 高慶秀は韓国と日本の鉄鐸について、朝鮮半島の出土例を中心に考察した（高2009）。高は小型で舌を伴わない鉄鐸に対して、鉄製模造品の可能性を指摘している。

③ 1号墳出土鉄鐸の位置づけ

坊主山1号墳の鉄鐸は木棺外の南側で、銅鈴とともに出土した。全長8.7cmで、鉄製の舌は認められない。坊主山1号墳では铸造鉄斧、刻み目をもつ銅釧、指輪らしき金環など、渡来系の要素をもつ副葬品が出土している。鉄鐸もまた、渡来系文物の1つに位置づけられる。

また、鉄鐸と銅鈴が共伴したことから、「鳴り物」としての性格が濃厚である。1号墳では馬具がセットで出土しており、鉄鐸も馬に吊るして使用した可能性がある。

(漆原尚輝)

5 工具(鉄斧)(図23-2、図版13-2)

1号墳出土の鉄斧 図23-2は棺内の南側で出土した鉄斧である。袋部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。無肩で、袋部、刃部ともわずかに撥形に広がる。袋部断面形は台形を呈する。袋部が全体の約3分の2を占める。残存長16.1cm、袋部の内径は3.3×2.0cm、刃部先端の推定幅は6.0cmである。表面全体に絹と思われる目の細かい布が何層にも巻かれている。X線写真では袋部の合わせ目等は認められず(図版18-3)、鋳造品である。

鉄斧の位置づけ 本例は、松浦宇哲による福岡県山の神古墳出土鉄斧の分類に照らせばC類(平面形が幅広で最大幅が刃部にあり、袋部横断面は横長の台形を呈する)に相当する(松浦2015)。また、朝鮮半島の類例に対する東潮の分類ではIV型(玉田型)に当たる(東1999)。3~4世紀代朝鮮半島の昌原・威安、金海に類似するものが認められる。東はこれらの品を鋏・鋤の機能をもつ「鋳造斧形品」とする(東2004:44頁)。鍛造品と鋳造品は同時期に日本に併存するが、多くは鍛造品である。精巧な造りの鋳造品は朝鮮半島の高度な鋳造技術を用いたものと考えられる。本例もその1例で、舶載品と考えられる。(中川恋歌)

6 装身具

(1) 銅 釧(図24-1、図版19-1)

1号墳からは装身具として銅釧1点、金環2点、玉類が出土している。

1は銅釧である。一部を欠損するが、整った正円形を呈し、最大径は7.1cm。断面形は円形で、径0.3~0.4cmである。外縁には1cmあたり3~4本の刻み目が認められる。小高幸男の分類では円環系有刻型(小高1989)、渡辺みどりの分類ではI類Bに相当する(渡辺1998)。なお、小高は円環系有刻型銅釧が朝鮮半島の銅釧と形態、製作技法が類似することから、舶載品と考えている(小高1989:51頁)。

(2) 金 環(図25-2・3、図版19-1)

2、3は金環。2は最大径1.8cm、断面径0.2cm。3は最大径1.7cm、断面径0.2cmである。いずれも中実で、金の棒を振って成形し、一部に1mm程度の隙間があく。先述したとおり、棺内の両側から離れて出土したことから、指輪の可能性が高い。振りと刻みの違いはあるが、廣瀬時習による分類のB-1類に位置づけられる(廣瀬2015)。

なお、本例に類似する垂飾付耳飾の主環に振りを加えたものが存在する。それらは金宇大の分類では中実Bに相当し、朝鮮半島南部で多く出土している(金2017、李2006)。

(古谷真人)

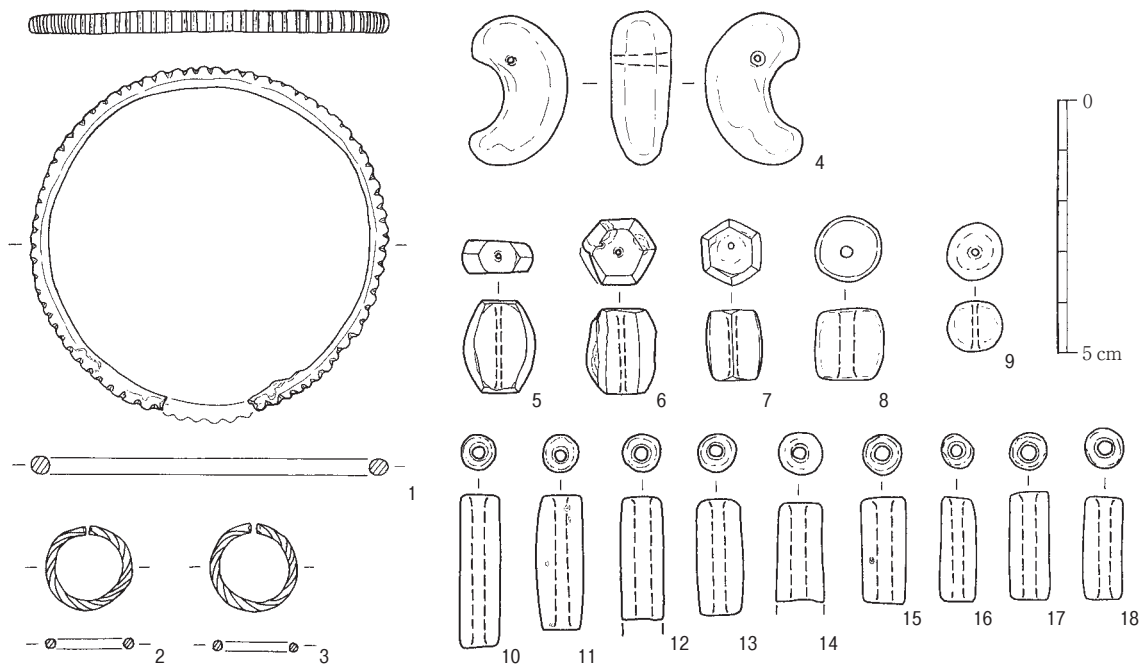


図24 1号墳出土装身具実測図

(3) 玉 類 (図24-4~18、図版19-2・3)

4はヒスイ製の勾玉である。長さ3.0cm、厚さ1.2cm、孔径0.2~0.3cmで、やや大型である。色調は明緑色の地に白色が混じる。また頭部に茶黒色の付着物が確認できる。器形は、頭部から肩、尾部にかけてなだらかな曲線をもち、頭部にはわずかに稜が認められる。穿孔は主に一方から行われている。型式は大賀克彦による分類のNn型に位置づけられる(大賀2013)。

5~7はいずれも方形または多角形ガラス玉と呼ばれるものである(吉田・小嶋2018)。色調は透明度の高い薄水色で、5は扁平六角形、6、7は切子玉形を呈する。法量は5が長さ1.8cm、径1.4cm、孔径0.2cm。6は長さ1.7cm、径1.4cm、孔径0.2cm。7は長さ1.4cm、径1.1cm、孔径0.2cmである。

8は円柱状のガラス玉である。透明の薄茶色を呈する。長さ1.5cm、径1.4cmである。

9は瑪瑙製の丸玉である。長さ、径ともに1.2cm。やや透明の薄橙色の地に、橙色が斑に入る。

10~18はガラス製の管玉である。10、11、13、15~18は完形品だが、12、14は一部欠損している。色調は明紺~暗緑色を呈する。長さ3.1~2.0cm、径0.7~0.9cm、孔径0.3~0.4cmである。法量に差は認められるものの、器形は共通し、成形は管切り方によるものである可能性が高い。11には赤色顔料が付着する。埋葬時に頭部から胸部にかけて散布したものであろう。

(小林友佳)

7 須恵器

棺外から脚付子持壺1点、甕1点、墳丘の後円部東側から短頸壺2点が出土している。

表4 1号墳出土玉類観察表

番号	資料名	色調	長さ	径	孔径	材質	備考
4	勾玉	明緑	3.0	1.2	0.2	翡翠	頭部に付着物あり、片面穿孔
5	多角形玉	薄水	1.8	1.4	0.2	ガラス	扁平六角形、片面穿孔
6	切子形玉	薄水	1.7	1.4	0.2	ガラス	一部欠損、両面穿孔
7	切子形玉	薄水	1.4	1.1	0.2	ガラス	両面穿孔
8	円柱形玉	薄黄茶	1.4	1.3	0.3	ガラス	
9	丸玉	橙	1.1	1.1	0.2	瑪瑙	片面穿孔、加工あり
10	管玉	紺	3.1	0.8	0.4	ガラス	
11	管玉	暗青緑	2.7	0.7	0.3	ガラス	微量の赤色顔料付着
12	管玉	青緑	2.5	0.8	0.4	ガラス	一部欠損
13	管玉	明紺	2.3	0.9	0.3	ガラス	
14	管玉	暗青緑	2.0	0.9	0.5	ガラス	一部欠損、小口面に使用痕あり
15	管玉	青緑	2.1	0.8	0.4	ガラス	
16	管玉	青緑	2.1	0.7	0.3	ガラス	
17	管玉	青緑	2.2	0.8	0.4	ガラス	
18	管玉	暗青緑	2.1	0.75	0.3	ガラス	

(1) 脚付き持壺 (図25-1、図版20)

図25-1は脚付き持壺である。器高41.5cm、本体壺部口径18.0cm、胴部最大径18.5cm、脚部底部径21.4cm、脚部高19.4cmである。肩部に4個の小壺を配置するが、1個は欠損している。小壺は回転により成形し、肩部全周に列点文を施す。本体壺部の肩部上には、底部の周囲に粘土を貼り付けることで固定している。3個の小壺は、口径4.7~4.9cm、器高4.5~4.7cmである。

本体壺部の口頸部は外反して立ち上がり、口縁端部がやや肥厚する。口頸部は上部を沈線、下部を突線により3区に分割し、各区に波状文を施す。胴部外面には平行タタキの痕跡が残る。内面には当て具の痕がみられず、擦り消していると考えられる。胴部と脚部は凸線で区分されている。脚部は粘土紐を巻き上げた後、回転ナデで成形している。沈線により4区に分割され、上から1段目には上下に列点文、2・3段目には波状文をそれぞれ施す。また、上から1・2・3段目には長方形の透孔を、それぞれ子壺と同方向に上下連続して穿つ。脚端部は直線的に下方に伸び、強い踏ん張りをもつ印象を与える。焼成は良好で、色調は基本的な灰褐色に加え、部分的に暗灰色や黄褐色を呈するほか、本体壺部内面の底部付近に赤色がみられる。

脚部が長く伸び、本体壺が底部をもつ形態は、山田邦和による分類の装飾付壺Ⅲ-1類に該当し(山田1989a・b)、年代は山田編年のⅡ前期、MT15型式期からTK10型式期(古段階)を想定する。(田口裕貴)

(2) 短頸壺 (図25-2・3、図版21)

2、3は後円部東側から出土した短頸壺である。

2は完形品で、口径7.0cm、器高8.7cm、最大径12.0cmである。肩部はゆるやかな曲線をなし、口縁部はわずかに内傾する。外面の口縁部から胴部に回転ナデ、底部付近に反時計回りの回転へ

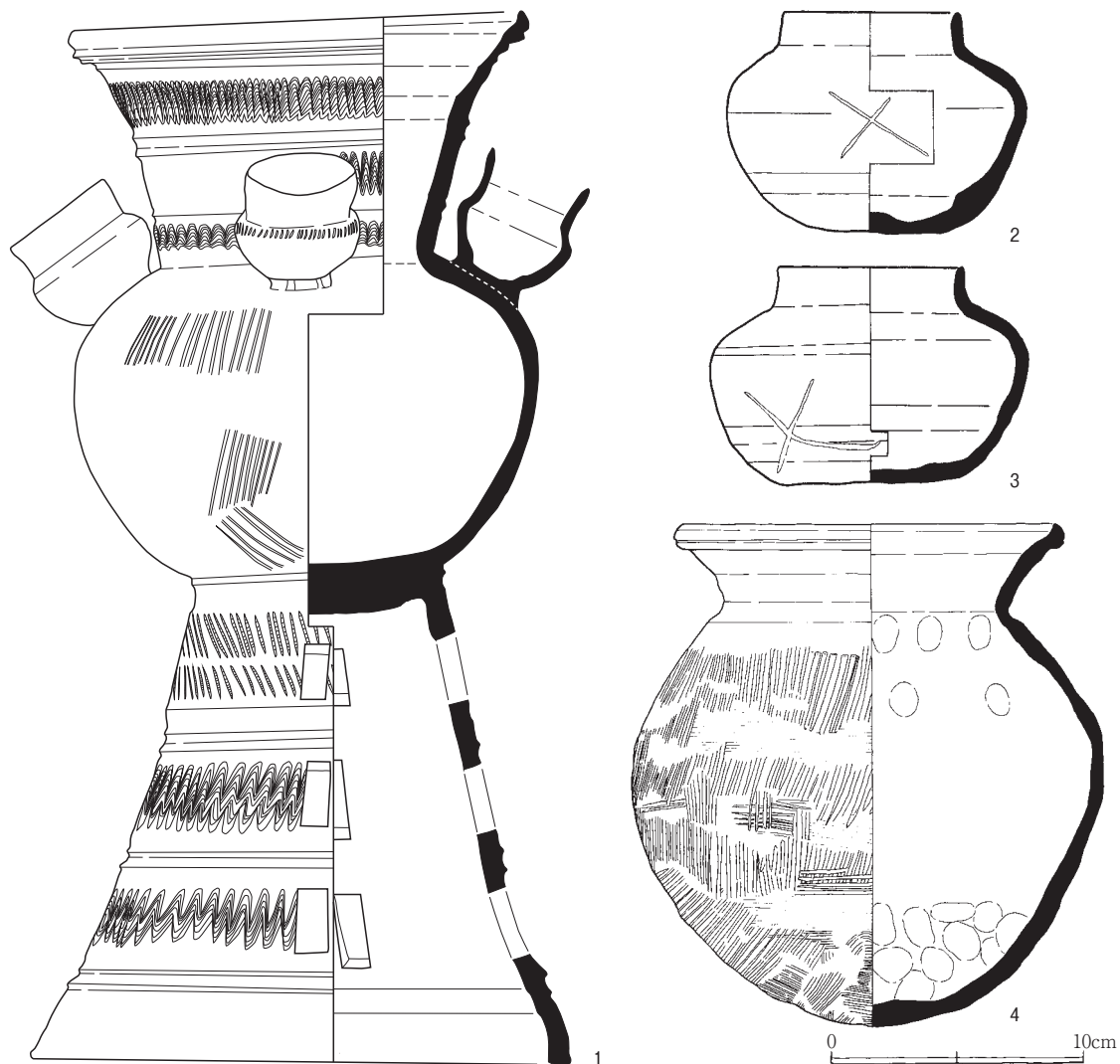


図25 1号墳出土須恵器実測図

ラ削りを施す。内面には回転ナデを施す。色調は赤褐色を呈する。胎土は密で、2mm程度の粗砂を含む。焼成は良好である。胴部に×のヘラ記号をもつ。

3は完形品で、口径7.4cm、器高8.5cm、最大径12.7cmである。肩部の屈曲はゆるやかな曲線をなし、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部から胴部に横ナデ、底部に回転ヘラ削りを施す。色調は灰色である。胎土は密で、1～3mm程度の粗砂を含む。焼成は良好である。胴部に×のヘラ記号をもつ。

(竹川可純)

(3) 甕 (図25-4、図版21)

4は甕である。完形品で、口径14.3cm、胴部最大径18.7cm、器高20.0cmである。口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部はやや立ち上がる。胴部外面にはタタキが認められ、一部にヘラ削りも認められる。内面にユビオサエが認められる。口縁部の形状などから、陶邑編年のMT15型

式期に位置づけられる（田辺1966）。

（古谷）

8 埴輪

埴輪は後円部の南東側や北側くびれ部で円筒埴輪が出土しているほか、北側くびれ部で家形、盾形、鶏形、馬形、人物埴輪が出土している。

（1）円筒埴輪（図26・27、図版22～25）

円筒埴輪 1～13は円筒埴輪の胴部、14、15は底部である。段数構成及び突帯間隔がわかる資料はない。

分量や規格として、体部径は1が23.5cm、2が22.4cm、3が21.0cmである。底部径は14が20.0cmである。底部高は14、15とも9.5cmである。透孔の形状は円形を呈する（1、9）。

外面調整は、二次調整にヨコハケを施す3を除き、1次調整タテハケのみである。ハケの条数は5～7条/cmのものが多し。内面調整はナデを用いる場合が多いが、ハケ調整がみられるもの（8～11）もある。底部の外面には押圧技法による調整を施し、内面には基底部付近に指押圧の痕跡が残る。

突帯の断面形状は台形を呈する。高さはおよそ1.0cmであるが、14、15の1条目は0.5cmで、突出度が著しく低い。14は断続的にナデを施したのちにナデ付ける（断続ナデ技法A）。粘土紐による積み上げ単位は1.5～2.0cmである。底部のみ幅約5.0cmの粘土帯を使用する。器壁の厚さは1.2cmである。

朝顔形埴輪 16～18は朝顔形埴輪の肩～頸部である。胴部径がわかる個体は18のみで、約27cmである。頸部径は16が17.7cm、17が16.0cmである。外面調整は16、17の肩部にナメハケを施すほかは不明瞭である。内面調整はナデを施す。胴部の突帯の断面形状は丸みを帯びた台形であり、頸部突帯は16、17ともに三角形を呈する。

円筒埴輪の特徴 ここで坊主山1号墳の円筒埴輪の特徴をまとめる。外面調整にはタテハケを施し、突帯の断面形状は台形である。1条目突帯は胴部の突帯に比べ突出度が劣り、底部調整に押圧技法を用いる。外面に黒斑はみられず、窖窯焼成であると判断できる。以上より、坊主山1号墳から出土した円筒埴輪は川西編年V期に位置づけられる（川西1978）。

なお、円筒埴輪3は調整、突帯の形状、胎土の違いなどから、混入品の可能性がある。

（2）形象埴輪（図28・29、図版26～31-1）

形象埴輪の基部、家形・盾形・鶏形・馬形埴輪、人物埴輪、不明形象埴輪が出土している。

形象埴輪基部 19、20は基底部に突帯をもつ形象埴輪の基部である。底部径は19が20.2cm、20が23.4cmである。底部高は19が18.9cm、20が20.3cmである。

外面調整には19はタテハケを、20はナデを施す。内面調整はストロークの長いナデを施す。粘土紐の積み上げ痕跡は外傾する。1段目突帯の断面形状は、19が突出度の低い三角形、20が台形を

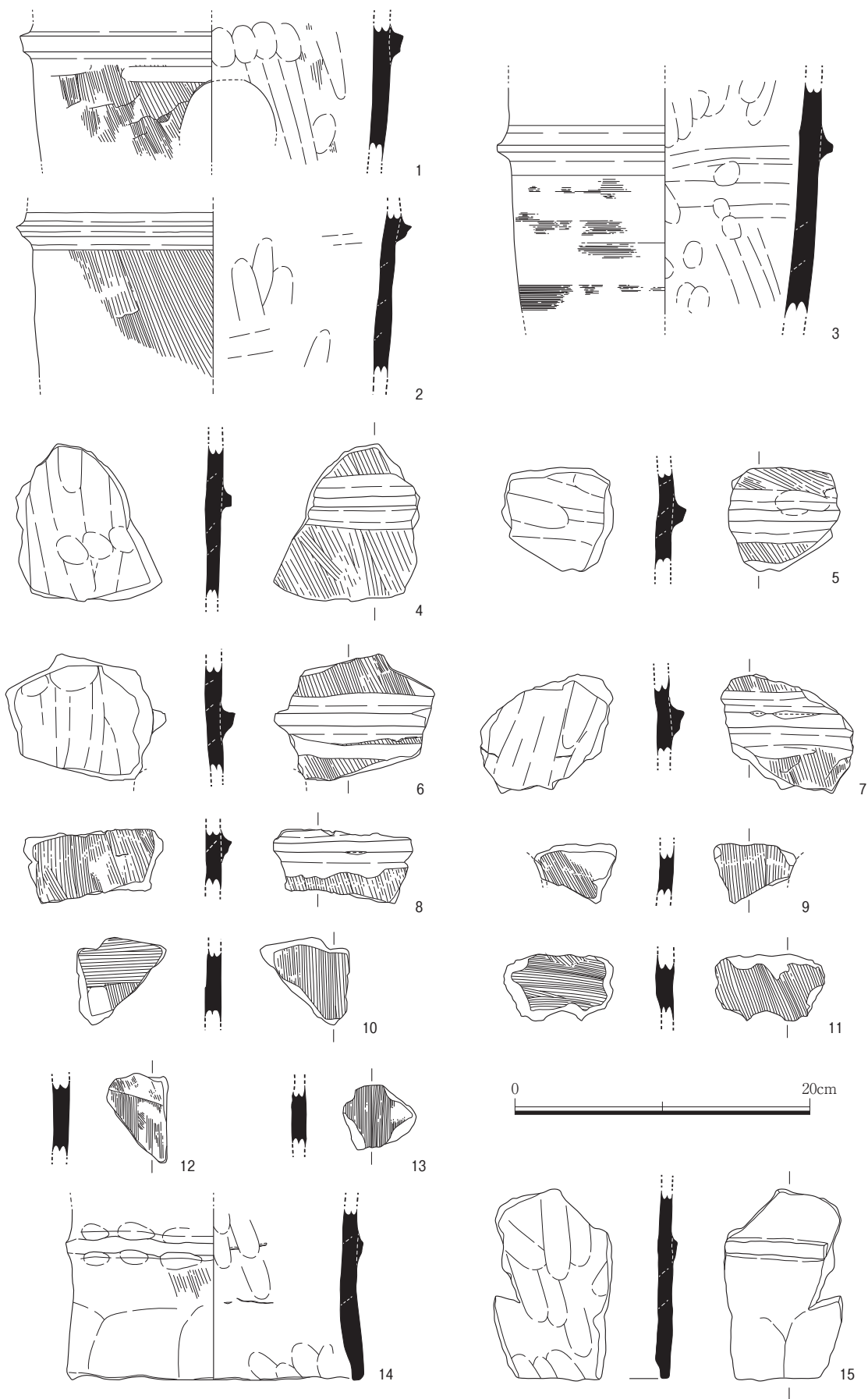


图26 1号墳出土埴輪実測図(1)

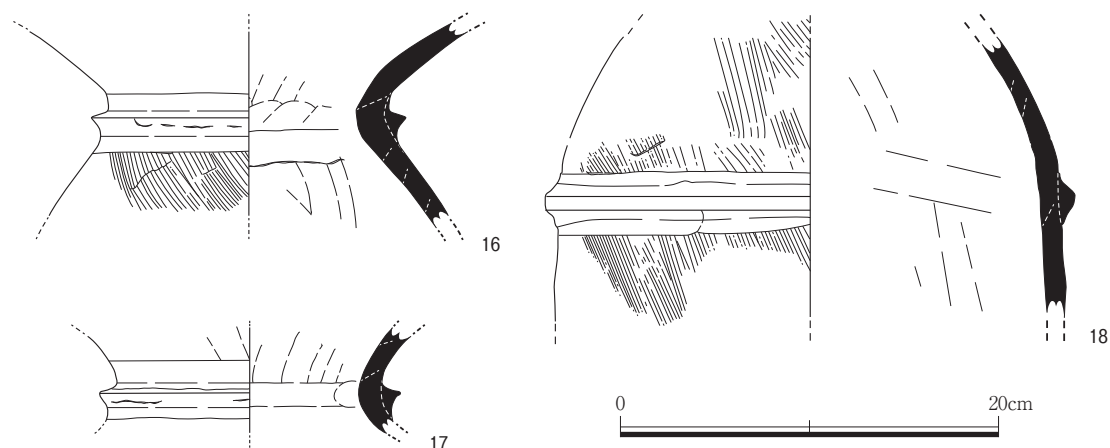


図27 1号墳出土埴輪実測図(2)

表5 1号墳出土円筒埴輪観察表

番号	器種	法量			突帯	外面調整	内面調整	ハケメ (/cm)	色調	胎土	焼成	備考
		径 (復元)	底部高	厚み								
1	円筒	(23.4)	—	1.1	台形	タテハケ	タテハケ ナデ	6	橙	~0.2cmの白・透明粒多	良好	
2	円筒	(23.5)	—	0.9	台形	タテハケ	ナデ	4	にぶい黄橙	~0.2cmの白粒多	良	
3	円筒	(21.0)	—	1.4	台形	ヨコハケ	ナデ	13	浅黄橙	~0.2cmの白・黒粒多	良好	
4	円筒	—	—	1.0	台形	タテハケ	ナデ	5	にぶい黄橙	~0.2cmの白・透明・黒粒多	良好	
5	円筒	—	—	1.0	台形	タテハケ	ナデ	4	橙	~0.2cmの白・透明粒多	良好	
6	円筒	—	—	1.0	台形	タテハケ	ナデ	5	橙	~0.2cmの白・透明粒多	良好	
7	円筒	—	—	1.5	台形	タテハケ	ナデ	7	橙	~0.2cmの透明・白粒多	良好	
8	円筒	—	—	1.1	台形	タテハケ	タテハケ	6	橙	~0.2cmの白・透明・黒粒多	良好	
9	円筒	—	—	1.1	—	タテハケ	タテハケ	6	橙	~0.2cmの白粒多	良好	
10	円筒	—	—	1.0	—	タテハケ	ハケ ナデ	7	橙	~0.2cmの白・透明粒多	良好	
11	円筒	—	—	1.1	—	タテハケ	ハケ	6	明赤褐	~0.2cmの白粒多	良好	
12	円筒	—	—	1.0	—	タテハケ	ナデ	9	にぶい橙	~0.2cmの白・透明・黒粒多 やや雲母混	良好	
13	円筒	—	—	1.0	—	タテハケ	ナデ	9	橙	~0.2cmの白・透明・黒粒多	良好	
14	円筒	(20.0)	8.8	1.2	M字	タテハケ オサエ	ナデ オサエ	5	橙	~0.2cmの赤・白・黒粒多	良	底部調整
15	円筒	—	9.5	0.9	低台形	オサエ	ナデ オサエ	—	橙	~0.2cmの透明・白・黒粒多	良	底部調整
16	朝顔	(17.7)	—	1.1	三角形	タテハケ ナデ	ナデ オサエ	5	明黄褐	~0.2cmの白粒多	良好	
17	朝顔	(16.0)	—	1.0	三角形	ナデ	ナデ オサエ	—	明黄褐	~0.2cmの白・透明粒多	良好	
18	朝顔	(27.0)	—	1.1	台形	タテハケ ナデ	ナデ	6	にぶい黄橙	~0.2cmの白・透明粒多	良好	

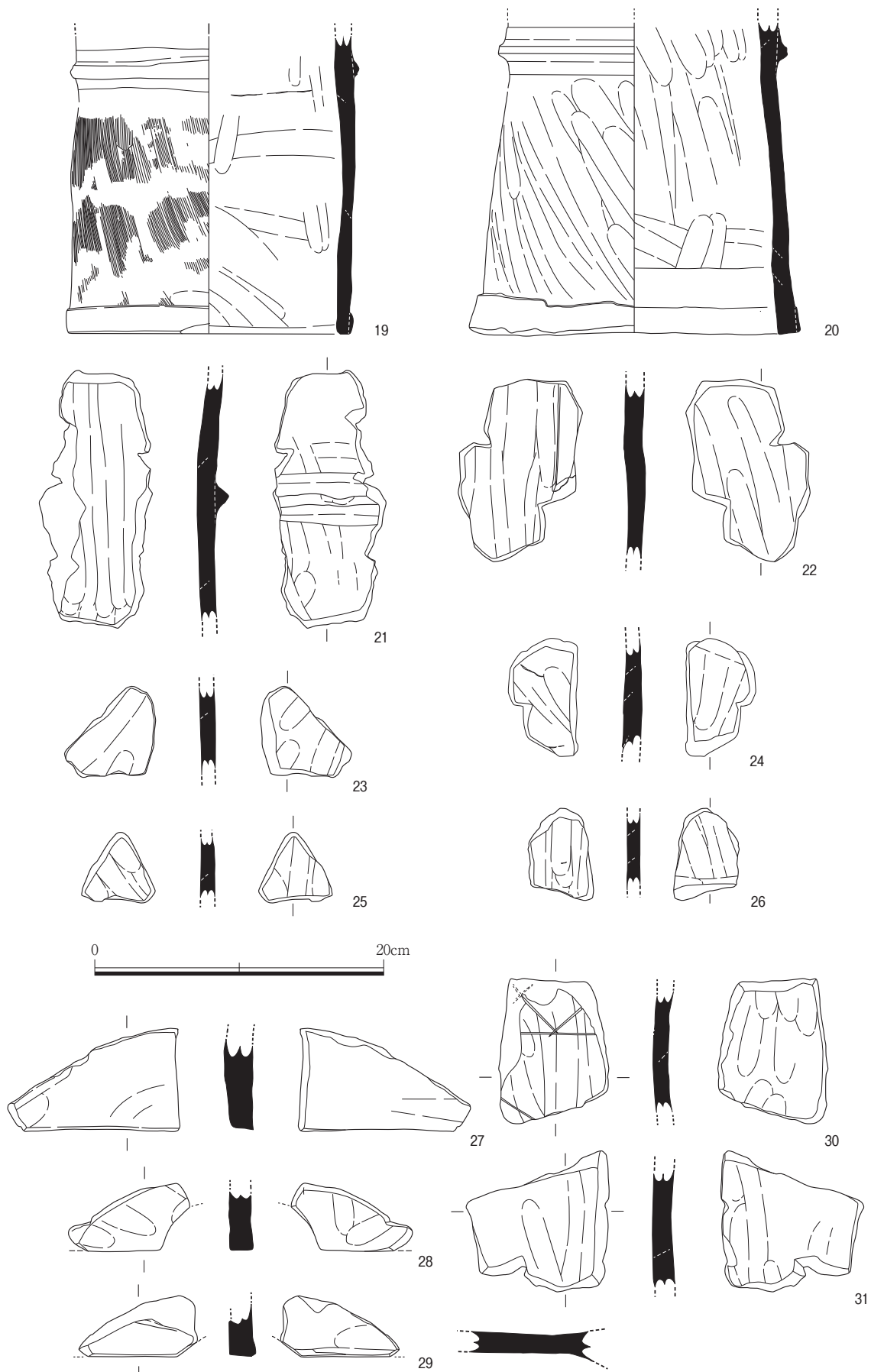


图28 1号墳出土埴輪実測图(3)

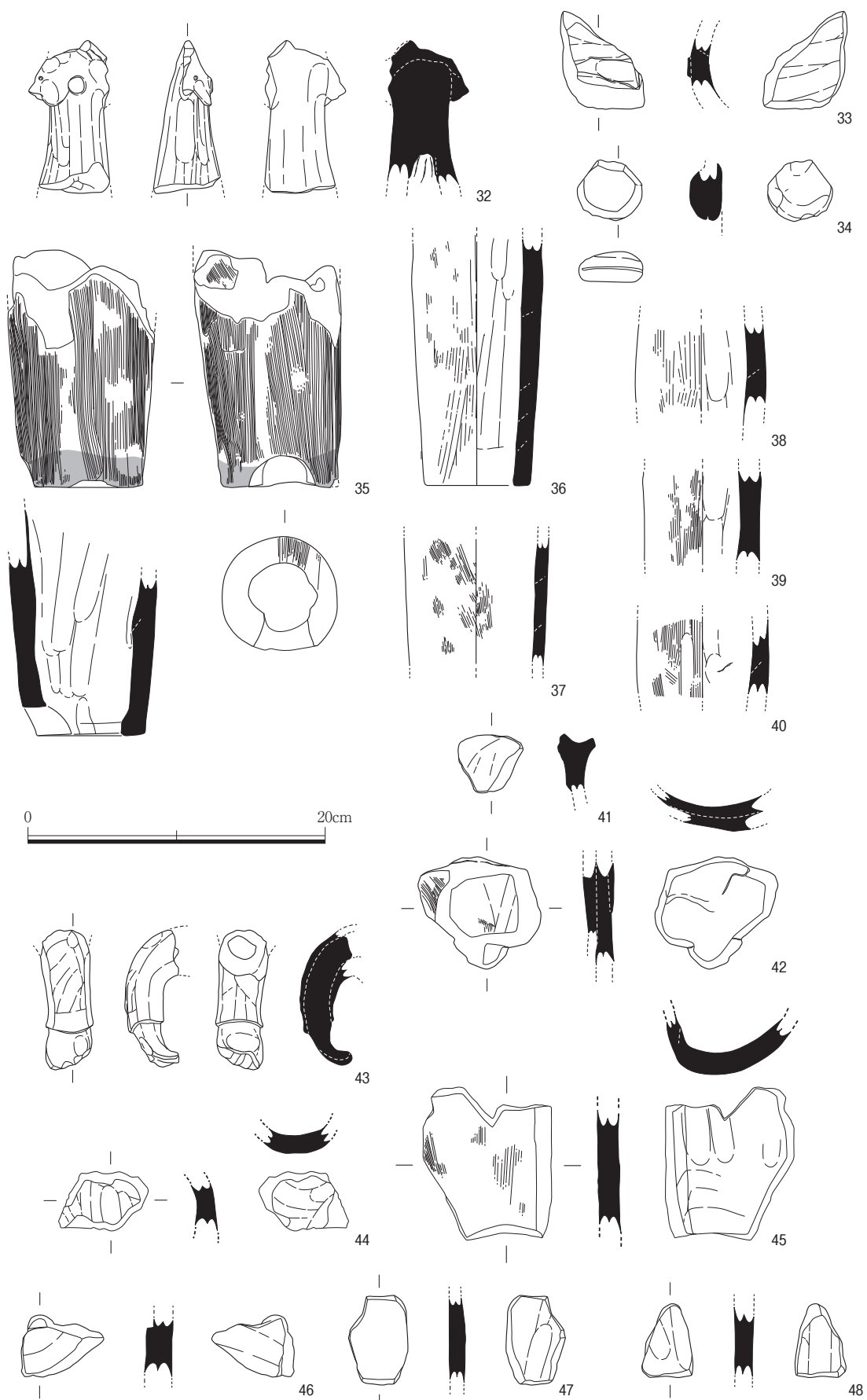


図29 1号墳出土埴輪実測図(4)

呈する。最下部の底部突帯の幅は19が1.5cm、20が2.0cmである。20の底部突帯はやや波打った形状を呈している。これは、突帯を貼り付ける際に断続的にナデつけられたものと考えられ、その後のヨコナデによる成形を省略している。21～26は内外面ともにナデ調整を施し、突帯の断面形状が三角形を呈することから、これらも形象埴輪の基部片と判断した。

家形埴輪・盾形埴輪 27、28は家形埴輪である。いずれも底部と考えられ、内外面の調整にナデを用いる。28は半円形の透孔を穿つ。29は家形埴輪もしくは盾形埴輪で、30、31は盾形埴輪と考えられる。30は外面にナデを施したのち、棒状の工具で線刻を施したとみられる。31は石見型埴輪の可能性はある（和田2006）。

鶏形埴輪 32は鶏形埴輪の頭部である。頭頂部に粘土貼付による鶏冠表現のほか、片面のみに刺突による目表現や貼付による肉垂や耳表現がなされる（忽那2001、賀来2002）。反対面にはナデを施したのみで、剝離痕跡はみられない。そのため、製作時より片面のみに顔表現をおこなっていたものと考えられる。内面にはしほり痕跡が確認できる。

馬形埴輪 33～42は馬形埴輪である。顔部分（33）のほか、馬装（34）、脚部（35～40）がみられる。33は顔の轡（引手）もしくは面繫部分と考えられる。34は表面が丸みを帯び、下部に線刻がみられることから、馬鈴と考えられる。41、42は馬形埴輪に伴う破片と考えられ、41はたてがみ部分の可能性はある。

脚部の底径は35が7.7cm、36が8.5cm、37が10.0cm、38が8.8cm、39が9.1cm、40が9.0cmである。外面調整にはタテハケを施し、内面にはナデを施す。ハケメの条数は8～9条／1cmと揃う。35には底部に半円形の切り込みがなされる。基底面にはハケ調整の痕跡があるため、脚部の粘土紐をある程度積上げ、外面調整等をおこなった後に上下を反転し、基底面にハケ調整を施したものと考えられる⁽²⁾。基底部付近には黒斑が一周するが、これは焼成時の痕跡と考えられる。

人物埴輪 43～45は人物埴輪である。43は腕部分である。腕は中実で作られ、やや指を握り込むような表現がなされる。掌にあたる部分には剝離痕跡はない。腕をおろした状態を表現しているものと考えられ、小型の人物埴輪と推定される。44は首部分もしくは腋^{わき}部分である。45は人物埴輪に伴う何らかの破片と考えられる。

46～48は不明形象埴輪片である。いずれも内外面の調整にユビナデを施す。

（3）出土埴輪の位置づけ

埴輪の特徴 1号墳から出土した円筒埴輪の底部径は約20cm、底部高は9cm前後である。製作技法の特徴として、外面調整はタテハケのみで、底部調整には押圧技法を用い、断続ナデ技法Aを使用することがあげられよう。

つぎに形象埴輪の様相として、小片で、全体像が明瞭な個体はない。馬形埴輪の脚部に半円形の切込みがなされるが、周辺古墳で類例は存在しない。

さらに形象埴輪基部の特徴として、以下の3つの特徴があげられる。①外傾の粘土紐積上げ痕跡があること、②基底部に突帯をもつこと、③底部高が約19cmを超えること、以上3つである。

表6 1号墳出土形象埴輪観察表

番号	器種	法量			突帯	外面調整	内面調整	ハケメ (/cm)	色調	胎土	焼成	備考
		径 (復元)	底部高	厚み								
19	形象	20.2	18.9	1.0	丸台形	タテハケ ナデ	ナデ	12	うす橙	～0.2cmの白・透明粒多	良好	倒立技法
20	形象	23.1	20.3	1.1	台形	ナデ	ナデ	—	橙	～0.4cmの透明・白・黒粒多	良好	倒立技法
21	形象	—	—	1.3	三角形	ナデ	ナデ	—	にぶい黄橙	～0.2cmの白・透明粒多	良好	
22	形象	—	—	1.3	—	ナデ	ナデ	—	にぶい橙	～0.2cmの透明・白・黒粒多	良好	
23	形象	—	—	1.1	—	ナデ	ナデ	—	黄橙	～0.2cmの透明・白・赤粒多	良好	
24	形象	—	—	1.2	—	ナデ	ナデ	—	橙	～0.2cmの透明・白・黒粒多	良好	
25	形象	—	—	1.0	—	ナデ	ナデ	—	橙	～0.2cmの透明・黒・白粒多	良好	
26	形象	—	—	2.6	—	ナデ	ナデ	—	明黄褐	～0.2cmの透明・白・赤粒多	良好	
27	家	—	—	1.8	—	ナデ	ナデ	—	橙	～0.3cmの白・黒・赤・透明粒多	良	
28	家	—	—	1.5	—	ナデ	ナデ	—	橙	～0.2cmの白・透明粒多	良	
29	器財	—	—	1.7	—	ナデ ケズリ	ナデ	—	橙	～0.2cmの透明・白粒多	良好	家か盾
30	盾	—	—	1.1	—	ナデ	ナデ	—	橙	～0.2cmの白・赤・黒粒多	良好	
31	盾か	—	—	1.5	—	ナデ	ナデ	—	橙	～0.3cmの白・透明・赤粒多	良好	石見?
32	鶏	—	—	1.5	—	ナデ オサエ	?	—	橙	～0.4cmの白・透明粒やや多	良	
33	馬	—	—	1.2	—	ナデ	ナデ	—	明黄褐	～0.2cmの透明・白・黒粒多	良好	
34	馬	—	—	2.1	—	ナデ	ナデ	—	にぶい黄橙	～0.2cmの白・透明・赤粒多	良	馬装
35	馬	7.7	—	1.3	—	タテハケ	ナデ	9	橙	～0.2cmの透明・白粒多	良	脚部
36	馬	(8.5)	—	1.2	—	タテハケ	ナデ	8	橙	～0.2cmの透明・白・黒粒多	良好	脚部
37	馬	(10.0)	—	0.9	—	タテハケ	タテハケ	9	明黄褐	～0.2cmの白・透明・黒粒多	良	脚部
38	馬	(8.8)	—	1.3	—	タテハケ	ナデ	9	浅黄橙	～0.2cmの透明・白・黒粒多	良	脚部
39	馬	(9.1)	—	1.4	—	タテハケ	ナデ	9	にぶい黄橙	～0.2cmの透明・白粒多	良好	脚部
40	馬	(9.0)	—	1.1	—	タテハケ	ナデ	8	赤	～0.2cmの白・黒粒多	良	脚部
41	馬	—	—	2.6	—	ナデ	ナデ	—	浅黄橙	～0.2cmの白・透明粒多	良	
42	馬	—	—	1.8	—	タテハケ	ナデ	8	浅黄橙	～0.2cmの透明・白・黒粒多	良	
43	人物	—	—	2.9	—	ナデ オサエ	ナデ オサエ	—	橙	～0.2cmの白・透明粒多	良	腕
44	人物	—	—	1.3	—	ナデ	ナデ	ナデ	橙	～0.3cmの白・黒粒多	良好	
45	人物	—	—	1.3	—	ハケ	ナデ	5	明黄褐	～0.2cmの黒・透明・白粒多	良好	
46	不明	—	—	1.7	—	ナデ	ナデ	ナデ	橙	～0.2cmの白・透明・黒粒多	良好	
47	不明	—	—	1.1	—	ナデ	ナデ	ナデ	黄橙	～0.2cmの白・透明粒多	良	
48	不明	—	—	1.2	—	ナデ	ナデ	—	明黄褐	～0.2cmの白・透明粒多	良好	

粘土紐の接合痕跡が外傾することは、倒立技法を使用したものと考えられる（形象基部倒立技法。東影2010）⁽³⁾。底部高については、円筒埴輪は9.5cm、形象埴輪は20cm前後であり、その差異は歴然としている。

周辺の埴輪との比較 近隣に所在する古墳で、同時期かつ埴輪が出土する古墳は、五ヶ庄二子塚古墳（杉本・荒川編1992）や、青谷石神1号墳（梶本1986）、菟道門ノ前古墳（吹田編1998）、城陽市冑山1号墳（堤1967、高橋1993、久保1995）や木津川市音乗谷古墳（高橋ほか2005）などの前方後円墳のほか、薬師堂古墳（中島2004）がある。これらは墳形や規模にかかわらず、埴輪の規格は4条5段構成で、器高は50～60cmのものが基本となる。底部径は18～20cm、底部高は12～14cmが多く、外面調整はタテハケで、突帯に断続ナデ技法Aを用いるなどの共通点が多い。底部調整は施さないものが多い⁽⁴⁾。

底部突帯をもつ形象埴輪基部は、6世紀になると畿内及びその周辺でみられる（高橋1992、東影2008・2010など）。類例として、近隣に所在する冑山1号墳のほか、周辺地域では菟道門ノ前古墳や音乗谷古墳などがあげられる⁽⁵⁾。底部径はおおよそ19～20cm、底部高は20cm前後であり、底部高は普通円筒埴輪よりも高い。

従来、南山城地域には円筒埴輪の製作技術や透孔配置の共通性から、埴輪の製作集団が2系統あると指摘されてきた（東影2008）⁽⁶⁾。また、形象埴輪に共通する特徴が乙訓地域でもみられ、広域に展開することも指摘された（和田2006、東影2018など）。以上をふまえて坊主山1号墳の埴輪を見ると、円筒埴輪の底部調整に板押圧を使用することや、形象埴輪の基部製作技法などから、冑山1号墳や音乗谷古墳に類似する。両古墳に埴輪を供給していた集団に近い系譜をもつ、もしくは同一集団による製品と考えられる。

（泉 真奈）

第4章 2号墳の出土遺物

1 出土遺物の種類と数量

西棺出土遺物の種類と数量 概報では、西棺の棺内から武器として大刀1点、鉄鏃一括、工具として刀子1点、装身具として金環1点、冠らしき金銅板が1点、須恵器の壺2点、提瓶1点、台付壺1点、有蓋台付壺1点、棺外から須恵器の蓋杯2点、須恵器片多数が出土したと報告されている。

現状では、大刀以外に短刀が1点あり、出土状況図では棺内の南西側に描かれている。また、平根系鉄鏃は11点確認できる。金環1点は特定できない。冠らしき金銅板は確認できず、概報にあるとおり脆弱で、取り上げられなかったと考えられる。須恵器では、概報に記述されていない甕が1点ある。また、蓋杯も2点ではなく、3点ある。

なお、刀子1点、鑷子1点、立間付の環状鉄製品1点が2号墳出土品として保管されているが、いずれの棺から出土したか不明なので、ここで報告する。

東棺出土遺物の種類と数量 概報では、東棺の棺内から武器として鉄鏃一括、装身具として銅環2点、鉄環2点、ガラス小玉2種、土製丸玉、須恵器の蓋付埴1点、棺外から馬具として鉄鎖1点、須恵器の埴2点、杯13点、高杯1点、有蓋高杯1点が出土したと報告されている。

現状では、鉄鏃は長頸鏃34点が確認できる。いっぽう、鉄環2点は特定できない。また、ガラス小玉2種と土製丸玉は1号墳出土品と区別ができない状態である。馬具については、一括して袋に入れた鉄器片中に兵庫鎖状のものが1点あるが、遺存状態が悪く、図や写真を提示できなかった。

(豊島)

表7 2号墳の出土遺物

位置	種類	器種	概報	現状	
西棺	武器	大刀	1	大刀1、短刀1	
		鉄鏃	一括	平根系11	
	工具	刀子	1	1	
	装身具	金環	1	不明	
		金銅板	1	不明	
	須恵器	甕		1	
		壺	2	2	
		提瓶	1	1	
		台付壺	1	1	
		有蓋台付壺	1	1	
棺外	須恵器	蓋杯	2	杯蓋3	
		その他	多数	不明	
東棺	武器	鉄鏃	一括	長頸鏃34	
	装身具	銅環	2	2	
		鉄環	2	不明	
		ガラス小玉 土製丸玉	2種	帰属不明 帰属不明	
	土器	蓋付埴	1	1	
	棺外	馬具	鉄鎖		1
		須恵器	埴	2	2
杯			13	杯身10、蓋7	
高杯			1	1	
有蓋高杯	1		1		
不明	工具	刀子		1	
		鑷子		1	
		環状品		1	

2 西棺出土遺物

(1) 武器

①大 刀 (図32-2、図版32-1)

図32-2は棺内出土の大刀である。ほぼ完形の大型品で、全長102.6cm、刃部の最大幅3.6cm、身の厚さ1.0cm、茎の長さ20.1cmである。切先はゆるやかな曲線を描く。X線写真によれば、関は0.3cmと小さく、関の付近に長さ1.4cm、深さ0.4cmの茎元抉りをもつ。茎には直径3～4mm程度の目釘穴が3ヶ所あけられている。

把は木製で、把縁に鹿角を使用している。把の背側にも木質が認められ、把頭付近には別材を当てている。把頭付近は遺存状態が悪く、把頭にも鹿角を使用したか否かは不明である。把間には太さ約2mmの紐を緊密に巻いており、肉眼観察では「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」のように見える (図30、沢田2008)。

鞘は全体に残りが悪いが、木製で、鞘口に鹿角を使用しており、わずかに直弧文らしい文様が見える (図31)。部分的に絹と思われる目の細かい布が遺存しており、鞘間は布巻と考えられる。

茎元抉りをもつ大刀については、近年、荒井啓汰が集成し、検討を加えている (荒井2020)。荒井は全国の47例を集成し、①全長100cm以上、刃部長80cm以上の大刀が多いこと、②把間に「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」を施す例が多いことなどを指摘した。本例も荒井の指摘に当てはまる事例である。

②短 刀 (図32-1、図版32-2)

図32-1は短刀である。全長28.9cm、身の最大幅2.3cm、厚さ0.7cm、茎の長さ6.9cm。切先はゆるやかな曲線を描く。刃部側と背側にそれぞれ0.3cmの関をもつ、両関の短刀である。

把には木質が残るが、詳しい構造は不明である。鞘は背側に接合線が見え、全体を2枚に合わせる。鞘口には別材の鹿角の痕跡が見え、鞘口別材式と考えられる (豊島2010)。

(豊島)



図30 2号墳西棺出土大刀の把間



図31 2号墳西棺出土大刀の鞘口

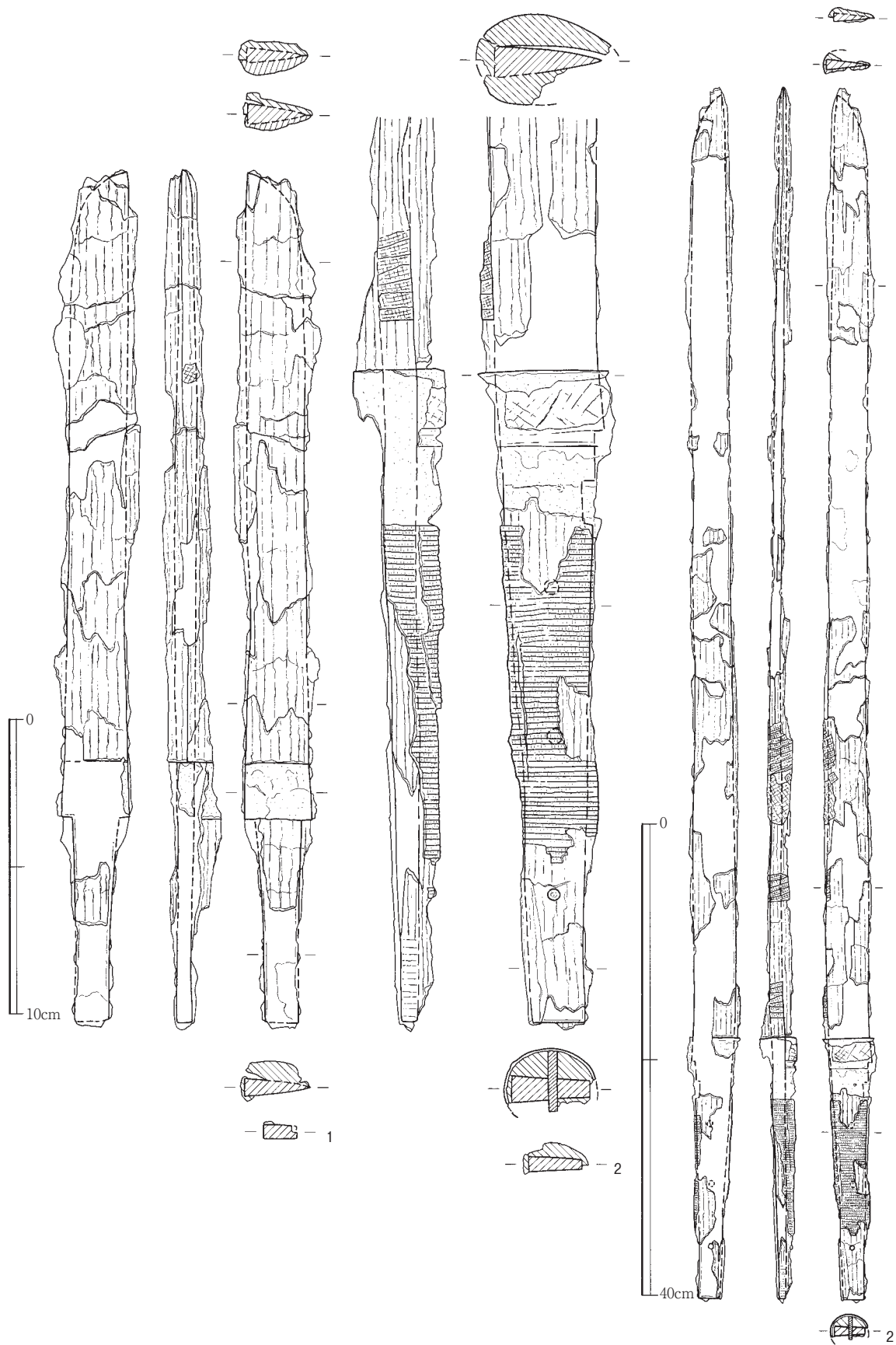


図32 2号墳西棺出土大刀、短刀実測図

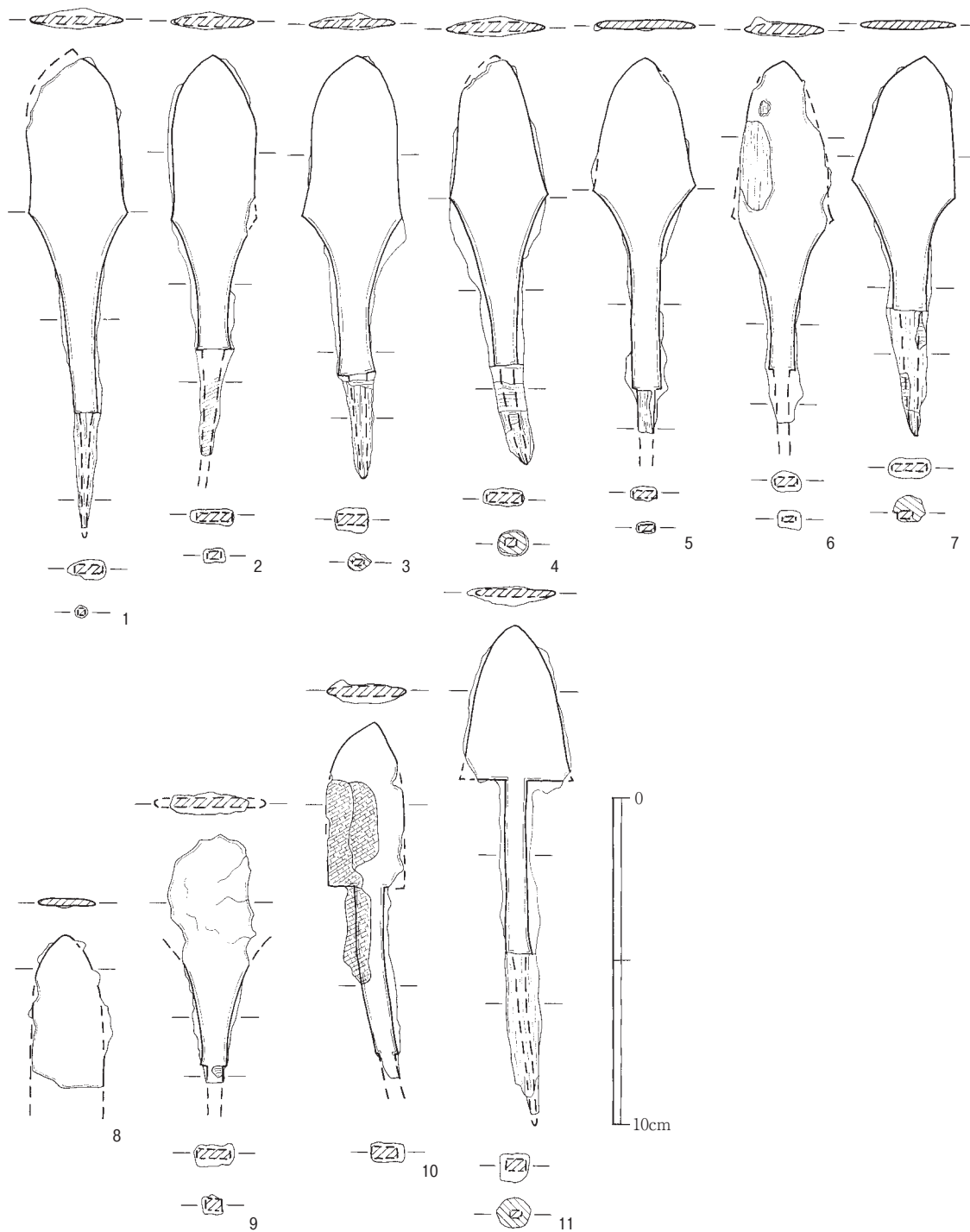


図33 2号墳西棺出土鉄鍬実測図

③鉄 鍬 (図33、図版33)

鉄鍬の帰属 概報では、2号墳東棺から鉄鍬が一括で出土したと報告されている。いっぽう、西棺からも鉄鍬が一括で出土しており、現状では遺物の注記やラベルから両者を区別できない。ただし、概報の出土状況図では西棺出土鉄鍬は平根系に限られるように見える。また、東棺では長頸鍬が束になって出土していることは確実である。したがって、本書では平根系鉄鍬を西棺、長頸鍬を東棺からの出土品と判断し、報告する。西棺出土の鉄鍬は平根系11点である。

大型定角2式（1～7） 川畑分類大型定角2式の一群である。完形品は3点（1、3、7）あり、全長11.5～14.3cm、身部長7.7～10.1cm、身部幅3.0～3.3cm、茎部長3.0～4.2cmである。身部は両丸造り、鏃身下半部断面および茎部断面は方形をなす。関部形状は角関（1、4～7）と台形関（2、3）のものがある。3、4は漆の付着が認められ、4、7は矢柄を固定するための樹皮巻きが認められる。

有頸平根C式（10、11） 有頸平根C式の一群である。どちらも茎部を欠損する。10は残存長10.7cm、身部長5.1cm、身部幅2.2cm、頸部長4.8cm、茎部は残存部で0.8cmである。鏃身部は両丸造り、頸部断面は方形をなす。鏃身部から頸部には布の付着が認められる。関部は角関で、頸部が湾曲している。11は残存長14.9cm、身部長4.9cm、身部幅3.3cm、頸部長4.7cm、茎部残存長は5.3cmである。鏃身部は両丸造りで、頸部断面および茎部断面は方形をなす。関部は角関とみられる。茎部に矢柄が残存している。

型式不明の平根系鉄鏃（8、9） 8、9は欠損部が大きく、型式は不明である。8は鏃身部のみが残存し、残存長4.8cm。鏃身部は剣身状で、両丸造りである。9は鏃身下半部から茎部の一部が残存し、残存長7.5cm、身部長6.3cm、茎部長1.2cmである。鏃身部は両丸造りと推定され、鏃身下半部断面および茎部断面は方形をなす。関部は角関である。大型定角2式の可能性がある。

（松島）

（2）工 具（図34、図版32-3）

概報では、2号墳の西棺内から刀子が1点出土したと報告されている。現状では刀子は2点あり、どちらが西棺出土品か分からない状況である。また、他に出土埋葬施設が未確認の鑷子と環状鉄製品があり、ここで合わせて報告する。

刀 子 1は鹿角装刀子で、全長13.5cm、茎長3.9cm、刀身の最大幅1.2cm、茎の最大幅1.2cm、厚さ0.5cmである。刃部側はゆるやかな関をもち、背側にもわずかに関がある両関造りと考えられる。X線写真でも目釘穴は確認できない。刃部に木製鞘、茎部に鹿角が遺存する。

2は鹿角装刀子で、全長8.9cm、茎長2.8cm、刀身の最大幅1.0cm、茎の最大幅1.0cm、厚さ0.7cmである。刃部側のみに関が認められる。刃部は緩やかな曲線を描き、研ぎ減りが著しい。刀身には鞘の木質、把には鹿角が残存する。一部に布が付着する。

鑷 子 3は鑷子である。全長6.0cm、最大幅1.8cmである。断面が角丸方形の鉄棒を8字状に折り曲げる。表面には布が付着する。

環状鉄製品 4は環状鉄製品。半分を欠損するが、直径4cm前後に復元できる。断面形は0.2cm程度の薄い板状を呈する。上部に幅2cm、高さ0.5cmの立聞状の突起をもつが、そこに穴はない。馬具の可能性もあるが、用途は不明。

（漆原）

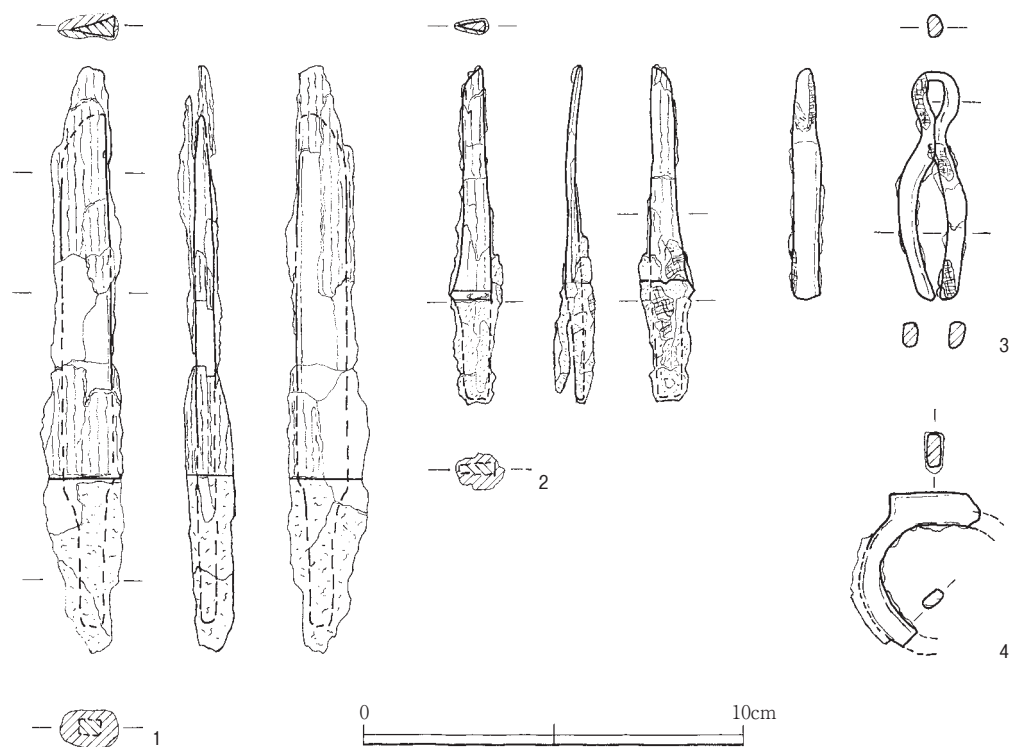


図34 2号墳出土工具実測図

(3) 装身具

概報では西棺の棺内から金環1点、冠らしき金銅板1点が出土したと報告されているが、現状では遺物を確認できない。後者は脆弱で取り上げられなかった可能性もある。

(豊島)

(4) 須恵器(図35、図版34・35)

概報では西棺の棺内から壺2点、提瓶1点、台付壺1点、有蓋台付壺1点、棺外から蓋杯2点、その他破片多数が出土したと報告されている。現状では杯蓋3点、甕1点、壺2点、提瓶1点、台付壺2点が確認できる。

杯 蓋 図35-1~3は杯蓋である。1、2が概報の棺外出土品と考えられる。1は完形品で、口径14.9cm、器高4.6cm。色調は灰色で、焼成は良好。胎土は密である。天井部から胴部にかけて反時計回りに回転ヘラ削り、胴部から口縁部にかけて回転ナデが施される。内面は回転ナデで、天井部にはさらにナデを施す。口縁部はやや外反し、端部は丸みをおびる。

2は口径の2分の1を欠損する。復元口径14.3cm、残高4.1cm。色調は灰色、焼成は良好、胎土は密である。天井部外面に時計回りに回転ヘラ削り、胴部から口縁部、内面には回転ナデが施される。口縁部はやや内傾し、端部はわずかに凹面をなす。

3は棺外出土のうち、概報でその他として一括されたものと考えられる。口径の3分の1を欠損する。復元口径13.0cm、残存高4.3cm。色調は灰色、焼成は良好、胎土は密である。天井部

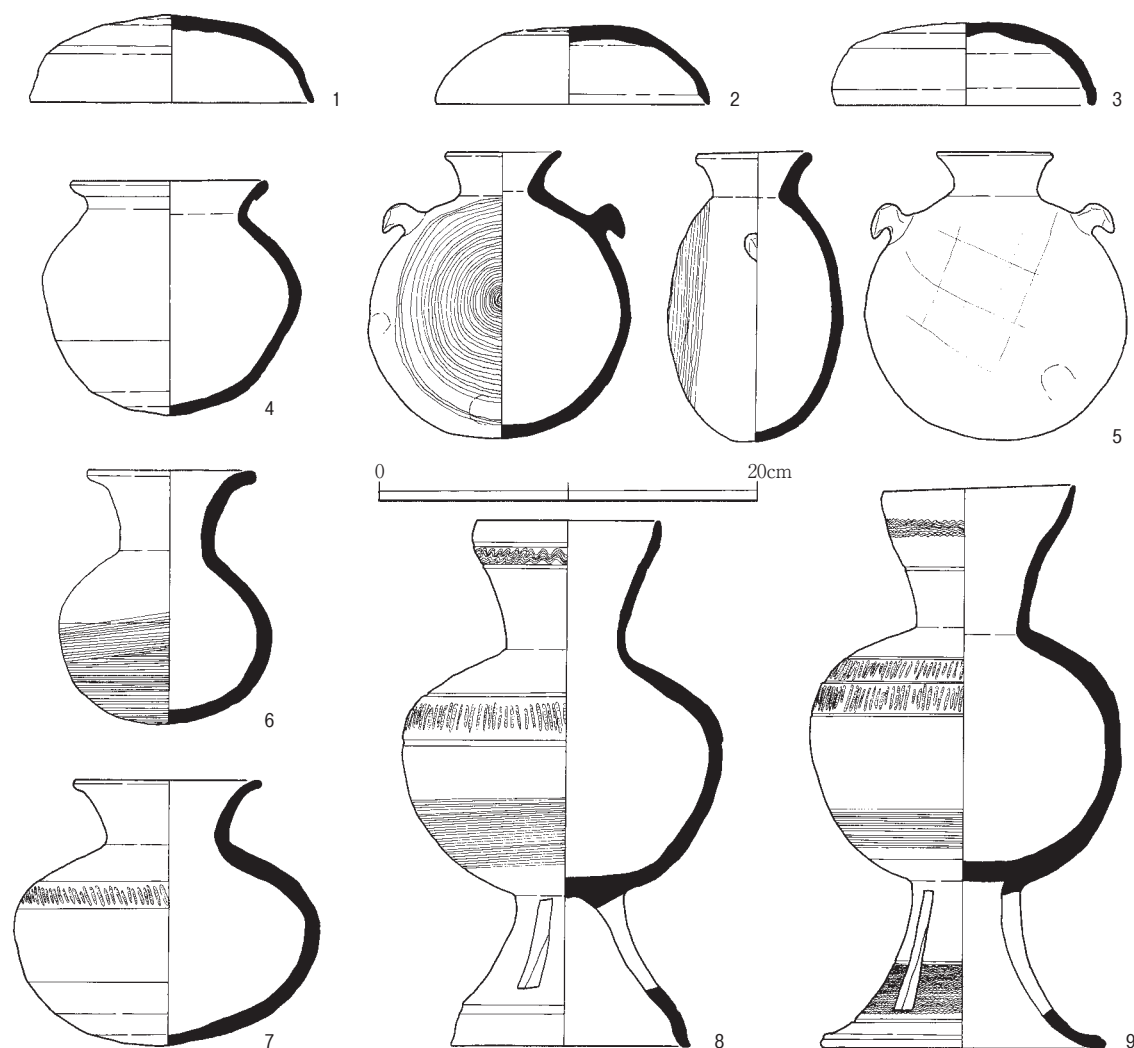


図35 2号墳西棺出土須恵器実測図

外面に反時計回りに回転ヘラ削り、胴部から口縁部、内面に回転ナデを施す。口縁端部は内傾し、端部はわずかな凹面をなす。

甕 4は甕である。口縁部の4分の1程度を欠損し、口径10.0cm、器高12.4cm、胴部最大径は13.4cmである。色調は外面が赤灰色、内面は赤みをおびた白色を呈し、焼成は良好、胎土は密である。口頸部は短く外反し、口縁部は丸く収める。内面および外面の口縁部から胴部にかけて回転ナデを施し、外面の胴部から底部にかけて回転ヘラ削りを施す。

提瓶 5は提瓶である。完形品で、口縁部径6.1cm、器高15.1cm、体部最大径13.8cmである。色調は灰色で、胎土は密である。口径部は外反し、口縁端部は丸く収めている。体部の両側に鉤型の耳が付く。口縁部内面から外面には回転ナデを施す。体部は丸く膨らみ、両面に1cmあたり6～8本程度のカキ目を施す。底部付近に自然釉が付着する。

壺 6は壺である。完形品で、口径8.6cm、器高13.8cm。色調は赤灰色、焼成は良好、胎土は密である。外面は底部から胴部にかけてカキ目が施され、内面には回転ナデが施されている。

7は壺である。口縁部をわずかに欠損し、口径9.4cm、器高14.0cm、胴部最大径16.0cmであ

る。色調は、外面が赤みがかった暗灰色、内面が暗灰色を呈する。焼成は良好、胎土は密である。全体に赤色顔料が付着する。口頸部は外反し、口縁端部は丸く収める。内面から外面胴部にかけて回転ナデを施し、外面胴部から底部にかけて回転ヘラ削りを施す。また、胴部にはヘラ状工具による刺突圧痕がある。

台付壺 西棺では棺内から有蓋台付壺と台付壺が1点ずつ出土しているが、現状ではどちらが有蓋なのか判断できない。ここでは合わせて報告する。

8は台付壺である。完形品で、口径9.7cm、器高27.8cm、胴部最大径16.8cm、脚部径12.6cmである。色調は内外面とも黄灰色を呈し、焼成は良好。胎土は密で、1mm程度の砂粒を含む。口頸部は長く緩やかに外反し、口縁部付近に2条の沈線をもち、その間に波状紋を描く。口縁部は丸く収める。胴部にも2条の沈線をもち、その間にヘラ状工具による刺突圧痕を施す。口頸部内面から胴部外面にかけて回転ナデを施す。胴部外面から底部外面にかけては、回転ヘラ削りを施したのちにカキ目を施す。脚部は内外面とも回転ナデを施す。脚部には長方形の透孔が3方向に開けられている。脚はやや内径し、端部は丸く収める。胴部と脚部に接合痕跡が認められる。

9は台付壺である。完形品で、口径10.1cm、器高29.7cm、胴部最大径16.4cm、脚部径14.8cmである。色調は内外面とも暗灰色を呈し、一部が赤みを帯びる。焼成は良好、胎土は密で、1mm程度の砂粒を含む。全体に赤色顔料が付着する。口頸部は長く緩やかに外反し、口縁部は丸く収める。口縁部付近に波状紋、その下側に1条の沈線を施す。胴部には3条の沈線と、それらの間にヘラ状工具による刺突圧痕を施す。底部にはカキ目を施す。脚部には長方形の透孔が3方向に開けられている。脚はやや外反し、端部は丸く収める。脚部には2条の沈線と波状紋が施される。口頸部の内面から外面、胴部底部から脚部の内面にかけて回転ナデを施す。口縁部には焼成時の欠損が認められる。また、胴部と脚部の接合痕跡が認められる。

なお、台付壺のうち1点は蓋を伴うとされているが、現状では遺物が認められない。

(竹川可純)

3 東棺出土遺物

(1) 武器(鉄鏃)(図36・37、図版36・37)

長頸A1式(1、2、5、7~13、15、16) 川畑分類の長頸A1式である。完形品は1点(16)のみで、鏃身部から茎部の一部まで残存しているものが5点(1、2、12、13、15)、鏃身部から頸部の一部まで残存しているものが6点(5、7~11)ある。身部長は1.4~2.4cm、身部幅1.2~1.4cm、頸部長13.0~14.7cm、茎部長10.0cmであり、完形品の16は全長25.1cmの大型品である。

鏃身部は片丸造りで、頸部断面および茎部断面は方形をなす。関部は角関(15)と台形関(1)、棘関(2、12、13、16)である。1、2、12、13、15、16は茎部に矢柄が一部残存し、矢柄を固定するための樹皮巻きが認められる。1、2、16には布の痕跡が認められ、16には茎に下巻きが観察される。

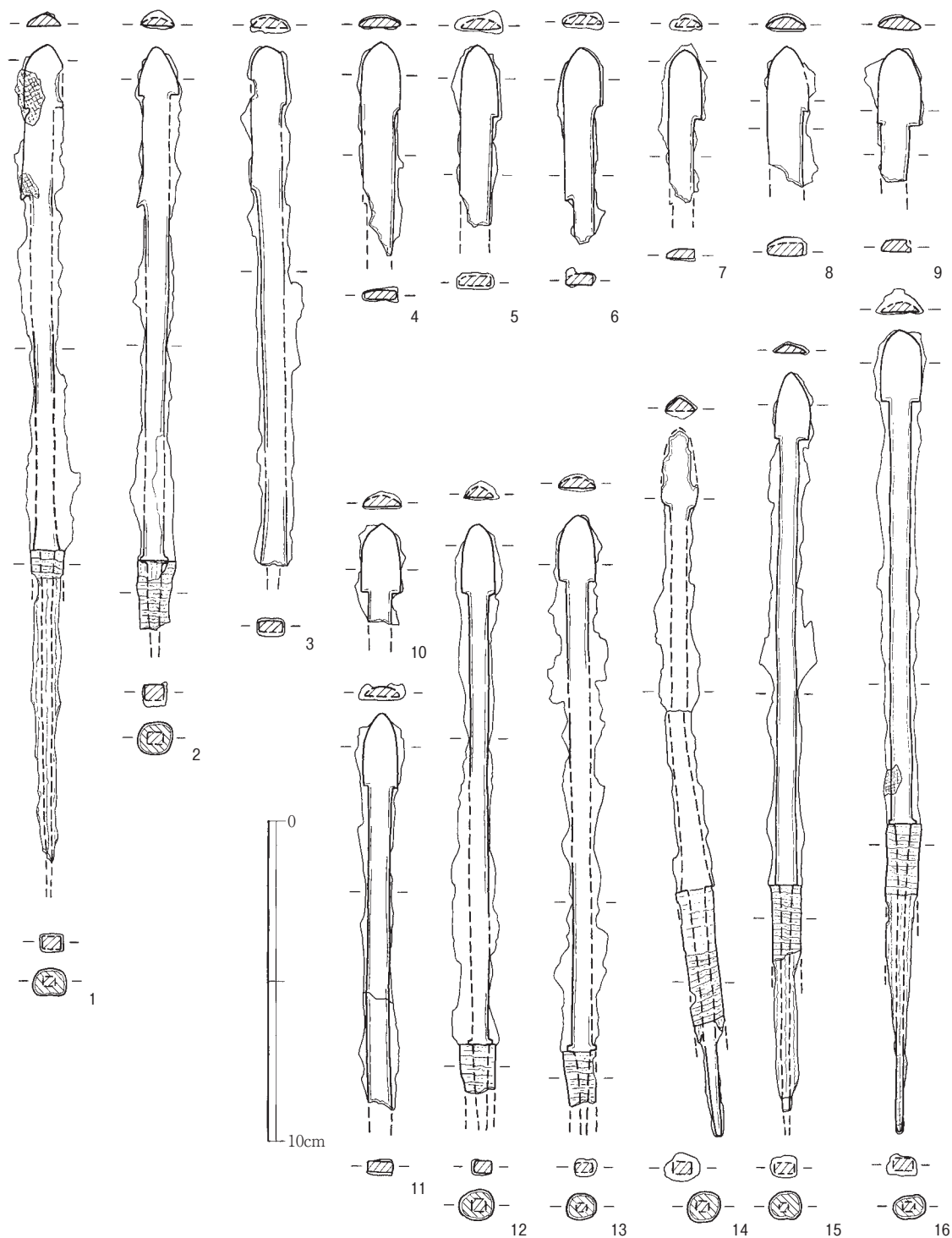


図36 2号墳東棺出土鉄鏃実測図(1)

1、2、5、7～9は頸部に別造り片腸拵があった痕跡が認められる。別造り片腸拵には鏃身部と分離して成形された個体(1、2、9)と、鏃身部と一体的に成形された個体(5、7、8)の2種類が見られる。

長頸B1式(3、4、6、14) 長頸B1式の一群である。完形品は1点(14)のみで、鏃身部から茎部の一部まで残存するものが1点(3)、鏃身部から頸部の一部まで残存するものが2

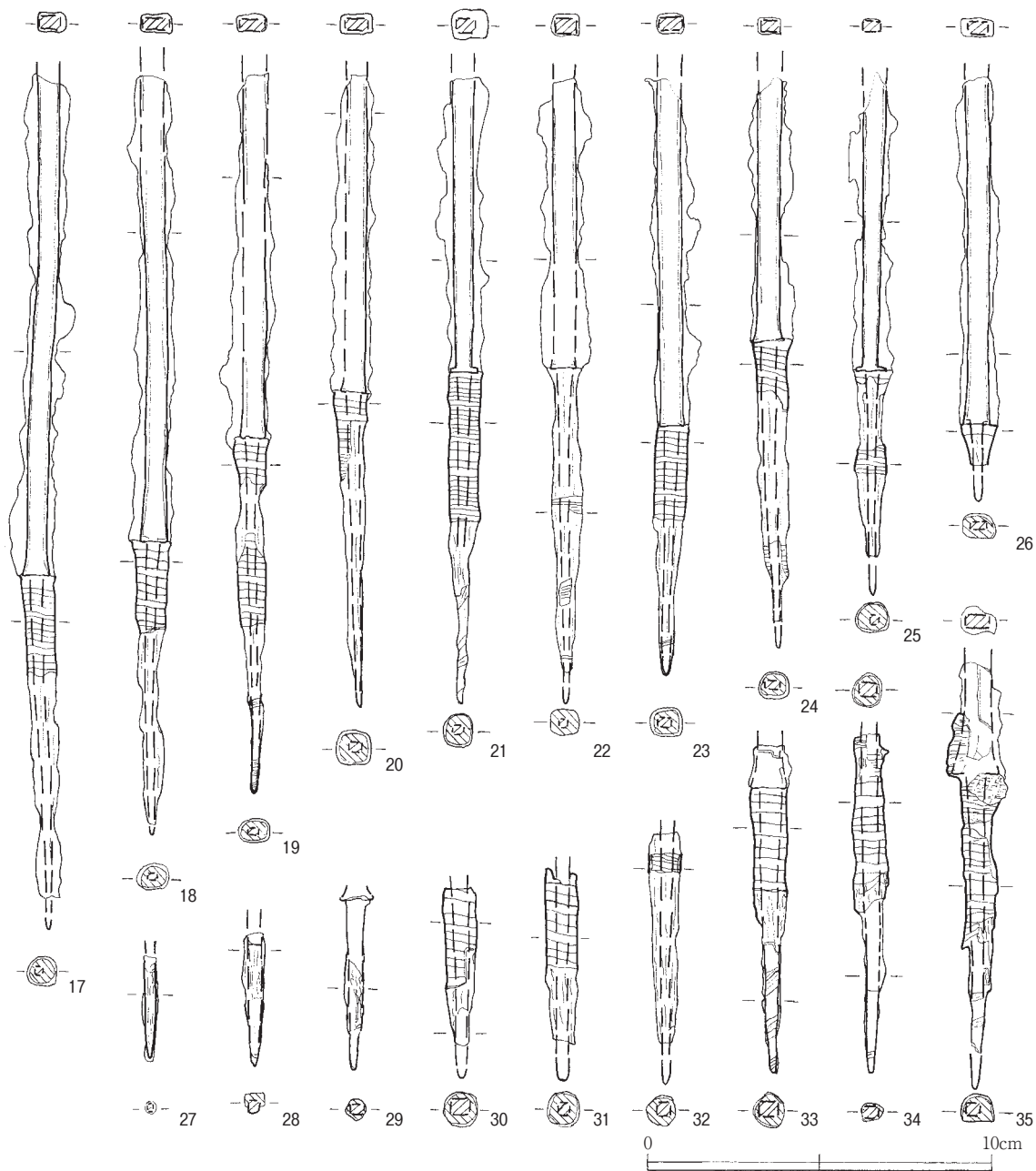


図37 2号墳東棺出土鉄鏃実測図(2)

点(4、6)ある。身部長1.8~2.4cm、身部幅1.1~1.4cm、頸部長11.8~14.3cm、茎部長7.6cmで、完形の14は全長21.8cmである。鏃身部は片丸造りで、頸部断面および茎部断面は方形をなす。関部が明確にわかるものは3のみで、台形関である。

14は茎部に矢柄が一部残存し、矢柄を固定するための樹皮巻きが認められる。3、4は布の痕跡が残る。

3、4、6には頸部に別造り腸挟が見られる。いずれも鏃身部と一体に成形されている。

長頸鏃片(17~35) 鏃身部を欠損し、型式は不明だが、A1式、B1式と類似点が多く、いずれかの型式であると推定される。茎部が完形のもの6点(19~21、23、33、34)あり、それ

以外は頸部、茎部ともに欠損する。茎部長は5.8～11.2cmである。

頸部断面および茎部断面は方形をなす。すべて茎部に矢柄の木質が残存し、樹皮巻きが認められるものも多い。また、茎の下巻きが認められるもの（19、21、22、33～35）、布の痕跡が残るもの（18、20、26、35）、漆が付着するもの（30～35）がある。

鉄鏃の特徴と年代 最後に、坊主山古墳群出土鉄鏃の位置づけを試みたい。

川畑の編年によれば、有頸平根B式は古墳時代中期後半に現れる。いっぽう、大型定角2式と有頸平根C式は古墳時代後期前半頃に見られる型式である。後者を含む2号墳西棺の鉄鏃がやや新しいと考えられる。

長頸鏃では、1号墳と2号墳東棺で明確な差がある。1号墳の長頸鏃は多くが全長13.1～17.6cm、身部長が1.9～3.4cmであるのに対し、2号墳東棺の長頸鏃は全長20cmを超え、鏃身部は1.8～2.4cmのものが多い。また、身部幅をみると、1号墳が0.9～1.8cmと差が大きいのに対し、2号墳は1.1～1.5cmと小さい。これらの所見から、1号墳よりも2号墳東棺の長頸鏃の方が長身化したもので、時期が下ると考えられる。

(松島)

(2) 馬 具

概報では、東棺外から馬具の一部らしき鎖状鉄片が出土したとされている。現状では、一括して袋に入れられた鉄器片中に兵庫鎖状のものが1点あるが、遺存状態が悪く、実測と撮影はできなかった。

(豊島)

(3) 装身具

① 耳 環 (図38、図版40-2)

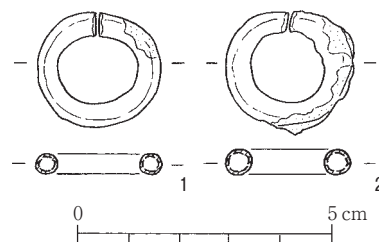
装身具には耳環が2点ある。いずれも銅製で鍍金を施す。1は最大径2.5cm、断面径0.4cm。2は最大径2.6cm、断面径0.5cmである。なお、概報で報告されている鉄環2点は確認できない。

(古谷)

② 玉 類

東棺では、北を枕にした被葬者の頸部付近でガラス小玉2種、棺中央に土製丸玉が出土したと報告されている。土製丸玉（図版40-3）はすべて東棺出土の可能性が高い。なお、ガラス小玉は1号墳でも出土しており、現在は帰属が不明であるが、小型の1群と大型の1群がある（図39、40）。今後の検討によって区別できる可能性がある。

(豊島)



(4) 須 恵 器 (図41、図版38～40-1)

概報では、東棺の棺内から蓋付埴1点、棺外から埴2点、

図38 2号墳東棺出土耳環実測図



図39 坊主山古墳群出土ガラス小玉（1）



図40 坊主山古墳群出土ガラス小玉（2）

杯13点、高杯1点、有蓋高杯1点が出土したと報告されている。現状では蓋付埴1点、埴2点、杯身10点、杯蓋7点、高杯1点、有蓋高杯1点を確認できる。その他、帰属不明の蓋が2点あるが（21、23）、21は短頸壺の蓋、23は高杯の蓋の可能性はある。

杯 蓋 1は完形品で、口径は13.9cm、器高は4.6cmである。口縁端部内面に弱い沈線を巡らす。外面には回転ナデ、3単位の回転ヘラ削り、内面に回転ナデを施す。また、内面に当て具の痕跡が認められる。色調は内外面とも灰色を呈する。胎土は密で、2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。

2は口径の3分の2程度が残存する。口径14.9cm、器高6.1cmである。口縁端部内面に沈線を巡らす。外面には回転ナデと2単位の回転ヘラ削り、内面に回転ナデを施す。色調は内外面とも灰色を呈する。胎土は密で、1mm程度の極粗砂を含む。焼成は良好である。

3は完形品で、口径は13.7cm、器高は4.5cmである。口縁端部内面に浅い沈線を巡らす。外面に回転ナデと4単位の回転ヘラ削りを施す。内面に回転ナデ、中心に一定方向のナデを施す。色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土は密で、1mmの粗砂を含む。焼成は良好である。

4は完形品で、口径は14.3cm、器高は4.0cmである。口縁端部内面に浅い沈線を巡らす。外面に回転ナデと3単位の回転ヘラ削りを施す。また、再調整の痕跡と、工具による擦痕が認められる。天井部内面には横ナデ、周縁には回転ナデを施す。また、当て具の痕跡が認められる。色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土は密で、焼成は良好である。

5は口縁部の一部を欠損する。口径は14.5cm、器高は4.1cmである。口縁端部は丸く収める。外面に回転ナデと3単位の回転ヘラ削りを施す。内面に回転ナデを施す。色調は内外面ともに白色を呈する。胎土は密で、1mm程度の極粗砂を含む。焼成はやや不良である。

6は口縁部の一部を欠損する。口径は13.9cm、器高は4.3cmである。口縁端部は丸く収める。外面に回転ナデと3単位の回転ヘラ削り、内面に回転ナデを施す。色調は内外面とも白褐色を呈する。胎土は密で、焼成は不良である。

7は完形品で、口径は13.8cm、高さは4.0cmである。口縁端部に沈線を巡らす。外面にヨコナデと4単位の回転ヘラ削りを施す。内面にヨコナデを施す。色調は内外面ともに灰色を呈する。

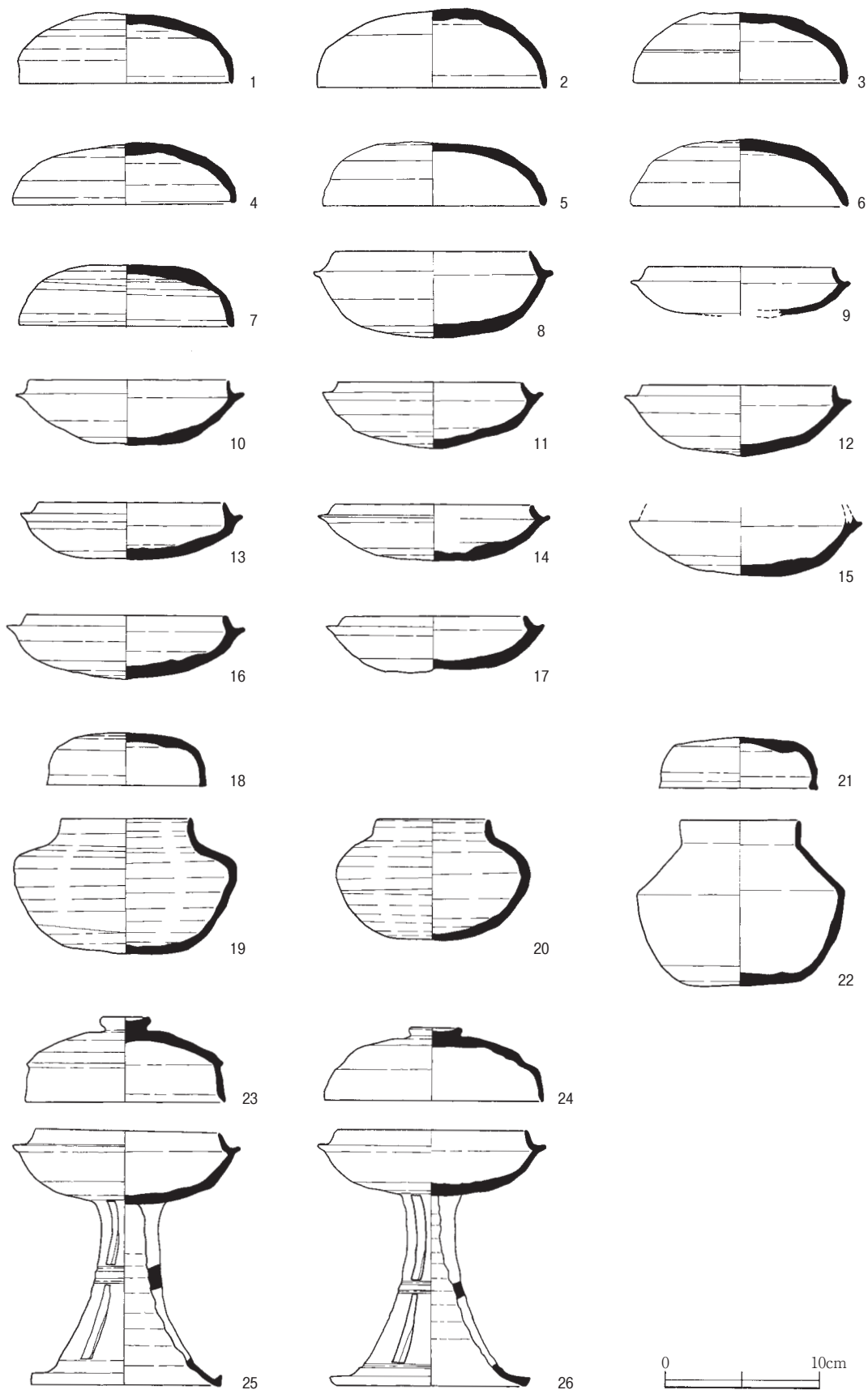


図41 坊主山2号墳東棺出土須恵器実測図

胎土は密で、4 mm程度の極粗砂を含む。焼成は良好である。

杯身 8は口径の2分の1を欠損する。口径12.8cm、器高5.6cmである。立ち上がりの端部は丸く収める。外面に回転ナデと2単位の回転ヘラ削り、内面に回転ナデを施す。色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土は密で、2 mm程度の極粗砂を含む。焼成は良好である。

9は口径3分の1を欠損する。口径12.2cm、残高3.0cmである。立ち上がりの端部は丸く収める。外面に回転ナデと回転ヘラ削り、内面に回転ナデを施す。色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土は密で、焼成は良好である。

10は完形品で、口径13.0cm、器高4.2cmである。立ち上がりの端部は丸く収める。外面には回転ナデと3単位の回転ヘラ削り、内面に回転ナデを施す。色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土は密で、1 mm程度の粗砂を含む。焼成は良好である。

11は完形品で、口径12.0cm、器高4.2cmである。立ち上がりの端部は丸く収める。外面に回転ナデと3単位の回転ヘラ削りを施す。工具による擦痕が認められる。内面に回転ナデを施す。色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土は密で、2 mm程度の極粗砂を含む。焼成は良好である。

12は口径の3分の1程度を欠損する。口径は12.6cm、器高4.5cmである。立ち上がりの端部は丸く収める。外面に回転ナデと3単位の回転ヘラ削り、内面に回転ナデを施す。色調は外面が薄い灰色、内面が白色を呈する。胎土はやや密で、2 mm程度の極粗砂を含む。焼成は不良である。

13は口縁をわずかに欠損する。口径は12.1cm、器高は3.6cmである。立ち上がりの端部は丸く収める。外面に回転ナデ、3単位の回転ヘラ削りを施す。内面に回転ナデを施す。内外面ともに工具に擦痕と、亀裂が認められる。色調は内外面とも灰色を呈する。胎土は密で、2 mm程度の粗砂を含む。焼成は良好である。

14は口径の3分の1程度を欠損する。口径は12.9cm、器高3.6cmである。立ち上がりの端部は丸く収める。外面に回転ナデと3単位の回転ヘラ削りを施す。内面に回転ナデを施す。色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土は密で、焼成は良好である。

15は口径の3分の1を欠くため、口径と器高は不明で、残存高は3.7cmである。外面に回転ナデと回転ヘラ削りを施す。内面に回転ナデを施す。色調は内外面とも白褐色を呈する。胎土は密で、焼成は不良である。

16は完形品で、口径13.0cm、器高4.2cmである。立ち上がりの端部は丸く収める。外面に回転ナデ、3単位の回転ヘラ削りを施す。内面に回転ナデを施す。外面には工具による擦痕が認められる。色調は内外面とも灰色を呈する。胎土は密で、2 mm程度の粗砂を含む。焼成は良好である。

17は完形品で、口径11.7cm、器高3.6cmである。立ち上がりの端部は丸く収める。外面に回転ナデ、ヨコナデ、3単位の回転ヘラ削りを施す。工具による擦痕が認められる。内面にヨコナデ、当て具の痕跡が認められる。色調は内外面とも灰色を呈する。胎土は密で、3 mm程度の細礫を含む。焼成は良好である。

表8 2号墳東棺出土須恵器観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	口縁端部	内面調整	ヘラ削り	稜
1	杯蓋	13.9	4.6	弱い沈線	回転ナデ	反時計回り	鈍
2	杯蓋	14.9	6.1	沈線	回転ナデ	反時計回り	鈍
3	杯蓋	13.7	4.5	浅い沈線	回転ナデ	反時計回り	丸
4	杯蓋	14.3	4.0	浅い沈線	回転ナデ・ヨコナデ	反時計回り	丸
5	杯蓋	14.5	4.1	丸	回転ナデ	反時計回り	鈍
6	杯蓋	13.9	4.3	丸	回転ナデ	反時計回り	丸
7	杯蓋	13.8	4.0	沈線	ヨコナデ	時計回り	丸
8	杯身	12.8	5.6	丸	回転ナデ	反時計回り	屈曲
9	杯身	12.2	—	丸	回転ナデ	—	屈曲
10	杯身	13.0	4.2	丸	回転ナデ	反時計回り	弱凹
11	杯身	12.0	4.2	丸	回転ナデ	反時計回り	弱凹
12	杯身	12.6	4.5	丸	回転ナデ	反時計回り	屈曲
13	杯身	12.1	3.6	丸	回転ナデ	反時計回り	丸
14	杯身	12.9	3.6	丸	回転ナデ	反時計回り	屈曲
15	杯身	—	—	—	回転ナデ	—	—
16	杯身	13.0	4.2	丸	回転ナデ	反時計回り	弱凹
17	杯身	11.7	3.6	丸	ヨコナデ	反時計回り	屈曲

蓋杯の年代 ここで杯蓋と杯身の年代観をまとめたい。杯蓋は口径の大きさや、天井部と口縁部とを分ける突出部の稜がほぼ失われていることなどから、陶邑編年ではTK10型式期と考えられる(田辺1966)。

杯身では、8は器高、立ち上がりの高さなどからやや古い様相をもつが、TK10型式期の範疇に収まると考えられる。

短頸壺・蓋 18は短頸壺の蓋である。完形品で、口径は10.4cm、器高は3.4cm。外面に回転ナデと時計回りの回転ヘラ削りを施す。内面調整はおもにヘラ削りで、口縁部付近に回転ナデを施す。口縁部はやや外反する。色調は灰色、胎土は密で、2mm程度の粗粒を含む。焼成は良好である。

19は短頸壺である。注記が同一であることから、18と組み合うと考えられる。完形で、口径8.4cm、器高8.9cm、最大径14.6cmである。肩部の屈曲は明瞭で、口縁端部は丸く収める。内外面とも回転ナデを施し、外面の底部付近に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。色調は灰白色で、底部から胴部にかけて自然釉が付着する。胎土は精良で、長石と石英を少量含む。焼成は良好である。

20は短頸壺である。完形品で、口径7.2cm、器高7.9cm、最大径12.7cmである。肩部の屈曲は明瞭である。口縁部はわずかに内傾し、端部は丸く収める。外面は口縁部から肩部にかけて回転ナデ、肩部から底部にかけて時計回りの回転ヘラ削りを施す。内面は口縁部付近にヨコナデ、肩部に回転ナデ、底部にタタキを施す。色調は灰白色。胎土は密で石英を含む。焼成は良好であ

る。

21は蓋で、形状や口径から短頸壺の蓋と判断した。概報では出土状況に関する情報はないが、22の短頸壺と組み合わせる可能性がある。口径の3分の1程度を欠損し、口径10.3cm、器高3.3cmである。外面は回転ナデ、反時計回りのヘラ削りを2単位施す。内面は回転ナデを施す。口縁部端面は平坦面をなす。色調は灰色、胎土は密で、1mm程度の粗砂を含む。焼成は良好である。

22は短頸壺である。完形品で、口径7.8cm、器高10.7cm、最大径13.6cmである。肩部の屈曲は明瞭で、口縁はほぼ垂直に立ち上がる。胴部に回転ナデ、底部に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。色調は灰色。胎土は密で、1mm程度の粗砂を含む。焼成は良好である。

有蓋高杯・蓋 23は形態上は有蓋高杯の蓋であるが、出土状況が確定できず、25と組み合わせるか否かは不明である。口縁部から天井部にかけて3分の1程度を欠損し、復元口径13.0cm、器高5.4cmである。偏平なつまみをもち、天井部と口縁部の境界は明瞭な稜をもつ。口縁部はわずかに外反し、端部は凹面をなす。外面は胴部から口縁部にかけて回転ナデ、天井部付近に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。内面に回転ナデを施す。色調は灰色。胎土は密で、2mm程度の粗砂を含む。焼成は良好である。

24は有蓋高杯の蓋である。口縁部をわずかに欠損し、口径14.2cm、器高4.8cmである。天井部に扁平なつまみが付く。口縁部はやや外反する。外面に回転ナデ、天井部付近に回転ヘラ削りを施す。内面に回転ナデを施し、天井部付近に同心円の当て具痕跡が残る。色調は灰色である。胎土は密で、3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。

25は高杯である。完形で、口径12.2cm、器高16.6cm、脚部径12.4cmである。口縁の立ち上がりは内傾し、低く、端部は丸く収める。脚部はゆるやかに開き、脚端部は鋭角的な段をしている。脚部は長く、長方形の透孔を2段、3方向に穿つ。杯部の内外面に回転ナデ、外面底部に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。脚部は内外面とも回転ナデを施し、外側上段にカキ目が残る。色調は灰色である。胎土は密で、1mm程度の粗砂を含む。焼成は良好である。

26は高杯である。脚部をわずかに欠損し、口径12.4cm、器高16.8cm、脚端径13.1cmである。杯部の立ち上がりは低く、内面する。脚部は大きく開き、長方形の2段の透孔が3方向に穿たれている。杯部の外面に回転ナデを施し、底部付近には時計回りの回転ヘラ削りを施す。杯部内面に回転ナデを施し、底部付近に同心円の当て具の痕跡が認められる。脚部の内外面に回転ナデを施す。胴部の外面上段にはわずかにカキ目が残る。色調は灰色である。胎土は密で、2mm程度の粗砂を含む。焼成は良好である。

(静 幸穂・竹川)

第5章 総括

1 古墳の年代

(1) 1号墳の年代

まず、1号墳の年代から検討したい。

大刀の年代 1号墳出土の三輪玉付大刀は、白杵勲の分類によれば二段関隅抉尻細茎に相当し(白杵1984a)、陶邑編年のTK10型式期～TK43型式期に相当する。また、本例は鑑本孔をもつ。白杵はその出現年代を後期(6世紀)以降とする(白杵1984b)。さらに、齋藤大輔の分類によれば鑑本孔鉄刀B群に属し(齋藤・片多2009)、奈良県池殿奥5号墳例(TK23型式期、井上・仲1988)から福岡県石ヶ元8号墳例(TK209型式期以降、松浦編2003)まで、幅広い年代の例が挙げられている。

三輪玉については、深谷淳が後期初頭(MT15型式期)における大型化と装着個数の増加を指摘し(深谷2008)、坊主山1号墳例を指標に挙げている。

鉄鍬の年代 副葬品のうち、最も詳細な編年が提示されているのは鉄鍬であろう。長頸鍬はすべて一般的な片丸造りの柳葉式で、年代を限定し難い。いっぽう、平根系鉄鍬は2種に大別され、1つは川畑分類の大型定角D2式、もう1つは有頸平根B式に相当する。川畑は前者の類例として奈良県藤ノ木古墳例(勝部ほか編1990)、大和二塚古墳前方部石室例(上田ほか1962)、後者の類例として奈良県新沢千塚71号墳例(伊達編1981)、静岡県石ノ形古墳例(白澤編1999)を挙げており、いずれも中期末～後期前半頃の古墳である。

馬具の年代 馬具では、杏葉が参考になる。1号墳の杏葉は無文の心葉形杏葉で、岡安光彦による編年のI期に位置づけられ(岡安1988)、その年代は後期前半(MT15型式期)である。岡安は類例として栃木県七廻り鏡塚古墳例(大和久1974)を挙げている。

埴輪の年代 円筒埴輪は川西宏幸編年のV期に位置づけられる。また、報告者は坊主山1号墳の埴輪の製作集団について、①円筒埴輪の底部調整に板押圧を使用すること、②形象埴輪の基部製作技法などから、冑山1号墳や音乗谷古墳に埴輪を供給していた集団に近い系譜をもつか、もしくは同一集団のものと考えている。これらの古墳の年代は後期前半と考えられる。

以上を総合し、1号墳の築造年代を後期前半(MT15型式期)に位置づけたい。

(2) 2号墳の年代

①西棺の年代

大刀の年代 2号墳西棺出土の大刀は、茎に茎元抉りをもち、かつ目釘穴を3ヶ所あける特徴をもつ。鑑本孔こそもないものの、齋藤大輔が設定した一文字尻系A群に類似し(齋藤・片多2009)、規格性の高い一群に位置づけられる。類例は熊本県江田船山古墳例(TK47型式期、本村

表9 坊主山古墳群の諸要素

	墳丘	外表	埋葬施設	武器・武具	馬具	工具	装身具	須恵器
1号	後円45	埴輪	木棺	三輪玉付大刀・ 矛・鉄鏃・胡籜	杏葉・鏡・鞍・辻 金具・銅鈴・鉄鐸	斧	金環・銅釧・ 玉	脚付子持壺・ 甕・短頸壺
2号	円25		木棺(西)	大刀・短刀・ 鉄鏃		刀子	金環・冠?	甕・壺・提瓶・ 台付壺・蓋杯
			木棺(東)	鉄鏃	兵庫鎖		耳環・玉類	高杯・蓋杯・ 短頸壺

1991) から島根県上塩冶築山古墳例 (TK43型式期、松本編1999) など、幅広い年代にわたる。

鉄鏃の年代 西棺からは平根系鉄鏃のみが出土したと考えられ、その型式は川畑分類の①大型定角D 2式、②有頸平根B式、③有頸平根C式である。このうち、①と②の形態は1号墳の鉄鏃と変わらない。いっぽう、③はやや後出するものと考えられる (豊島2010: 235-236頁)。

須恵器の年代 西棺では棺外から杯蓋3点が出土した。これらは口径がやや小さく、口縁端部に面をもつ。TK10型式の範疇に収まるものと考えられる。棺内出土の提瓶や台付壺も同年代と考えて問題あるまい。

②東棺の年代

鉄鏃の年代 東棺からは長頸鏃のみが出土した。それらの中には独立片逆刺をもつものが一定量含まれる。また、片丸造柳葉式の長頸鏃には棘状関をもつものが含まれる。以上の特徴はTK10~TK43型式期にかけての様相を示している。

須恵器の年代 すでに報告したとおり、東棺から出土した蓋杯はTK10型式期の範疇に収まる。長脚二段透孔を3方向に穿つ有蓋高杯も、同年代と考えられる。

以上から、2号墳の築造年代を後期前半 (TK10型式期) に位置づけたい。

2 古墳の階層性

つぎに、墳丘や副葬品を総合して古墳群の変遷や階層性を考えたい。表9は坊主山古墳群の諸要素をまとめたものである。表から、墳形と規模、埴輪の有無、副葬品の構成において、1号墳の2号墳に対する優位性が認められる。それは器種構成のみではなく、三輪玉付大刀、矛、金銅装胡籜の存在、馬具の組み合わせの充実、脚付子持壺の存在など、副葬品の内容においても認められる。

また、2号墳では大刀と小刀をもつ点、須恵器の器種構成の豊富さにおいて、西棺の東棺に対する優位性が認められる。層位で確認できないものの、西棺は東棺よりも1.1m深い位置で検出されており、西棺が先に埋葬された中心的な埋葬であったと考えられる。

3 古墳群の性格

最後に、坊主山古墳群の被葬者の性格について考えたい。

渡来系要素 1号墳の副葬品には渡来系の要素が顕著に認められる。まず、矛は袋部が多角形を呈する大加耶系の矛である（朴1995）。胡籐について、土屋は百濟・大加耶の工人の影響を受け、日本列島内で製作されたと考えている。中実で振りを加えた金環は、指輪であるならば渡来系の装身具であるし（廣瀬2015）、耳環であったとしても、類例は朝鮮半島南部に多い。刻み目入りの腕輪は、近隣では奈良県風呂坊5号墳で出土している（福辻編2012）。風呂坊5号墳は初期の横穴式石室に釘付木棺を埋葬し、銀製指輪、

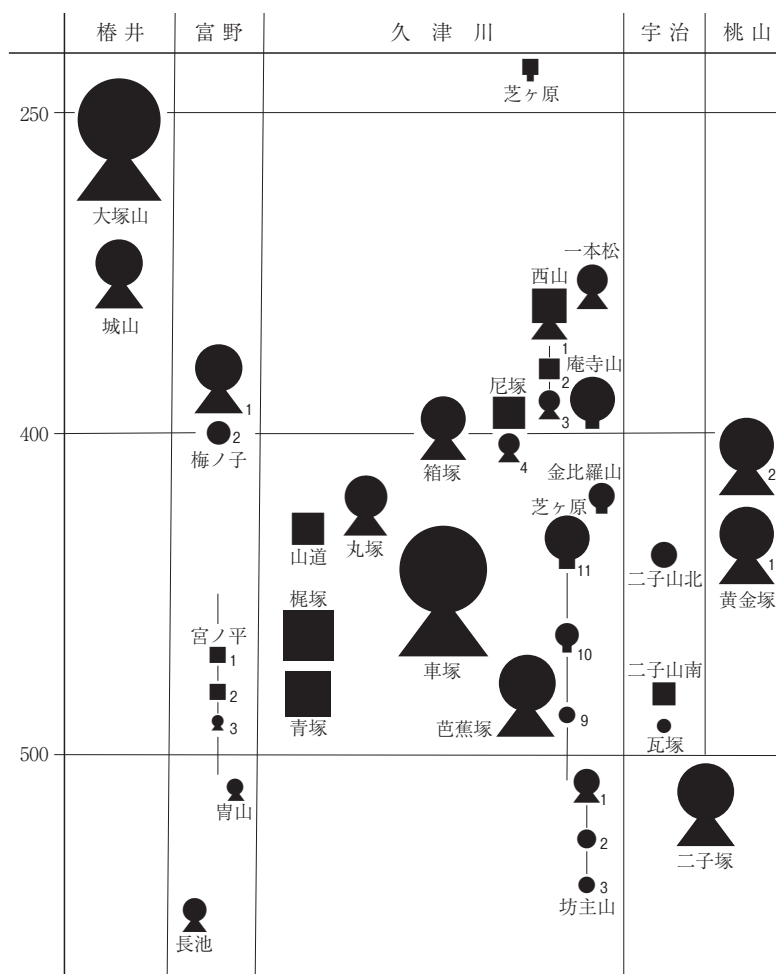


図42 南山城の首長系譜

金銅製鐻子2点を副葬するなど、渡来系要素をもつ。さらに、鉄鐸も渡来系の遺物である。

在地的要素 いっぽう、坊主山古墳群の被葬者像が渡来系要素のみでは語れないことも事実である。1号墳と2号墳西棺は、2～3本の枕木状の丸太を置き、その上に木棺を安置している。同様な木棺は京都府井ノ内稲荷塚古墳前方部埋葬施設、長法寺七ツ塚1号墳1号埋葬施設、4号墳1・2号埋葬施設などで確認されており（高橋・寺前編2005）、山城地域の地域性である可能性が高い。

古墳時代後期の南山城 南山城の首長系譜は杉本宏が簡潔にまとめている（杉本1992）。坊主山古墳群が築造された古墳時代後期では、車塚古墳など大型前方後円墳を築いた久津川の首長系譜が衰退し、宇治地域に五ヶ庄二子塚古墳が出現する（図42）。二子塚古墳は全長112mの前方後円墳で、二重の周濠をもち、築造企画に真の継体陵といわれる大阪府今城塚古墳との関連が指摘されている（杉本1992：78-79頁）。坊主山1号墳では三輪玉付大刀が出土したものの、それには振り環は装着されていなかった。振り環頭大刀が継体大王との関わりを示す武器であるとすれば（高松2007）、坊主山1号墳の被葬者は二子塚古墳の被葬者に従属する存在であり、間接的に継体大王を支えた人物と考えるにふさわしい。

（豊島）

注

- (1) 深谷淳は坊主山1号墳出土三輪玉を銅板打出と考えている(深谷2008:80頁)。製作技法については今後の課題である。
- (2) 大阪府今城塚古墳でも同様に、馬形埴輪の脚部基底面にハケメを施すものが多く確認できる(今西編2015)。
- (3) 同様の底部突帯をもつものでも、底部から数センチほど上部に付加するものもある。今城塚古墳などが例としてあげられるが、底部突帯をもつ形象埴輪基部のなかには倒立技法のものと正立のものが混じる(高槻市立今城塚古代歴史館2017)。
- (4) 冑山1号墳出土の円筒埴輪には底部調整として板押圧を施すものがある。
- (5) 底部突帯をもつ形象埴輪の器種は限定的であり、盾形、大刀形埴輪や石見型埴輪にみられる。類例として京都府塚本古墳(竹井・吉田1988)、大阪府今城塚古墳(高槻市立今城塚古代歴史館2017)、嶋上郡衙跡遺跡(大船ほか1988)、奈良県岩室池古墳(楠元1985)、勢野茶臼山古墳(伊達1966)などがある。
- (6) 冑山1号墳や、音乗谷古墳などに埴輪を供給した集団と、その他の古墳に埴輪を供給した集団の2系統があることを指摘している。

参考文献

- 朝岡俊也 2018「福岡県下出土の鈴とG-6号墳出土の大型鈴」大塚紀宜編『元岡・桑原遺跡群30』福岡市教育委員会 121-136頁
- 東 潮 1999「鑄造斧形品をめぐる諸問題」『古代東アジアの鉄と倭』溪水社 284-322頁
- 東 潮 2004「弁辰と伽耶の鉄」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集 国立歴史民俗博物館 31-54頁
- 荒井啓汰 2020「茎元抉りを有する鉄刀について」筑波大学甲山古墳研究グループ「つくば市甲山古墳の研究—考察編—」『筑波大学 先史学・考古学研究』第31号 筑波大学人文社会科学研究所歴史・人類学専攻 83-87頁
- 荒川 史・魚津知克・内田真雄 1998「京都府宇治市庵寺山古墳の発掘調査」『古代』第105号 早稲田大学考古学会 183-197頁
- 井上満郎・山田良三 1973「歴史伝承と古墳」林屋辰三郎・藤岡謙二郎編『宇治市史』1 古代の歴史と景観 宇治市役所 204-250頁
- 井上義光・仲富美子編 1988『野山遺跡群I』奈良県教育委員会
- 今西康宏編 2015『大王墓にみる動物埴輪』高槻市立今城塚古代歴史館
- 上田宏範ほか 1962『大和二塚古墳』奈良県教育委員会
- 臼杵 勲 1984a「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会 49-70頁
- 臼杵 勲 1984b「鏹本孔を持つ鉄刀について」『考古学研究』第31巻第2号 考古学研究会 97-106頁
- 臼杵 勲 1985「古墳出土銚の分類と編年」『日本古代文化研究』第2号 古墳文化研究会 1-7頁
- 大賀克彦 2013「玉類」一瀬和夫ほか編『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社 147-159頁
- 大船孝弘ほか 1988「嶋上郡衙跡」『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要・12』高槻市教育委員会

- 大和久震平 1974『七廻り鏡塚古墳』帝国地方行政学会
- 岡安光彦 1988「心葉形鏡板付轡・杏葉の編年」『考古学研究』第35巻第3号 考古学研究会 53-68頁
- 奥村清一郎 1996「久津川古墳群を考える」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 京都府埋蔵文化財調査研究センター 161-180頁
- 小高幸男 1989「古墳出土釧の基礎的研究—金属製釧について—」『君津郡市文化財センター研究紀要Ⅲ』君津郡市文化財センター 19-90頁
- 賀来孝代 2002「埴輪の鳥」『日本考古学』第14号 日本考古学協会 37-52頁
- 加古千恵子 1975「古墳出土の鈴について」櫃本誠一編『二見谷古墳群』城崎町教育委員会 45-60頁
- 梶本敏三 1986「青谷石神古墳群について」『京都府埋蔵文化財情報』第21号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 勝部明生ほか編 1990『斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 鐘方正樹 1985「宇治市一里山出土の古式円筒埴輪」『京都考古』第41号 京都考古刊行会 1-5頁
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会 95-164頁
- 川畑 純 2015『武具が語る古代史—古墳時代社会の構造転換—』京都大学学術出版会
- 金宇大 2017『金工品から読む古代朝鮮と倭—新しい地域関係へ—』京都大学出版会
- 金東淑 2009「嶺南地方の6～7世紀代墳墓出土鉄鐸に関する研究」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター 133-152頁
- 楠元哲夫編 1985『岩室池古墳 平等坊・岩室池遺跡』天理市教育委員会
- 忽那敬三 2001「鶏形埴輪の変遷と性格」『考古学研究』第48巻第3号 考古学研究会 106-124頁
- 久保哲正 1995「城陽市冑山1号墳の埴輪(2)」『山城郷土資料館報』第13号 京都府立山城郷土資料館 59-66頁
- 高慶秀 2009「韓国と日本の鉄鐸に関する一考察」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター 125-132頁
- 児玉真一編 1990『若宮古墳群Ⅱ』吉井町教育委員会
- 齋藤大輔・片多雅樹 2009「福岡市西区石ヶ元8号墳出土鏹本孔鉄刀の政治的意義」『平成21年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会 67-76頁
- 斎藤 忠ほか編 1980『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会
- 佐々木嘉和・澁谷恵美子編 2001『溝口の塚古墳』飯田市教育委員会
- 佐野大和 1963「鉄鐸」斎藤 忠ほか編『日光男体山山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店 244-252頁
- 沢田むつ代 2006「富山県内遺蹟出土繊維製品の調査」『日本出土原始古代繊維製品の分析調査による発展的研究』東京国立博物館 11-22頁
- 沢田むつ代 2008「古墳出土の鉄刀・鉄剣の柄巻きと鞘巻き—織物などの種類と使用—」『MUSEUM』第617号 東京国立博物館 5-35頁
- 下山恵子・吉澤則男編 2002『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』羽曳野市教育委員会
- 白木原 宜 1997「古墳時代の鈴—主として铸造鈴について—」『HOMINIDS』第1号 CRA 71-81頁
- 白木原 宜 2002「铸造馬具の地域性—特に馬鈴について—」『考古学ジャーナル』第496号 ニュー・サイエンス社 20-23頁

参考文献

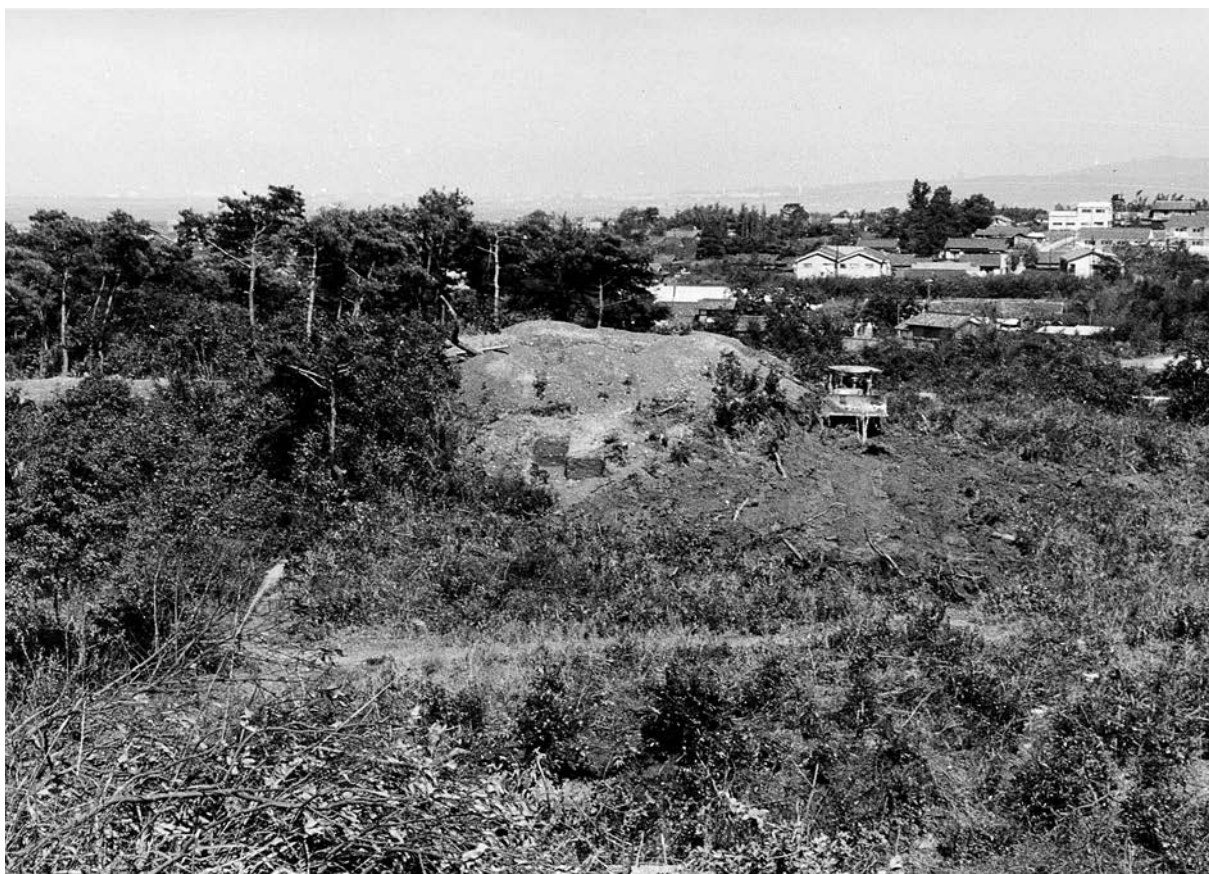
- 白澤 崇編 1999『石ノ形古墳』袋井市教育委員会
- 吹田直子編 1998『菟道門ノ前古墳・菟道遺跡発掘調査報告書』宇治市教育委員会
- 杉本 宏 1983「宇治一本松古墳測量調査報告」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』宇治市教育委員会
- 杉本 宏 1991「宇治二子山古墳とその周辺」杉本 宏編『宇治二子山古墳発掘調査報告』宇治市教育委員会 170-183頁
- 杉本 宏編 1991『宇治二子山古墳発掘調査報告』宇治市教育委員会
- 杉本 宏 1992「五ヶ庄二子塚古墳と継体朝をめぐって」杉本 宏・荒川 史編『五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告』宇治市教育委員会 72-79頁
- 杉本 宏・荒川 史編 1992『五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告』宇治市教育委員会
- 高田貫太 1998「古墳副葬鉄銚の性格」『考古学研究』第45巻第1号 考古学研究会 49-70頁
- 高槻市立今城塚古代歴史館 2017『威儀のもの—王権儀礼の威容を示す器財埴輪—』高槻市立今城塚古代歴史館
- 高橋克壽 1992「器財埴輪」石野博信ほか編『古墳時代の研究』第9巻 古墳Ⅲ 埴輪 雄山閣 90-107頁
- 高橋克壽ほか 2005『奈良山発掘調査報告Ⅰ—石のカタ古墳・音乗谷古墳の調査—』奈良文化財研究所
- 高橋照彦・寺前直人編 2005『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団
- 高橋美久二 1993「城陽市冑山1号墳の埴輪(1)」『山城郷土資料館報』第11号 京都府立山城郷土資料館 59-66頁
- 高松雅文 2007「継体大王期の政治的連帯に関する考古学的研究」『ヒストリア』第205号 大阪歴史学会 1-27頁
- 竹井治雄・吉田野乃 1988「長岡京跡右京第266次発掘調査概要(7ANKHT-Ⅲ地区)」『京都府遺跡調査概報』第27冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 伊達宗泰 1966「勢野茶白山古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第23冊 奈良県教育委員会
- 伊達宗泰編 1981『新沢千塚古墳群』奈良県教育委員会
- 土屋隆史 2011「古墳時代における胡録金具の変遷とその特質—朝鮮半島南部・日本列島出土資料を中心に—」『古文化談叢』66 九州古文化研究会 29-60頁
- 土屋隆史 2012「坊主山1号墳出土胡録金具の意義—胡録の復元—」『古代学研究』第195号 古代学研究会 42-50頁
- 堤 圭三郎 1965「坊主山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会
- 堤 圭三郎 1967「冑山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1967)』京都府教育委員会
- 堤 圭三郎 1968「宇治市坊主山古墳出土の三輪玉について」『史想』第14号 京都教育大学考古学研究会 7-13頁
- 豊島直博 2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房
- 中島 正編 2004『山城町内遺跡発掘調査概報』XIII 山城町教育委員会
- 朴天秀 1995「渡来系文物からみた伽耶と倭における政治的変動」『待兼山論叢』史学篇 第29号 大阪大学文学部 53-84頁
- 早野浩二 2008「古墳時代の鉄鐸について」『研究紀要』第9号 愛知県埋蔵文化財センター 31-42頁

- 東影 悠 2008「古墳時代中期から後期における円筒埴輪の規格とその変質—円筒埴輪の4条突帯5段構成化—」寺前直人編『待兼山遺跡Ⅳ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会 95-112頁
- 東影 悠 2010「形象埴輪の製作技術—形象基部倒立技法の研究—」大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学友の会 539-556頁
- 東影 悠 2018「古墳時代後期における埴輪生産と埴輪様式の特質」『ヒストリア』第271号 大阪歴史学会 26-53頁
- 樋口隆康・西谷真治・小野山 節 1985『増補 大谷古墳』和歌山市教育委員会
- 廣瀬時習 2015「古墳時代の指輪—指輪の分類と変遷—」松藤和人編『同志社大学考古学シリーズXI 森浩一先生に学ぶ 森浩一先生追悼論集』同志社大学考古学シリーズ刊行会 479-488頁
- 深谷 淳 2008「金銀装倭系大刀の変遷」『日本考古学』第26号 日本考古学協会 69-98頁
- 福辻 淳編 2012『風呂坊古墳群 第4次発掘調査報告書』桜井市文化財協会
- 松浦一之介編 2003『元岡・桑原遺跡群2』福岡市教育委員会
- 松浦宇哲 2015「農工具からみた山の神古墳の被葬者像—北部九州の古墳にみられる農工具多量副葬の意義—」辻田淳一郎編『山の神古墳の研究—「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に—』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室 315-330頁
- 松本岩雄編 1999『上塩冶築山古墳の研究』島根県教育委員会・島根県古代文化センター
- 本村豪章 1991『古墳時代の基礎研究稿—資料編（Ⅱ）—』東京国立博物館紀要第26号抜刷 東京国立博物館
- 桃崎祐輔 2014「馬具から見た九州の地域間交流—船載馬具と国産規格品馬具に着目して—」吉田和彦・長直信編『古墳時代の地域間交流2』第17回九州前方後円墳研究会大分大会実行委員会 188-229頁
- 森島康雄 2013「大刀の鈎革に装着する装飾板—宇治市坊主山1号墳の出土例から—」『山城郷土資料館報』第23号 京都府立山城郷土資料館 11-12頁
- 山田邦和 1989a「装飾付須恵器の分類と編年（上）—装飾付須恵器の基礎研究1—」『古代文化』第41巻第8号 古代学協会 16-29頁
- 山田邦和 1989b「装飾付須恵器の分類と編年（下）—装飾付須恵器の基礎研究2—」『古代文化』第41巻第9号 古代学協会 27-38頁
- 山田良三 1966「山城宇治一本松古墳調査報告」『古代学研究』第42・43合併号 古代学研究会 14-22頁
- 山田良三・北川純三 1973『伊勢田塚陶棺発掘調査報告書』伊勢田塚調査会
- 行田裕美 1997「鉄鐸について」平岡正宏・坂本心平編『西吉田北遺跡』津山市教育委員会 101-108頁
- 吉田東明・小嶋 篤 2018「多角形ガラス玉」古代歴史文化協議会編『玉—古代を彩る至宝—』ハーベスト出版 194-195頁
- 吉本堯俊 1965「金比羅山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会
- 李漢祥 2006「金属装身具からみた三国時代の暦年代」『第18回東アジア古代史・考古学研究交流会予稿集』東アジア考古学会 135-158頁
- 渡辺みどり 1998「古墳時代後期の円環系銅釧の研究」『峰考古』第13号 宇都宮大学考古学研究会 95-122頁

参考文献

和田一之輔 2006 「石見型埴輪の分布と樹立古墳の様相」『考古学研究』第53巻第3号 考古学研究会
69-89頁

圖 版



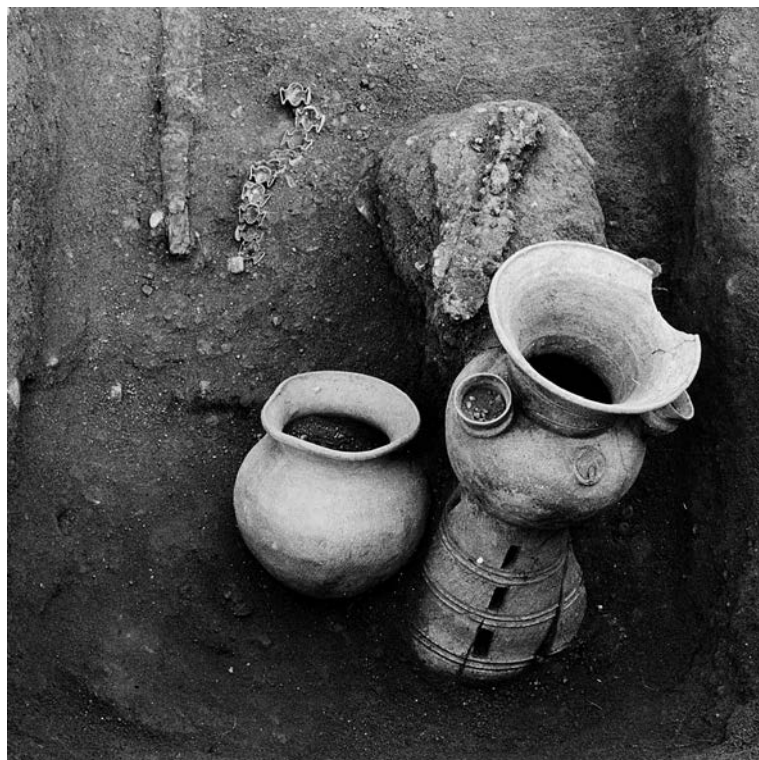
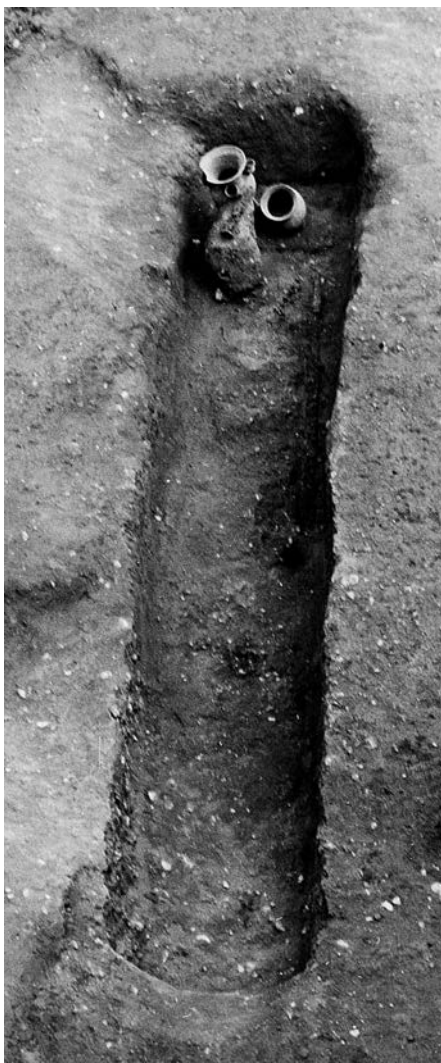
1 1号墳遠景（南から）



2 1号墳周辺の削平状況（南から）



1 1号墳北側くびれ部埴輪出土状況（北から）



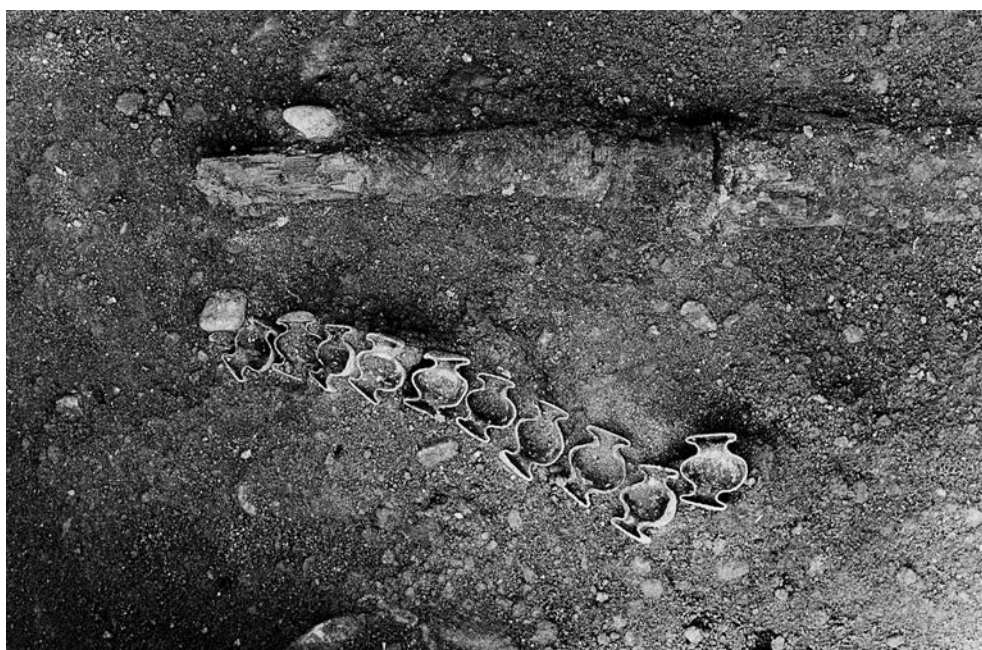
3 須恵器出土状況（南東から）

2 1号墳木棺検出状況（北西から）

1 三輪玉付大刀出土
状況（北東から）



2 三輪玉出土状況 1
（北東から）



3 三輪玉出土状況 2
（北東から）



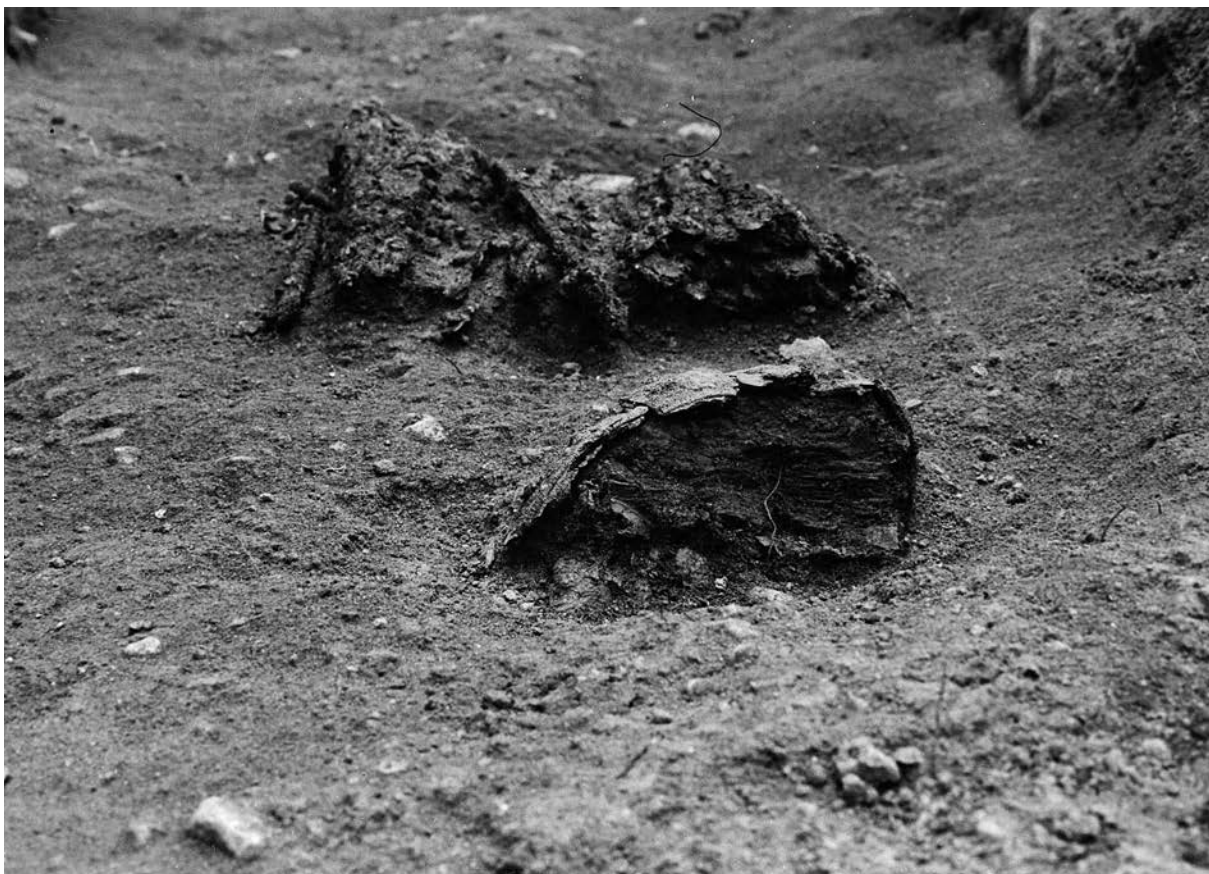
図版 4



1 胡籛出土状況 1



2 胡籛出土状況 2



3 胡籛出土状況 3 (南東から)

1 金環出土状況



2 棺外北西部馬具出土状況（北西から）



3 棺外南東部銅鈴・鉄鐸出土状況（北西から）





1 2号墳遠景（南から）



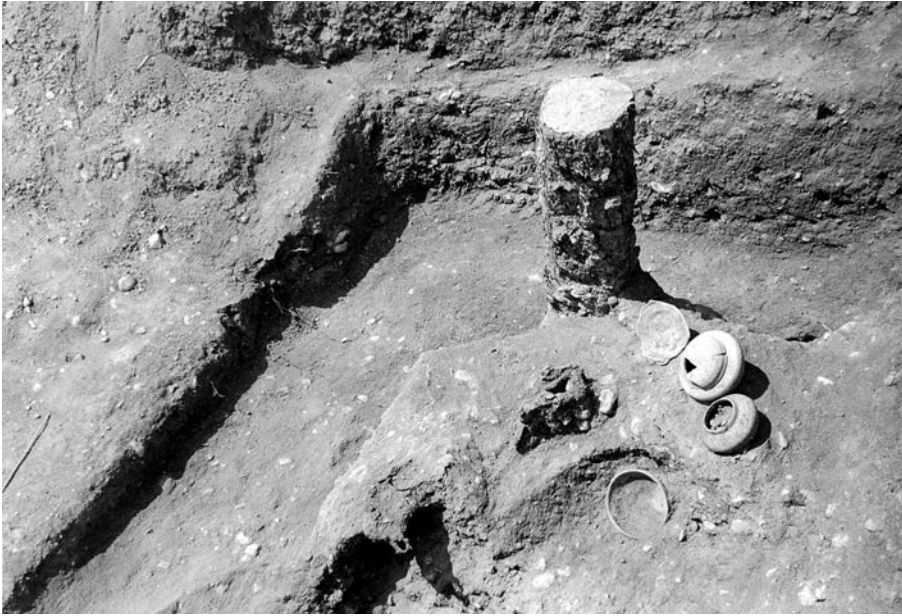
2 2号墳西棺検出状況（南から）



1 西棺北側木口部検出状況（東から）



2 西棺検出状況
（須恵器取り上げ後、南から）



1 2号墳東棺北部須恵器・馬具出土状況（南東から）



2 東棺南部鉄鏃・須恵器出土状況（東から）



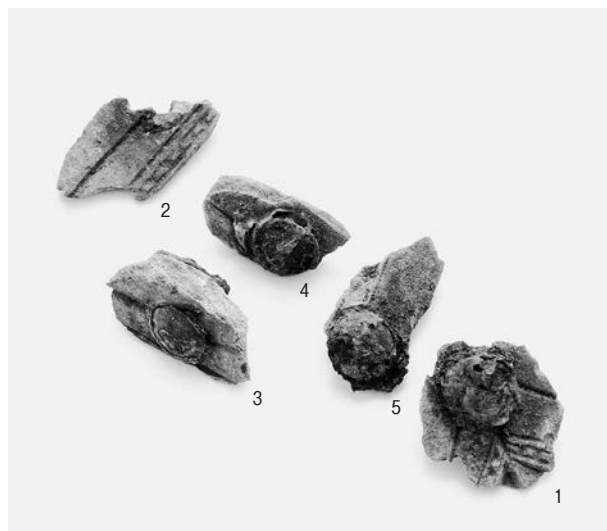
3 東棺内耳環・歯牙出土状況



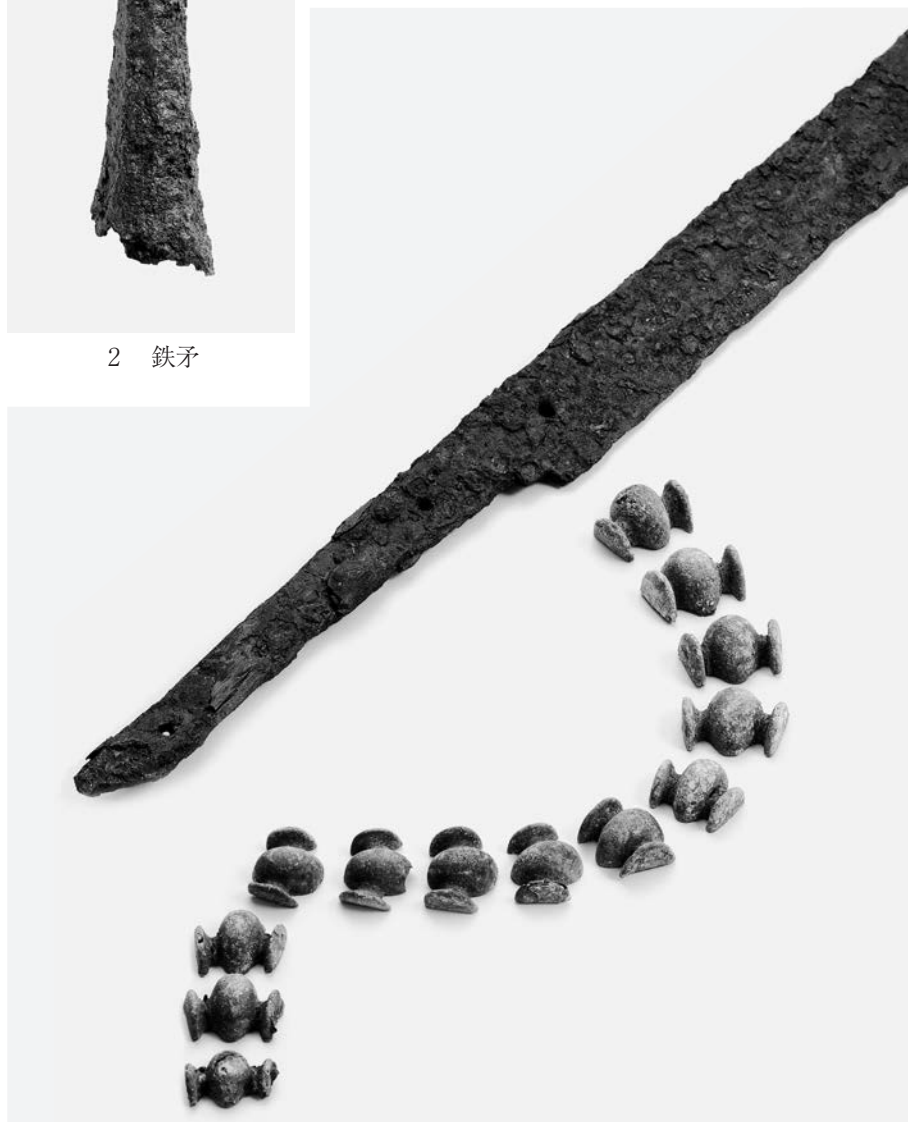
1 三輪玉付大刀



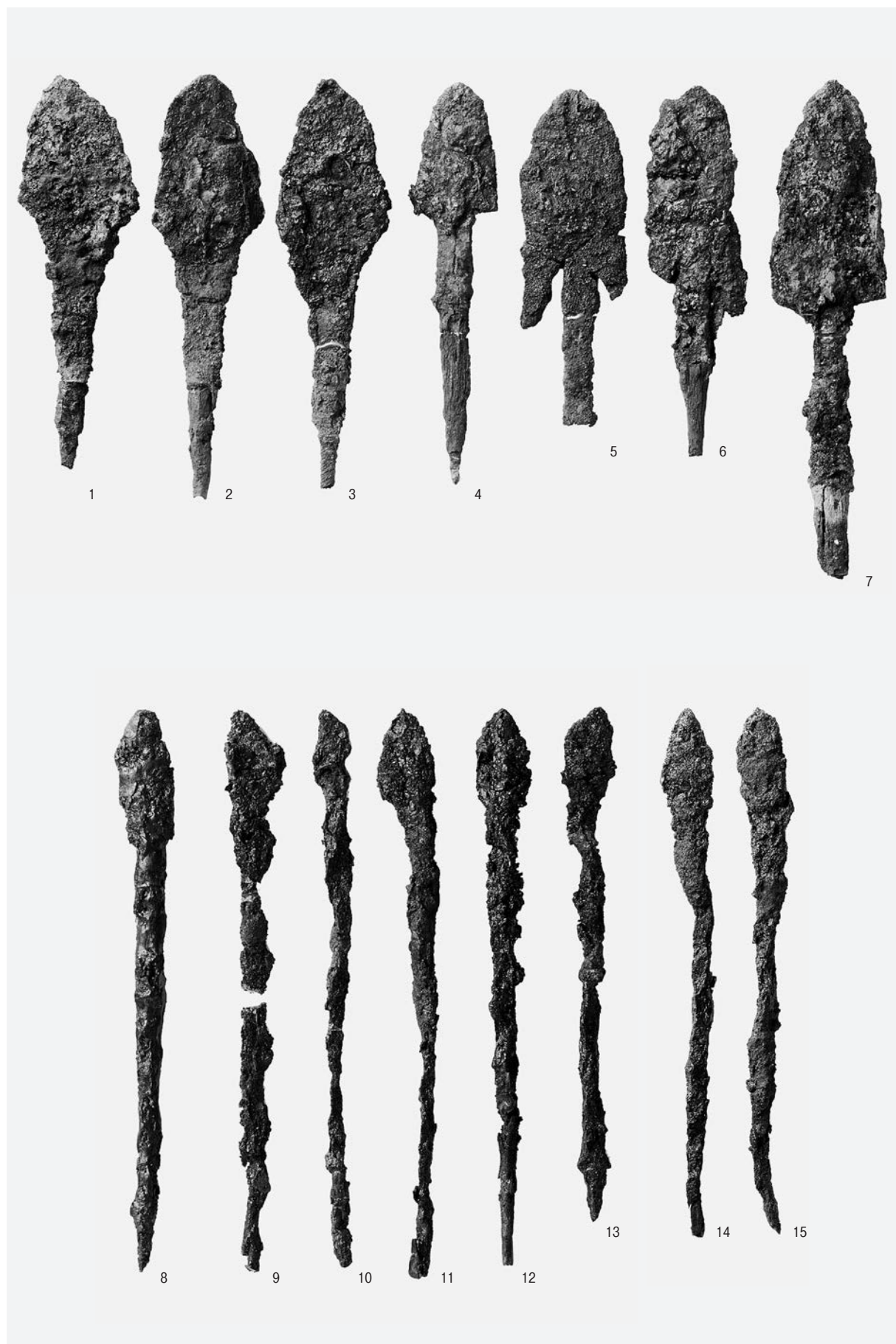
2 鉄矛



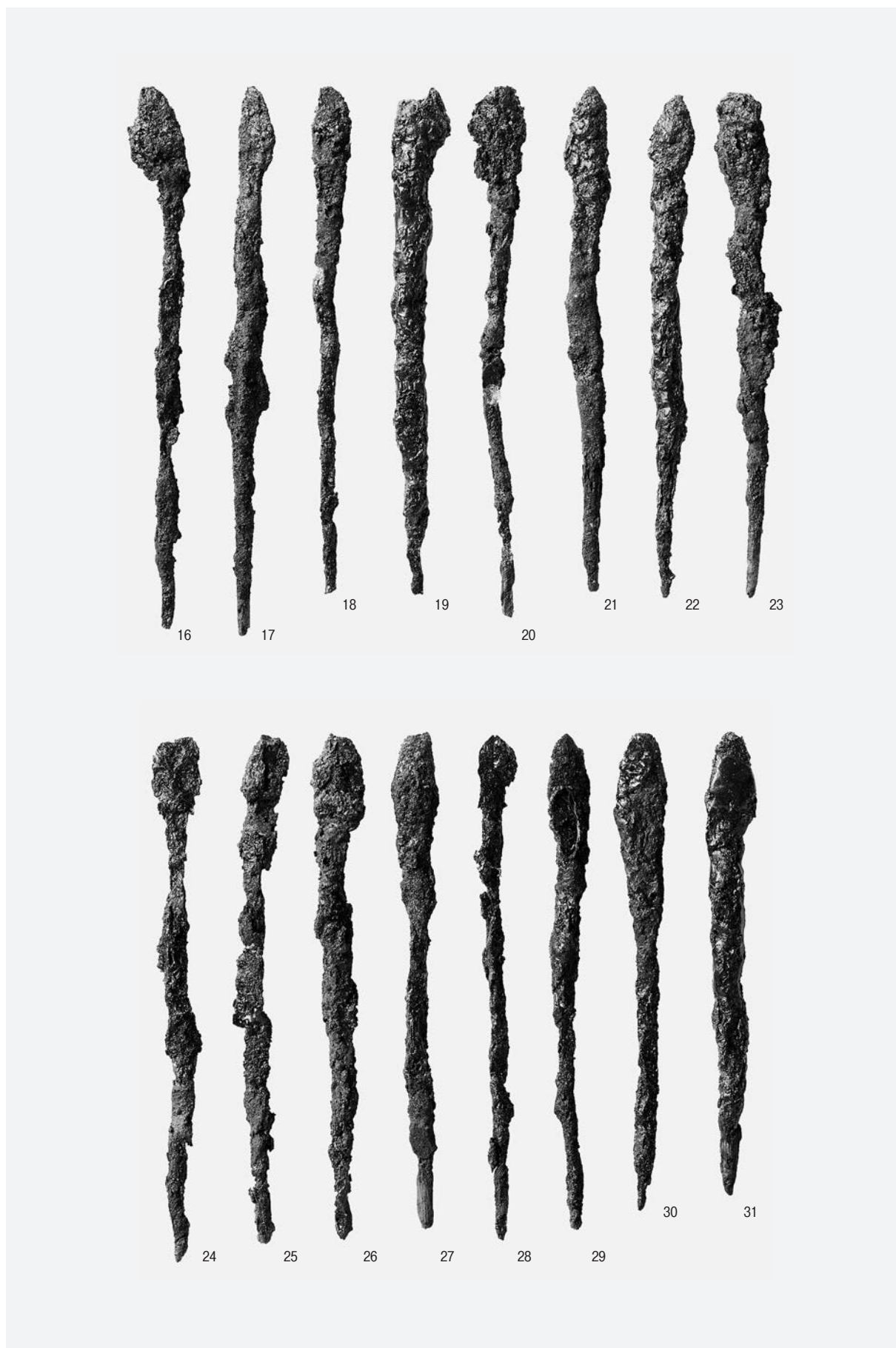
3 金銅装鈎草上部飾板



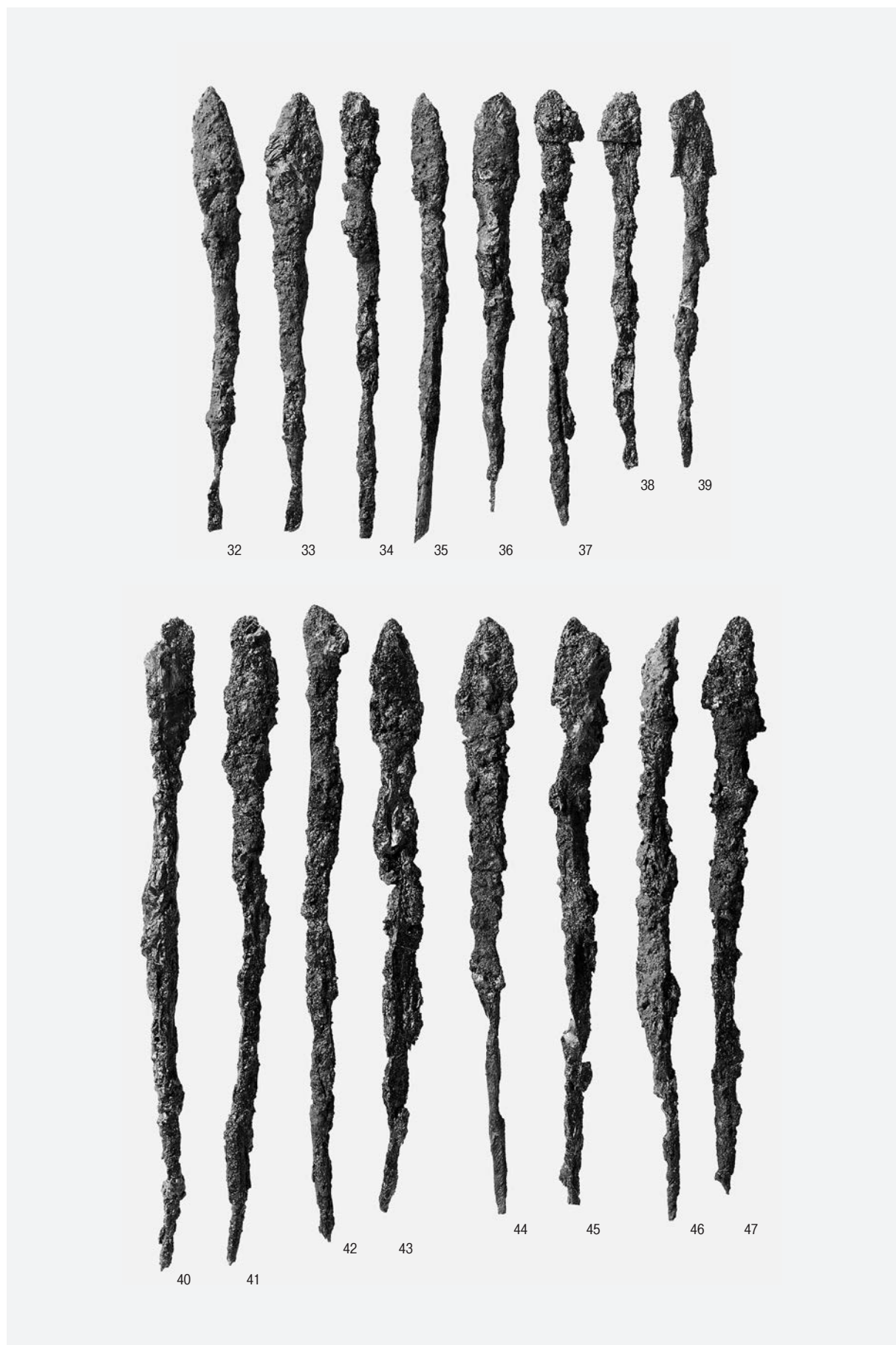
4 三輪玉



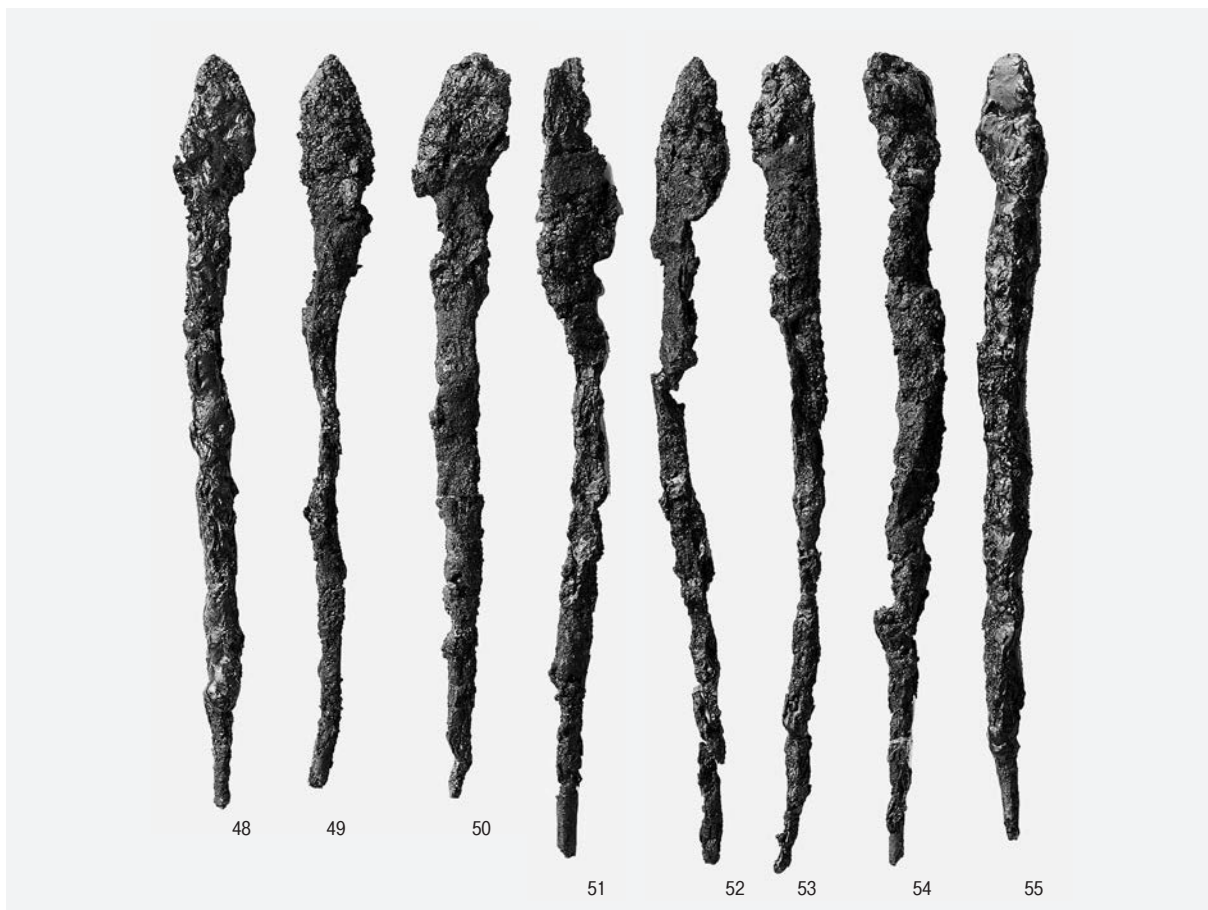
1号墳出土鉄鏃（1）



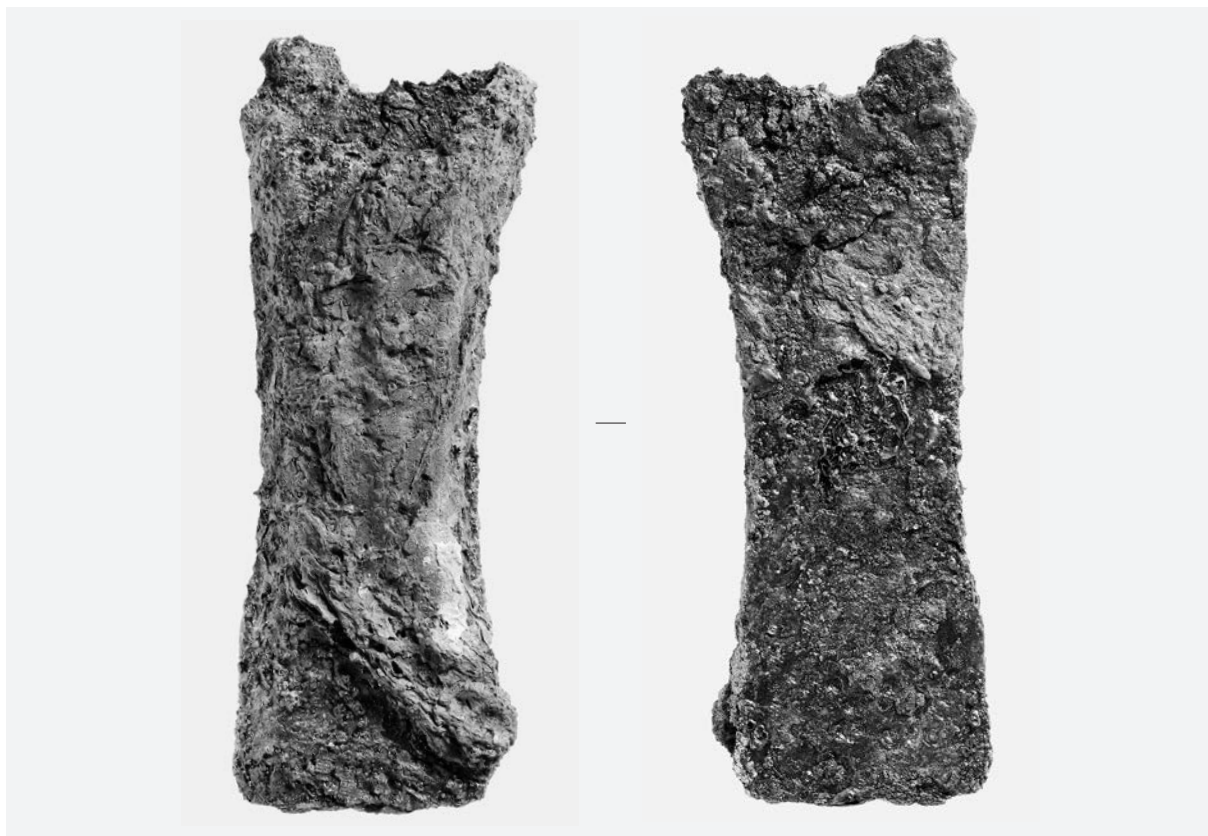
1号墳出土鉄鏃（2）



1号墳出土鉄鏃（3）



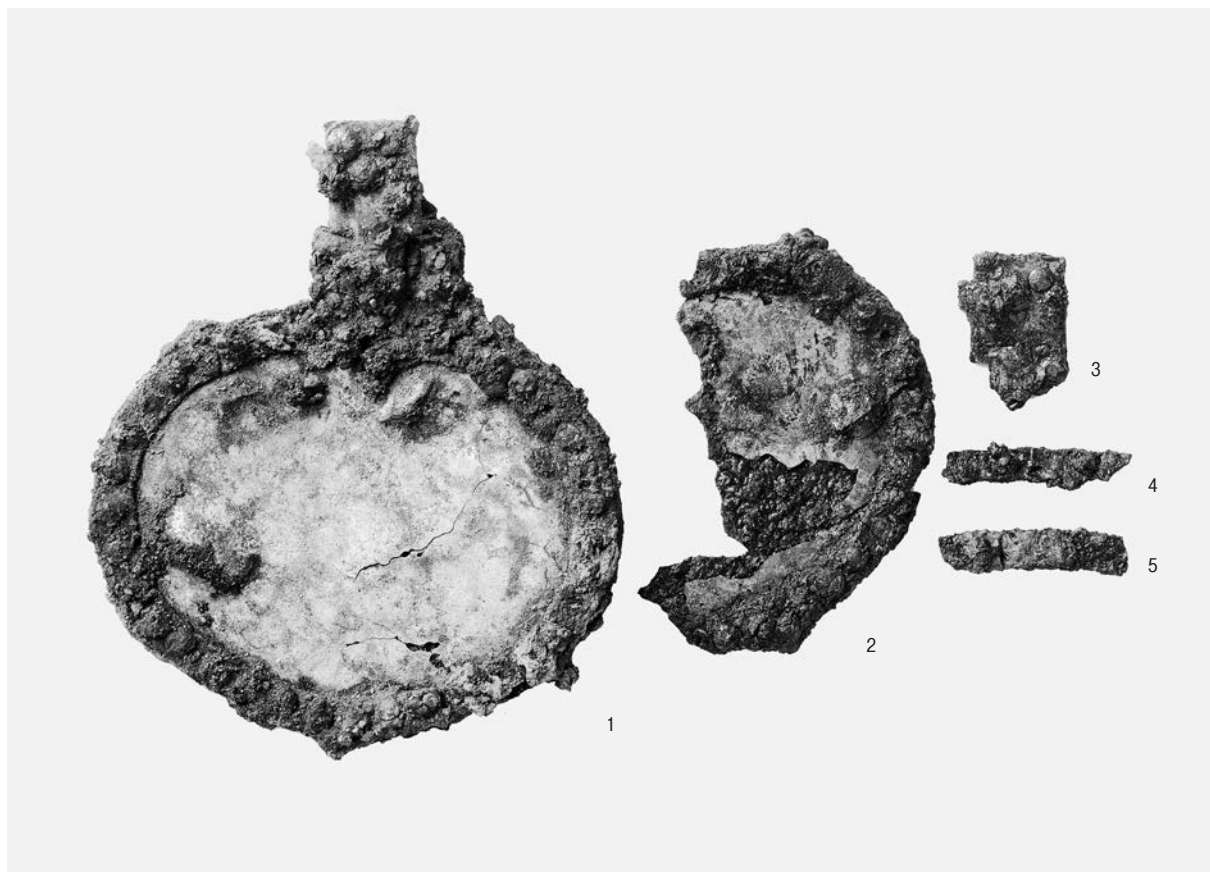
1 1号墳出土鉄鏃（4）



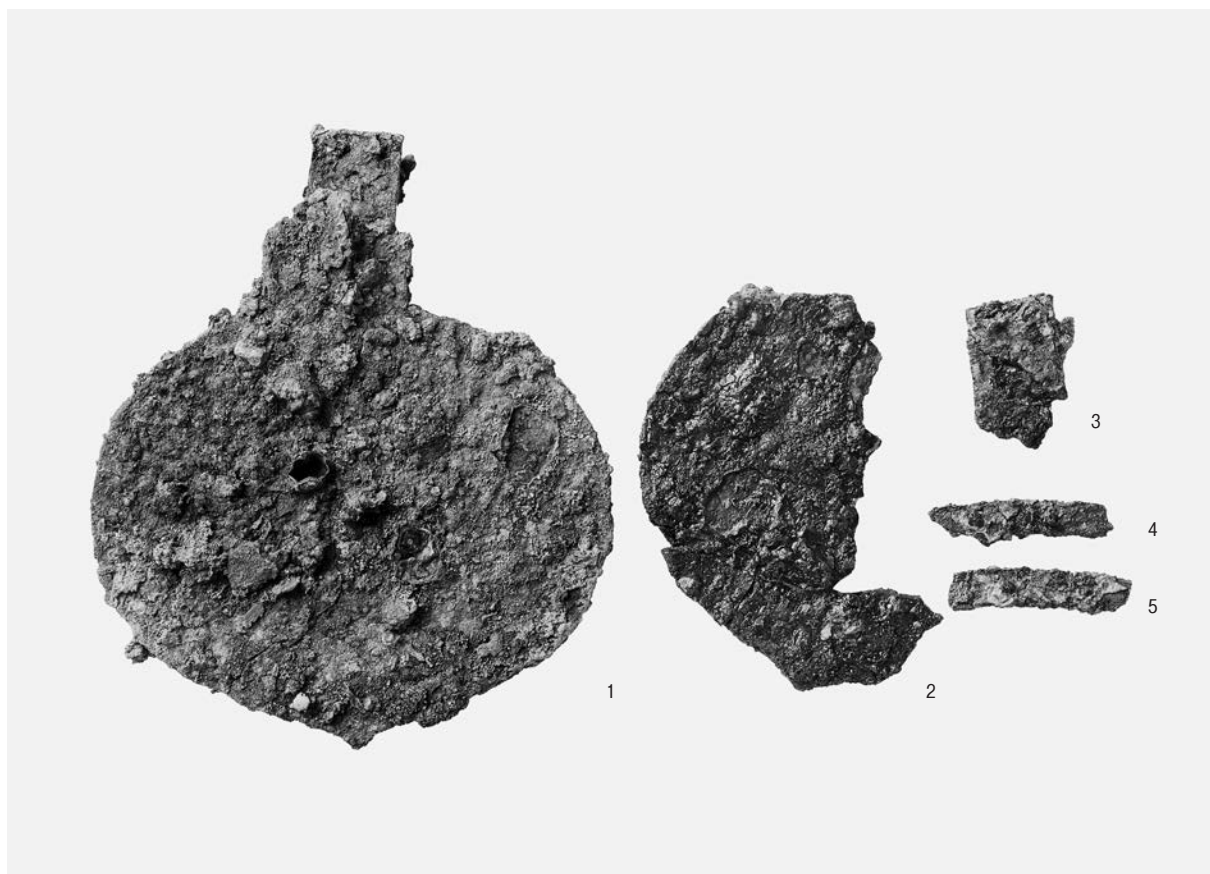
2 鉄斧



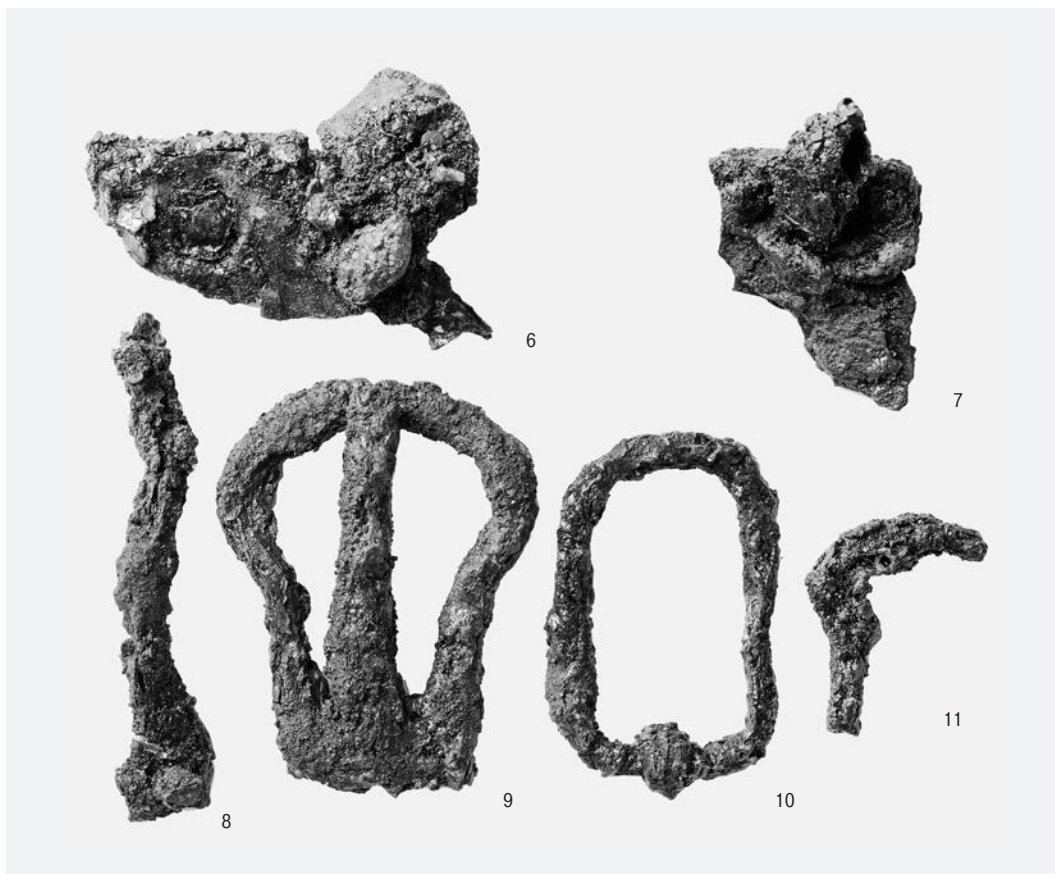
胡緣



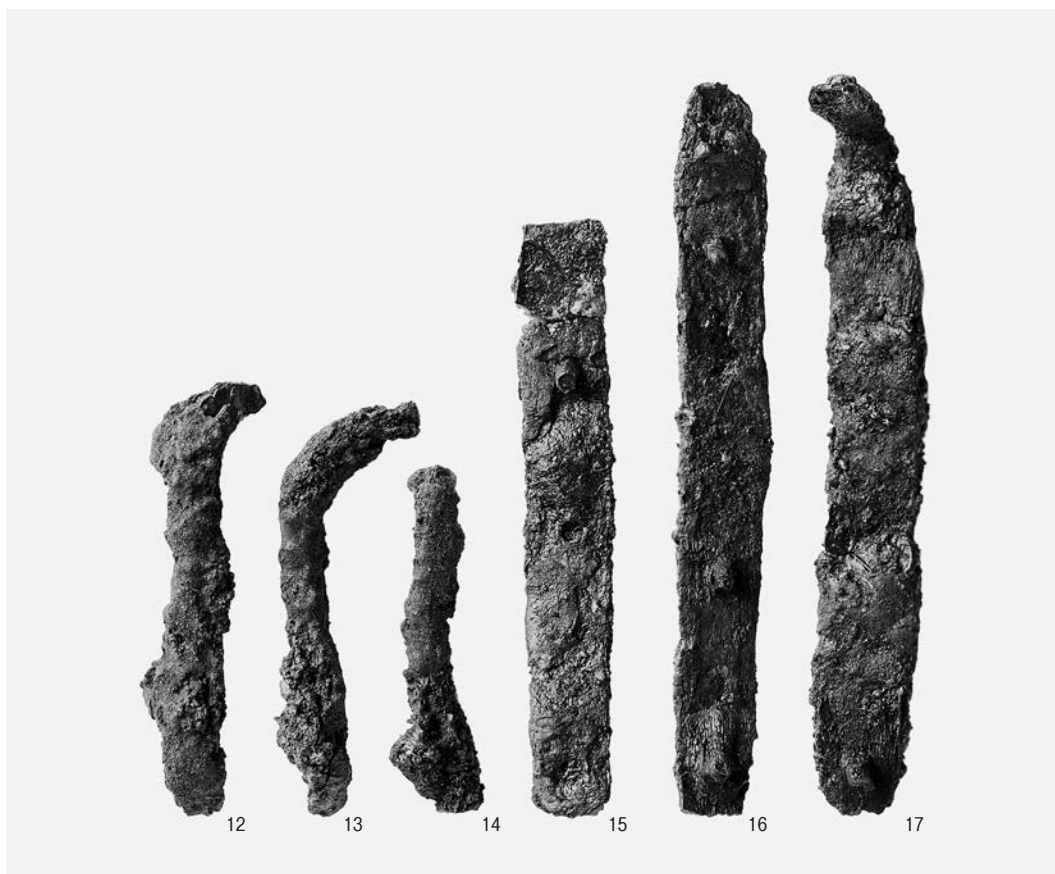
1 杏葉・不明金具（表）



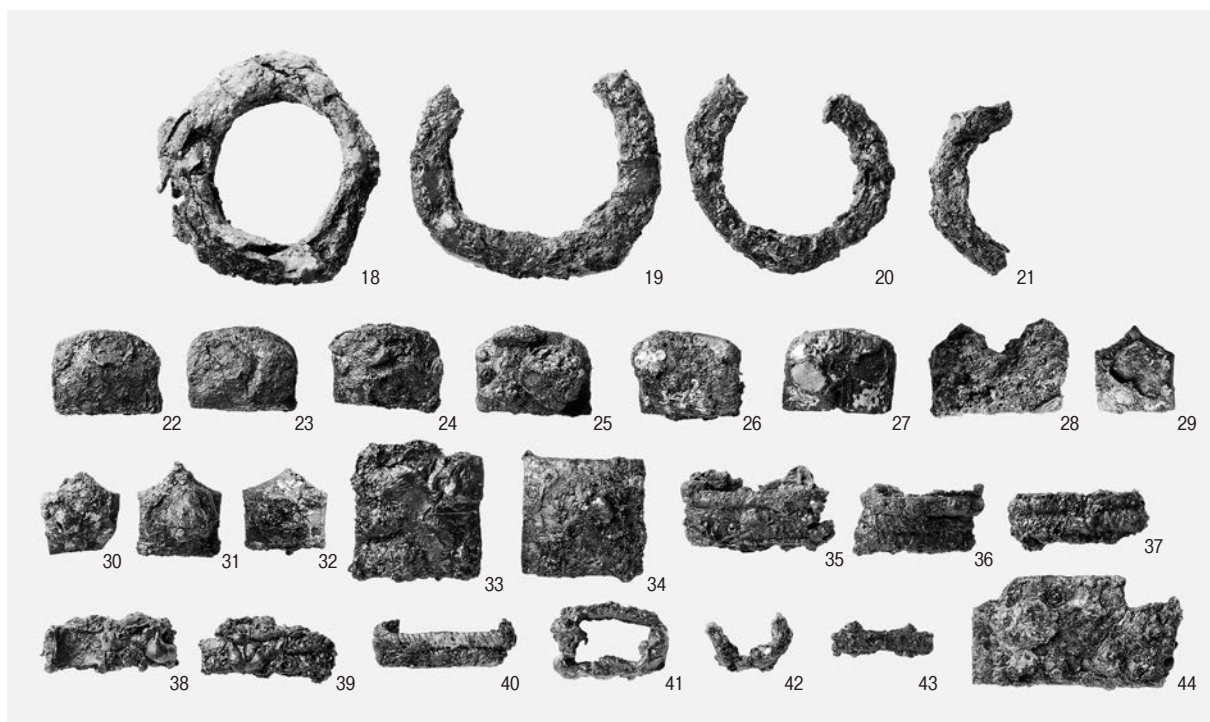
2 杏葉・不明金具（裏）



1 杏葉・不明金具・鉸具



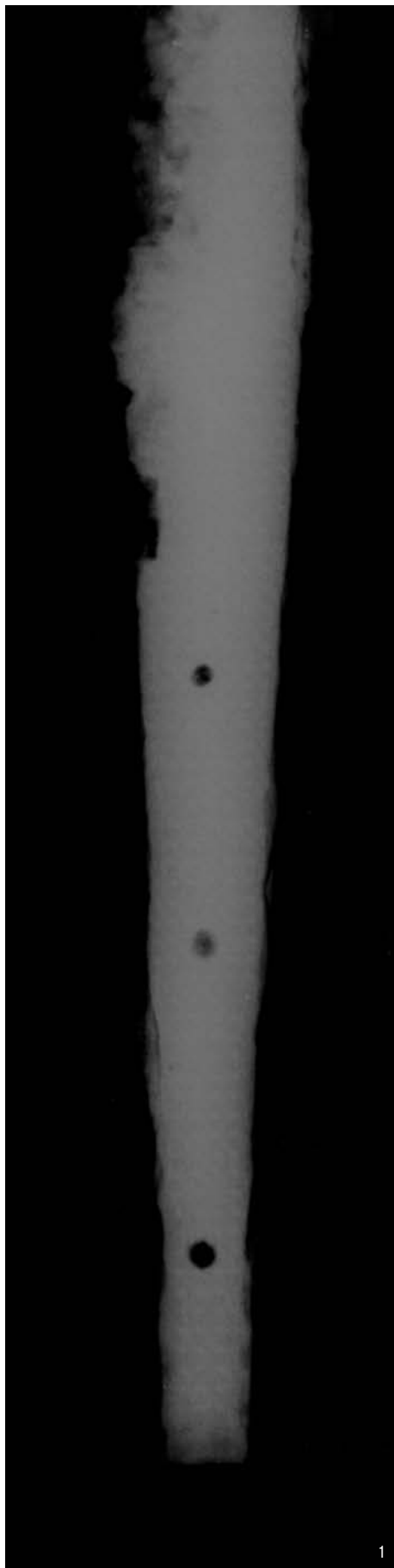
2 鏡金具



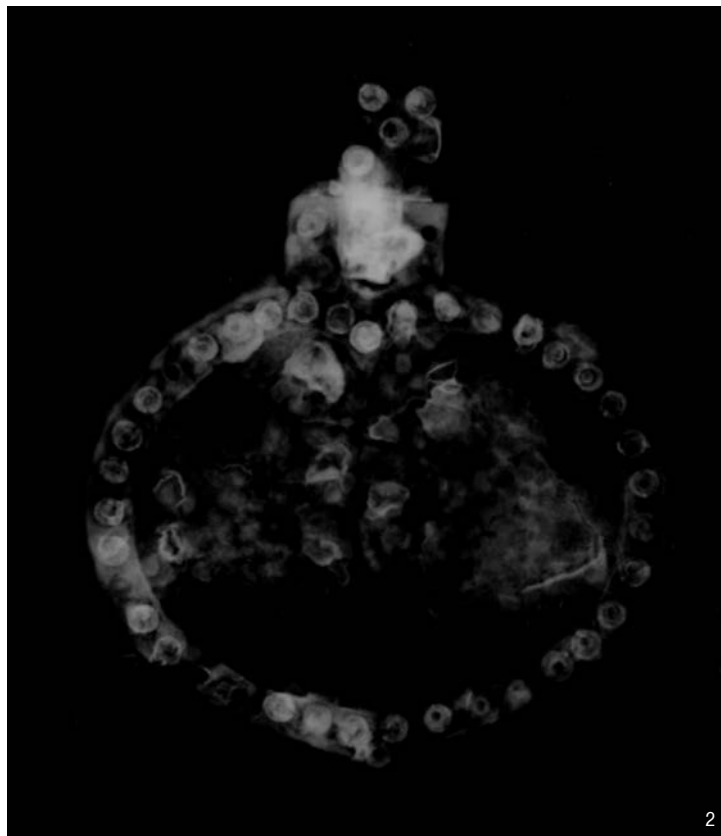
1 辻金具・責金具・不明金具



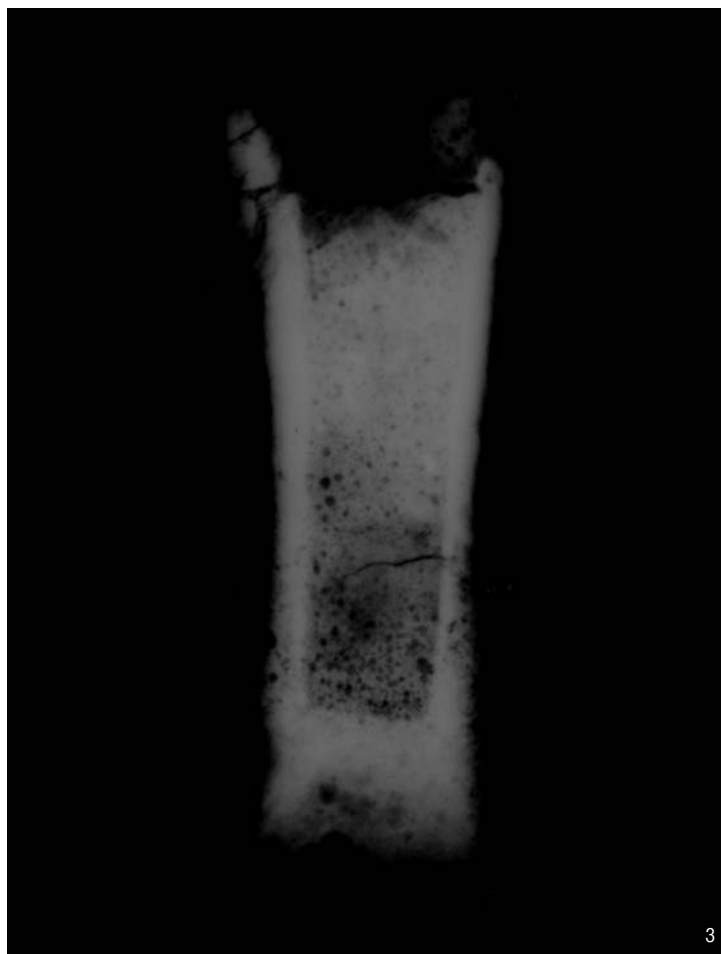
2 銅鈴・鉄鐸



1



2



3

金属製品X線写真 (1 2号墳出土大刀、2 杏葉、3 鉄斧)



1 銅釧・金環



2 玉類 (1)



3 玉類 (2)



脚付子持壺



2

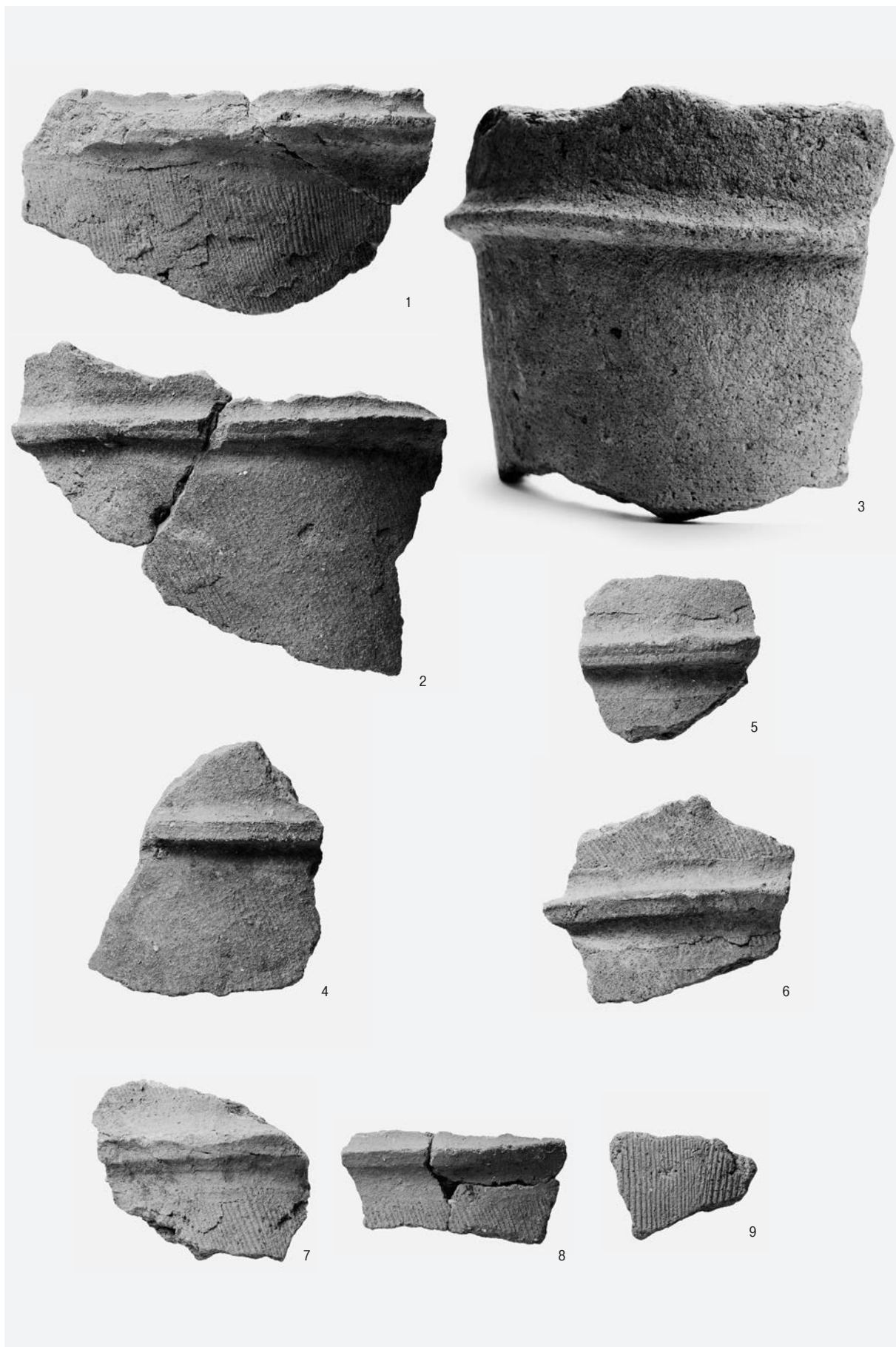


3

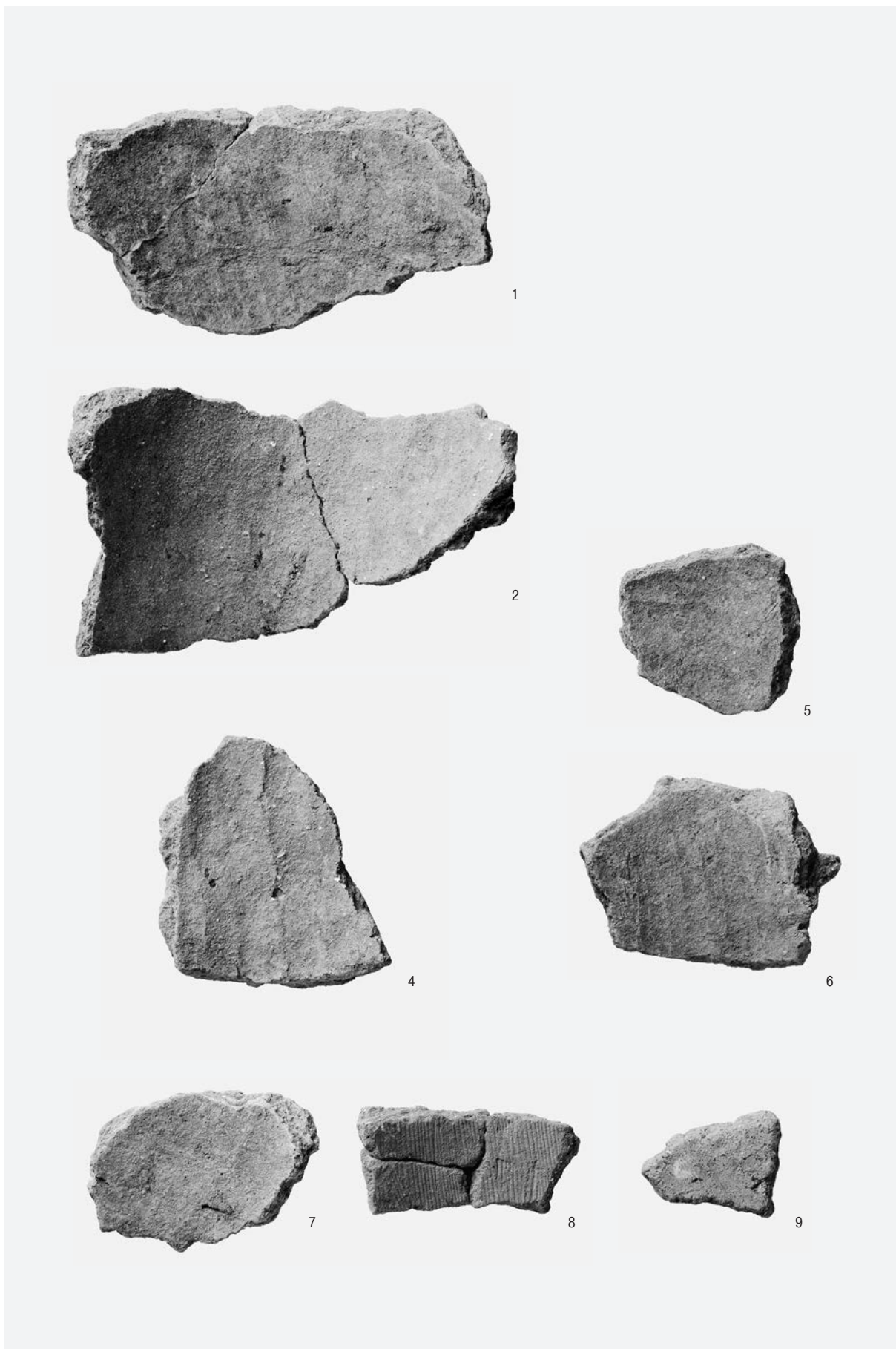


4

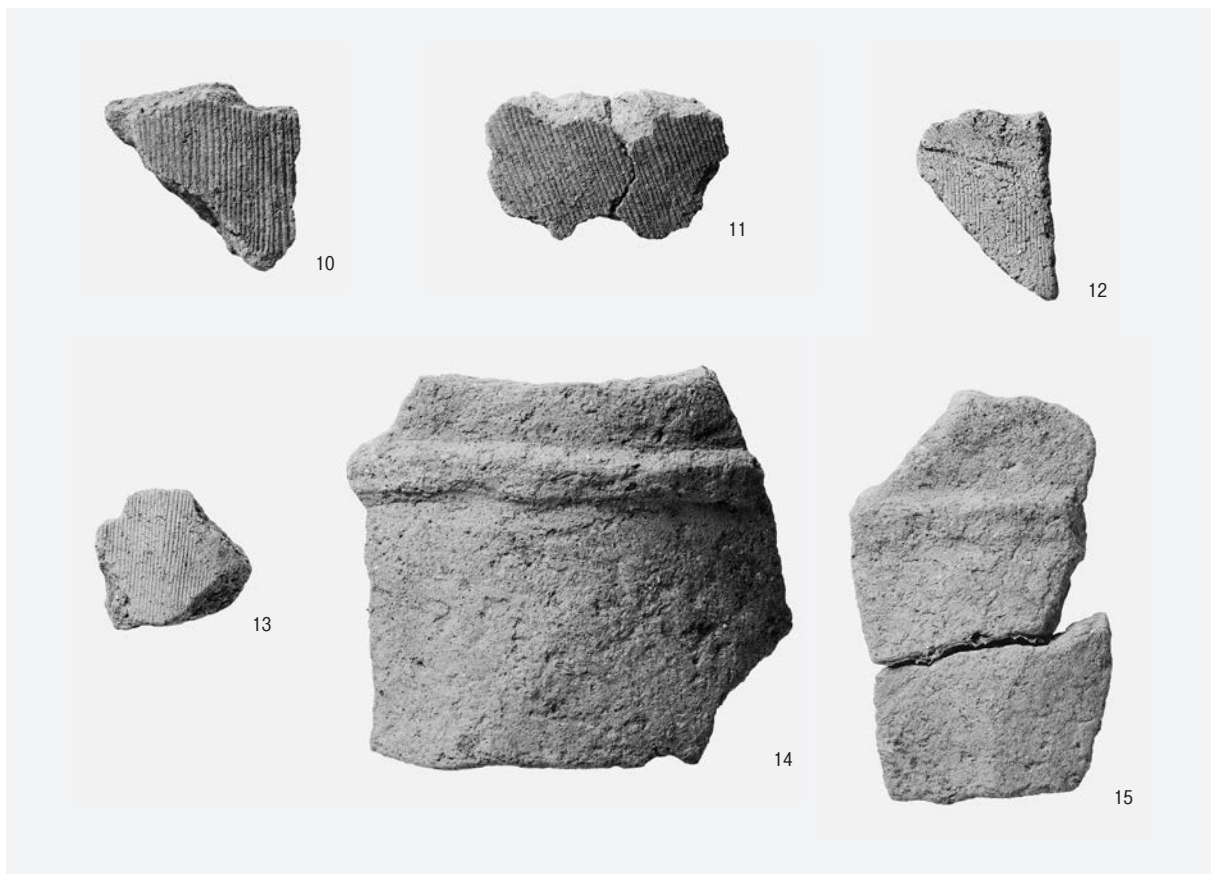
短頸壺・甕



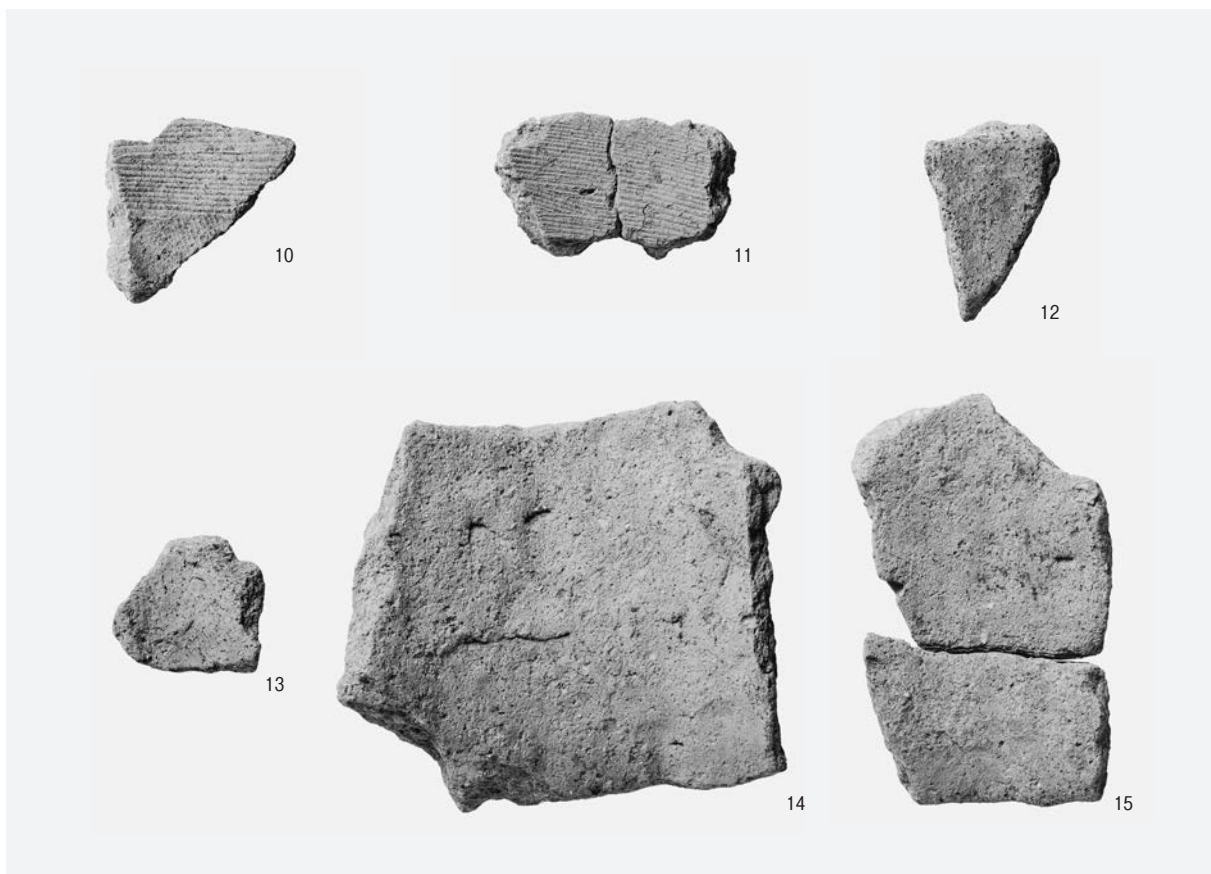
円筒埴輪（1）（外面）



円筒埴輪（1）（内面）



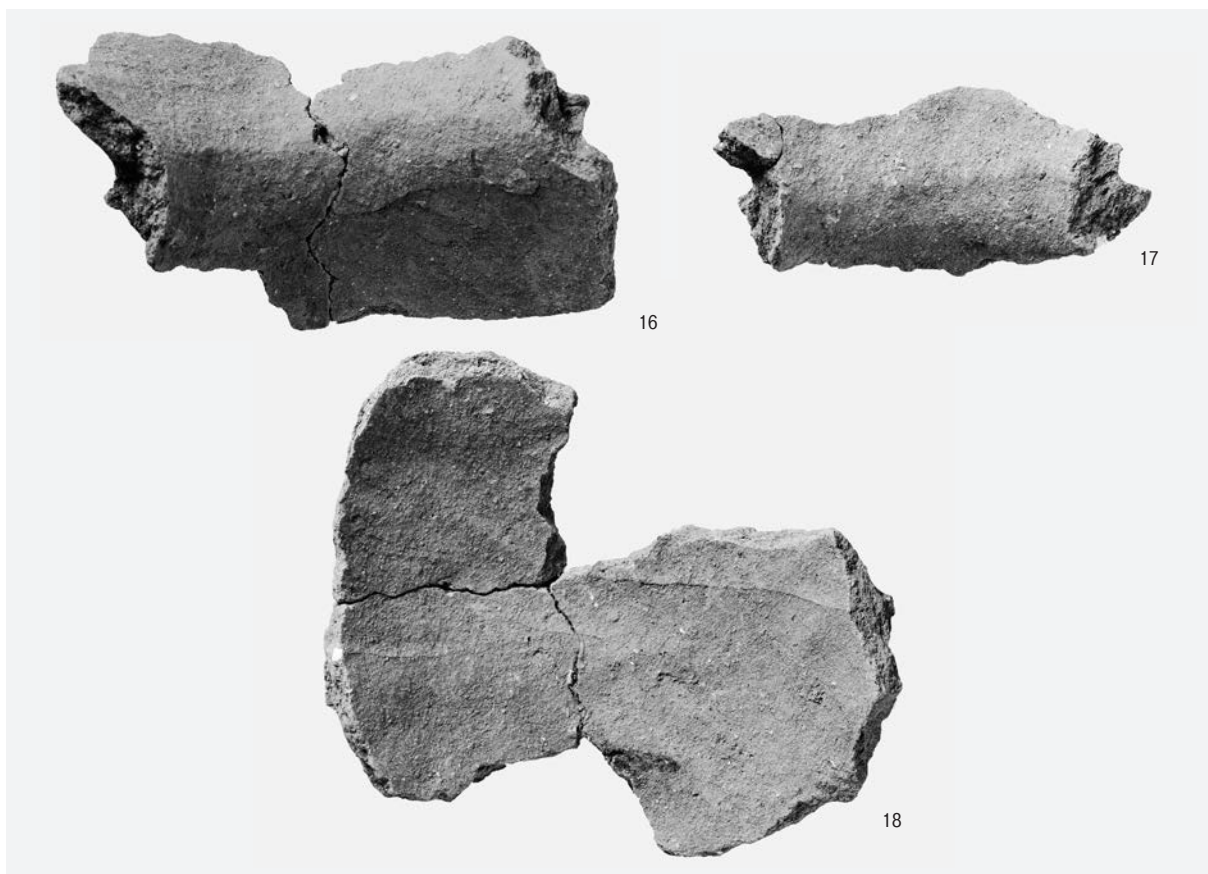
1 円筒埴輪（2）（外面）



2 円筒埴輪（2）（内面）



1 朝顔形埴輪 (外面)



2 朝顔形埴輪 (内面)

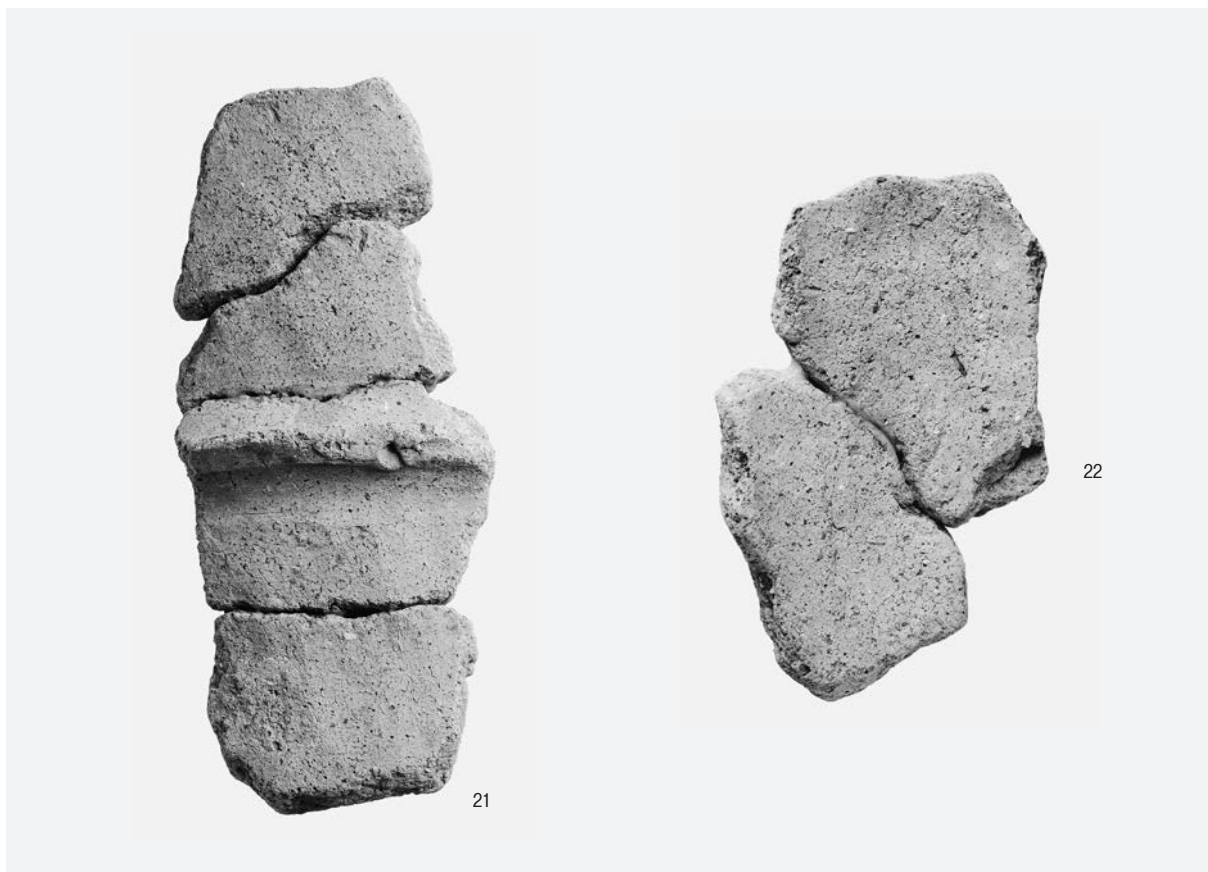


19

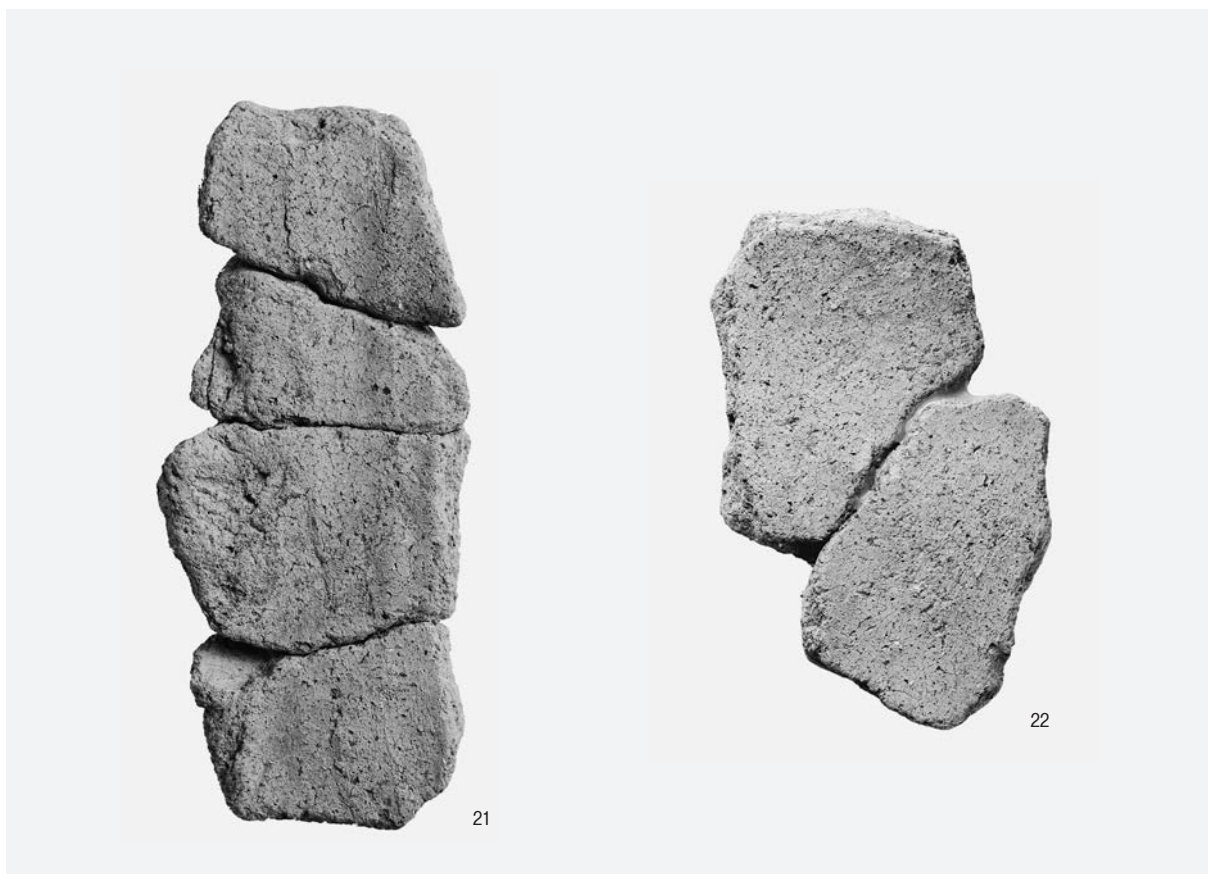


20

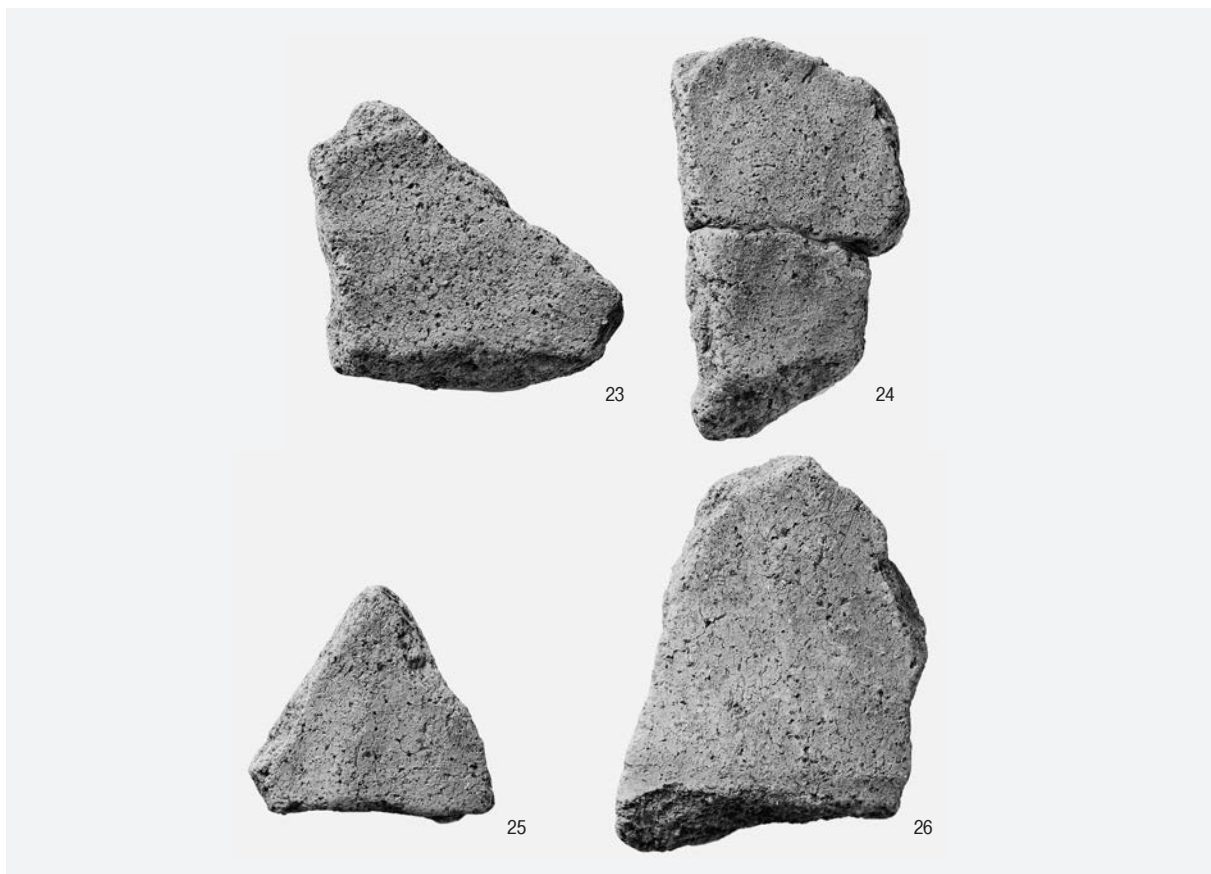
形象埴輪基部（1）



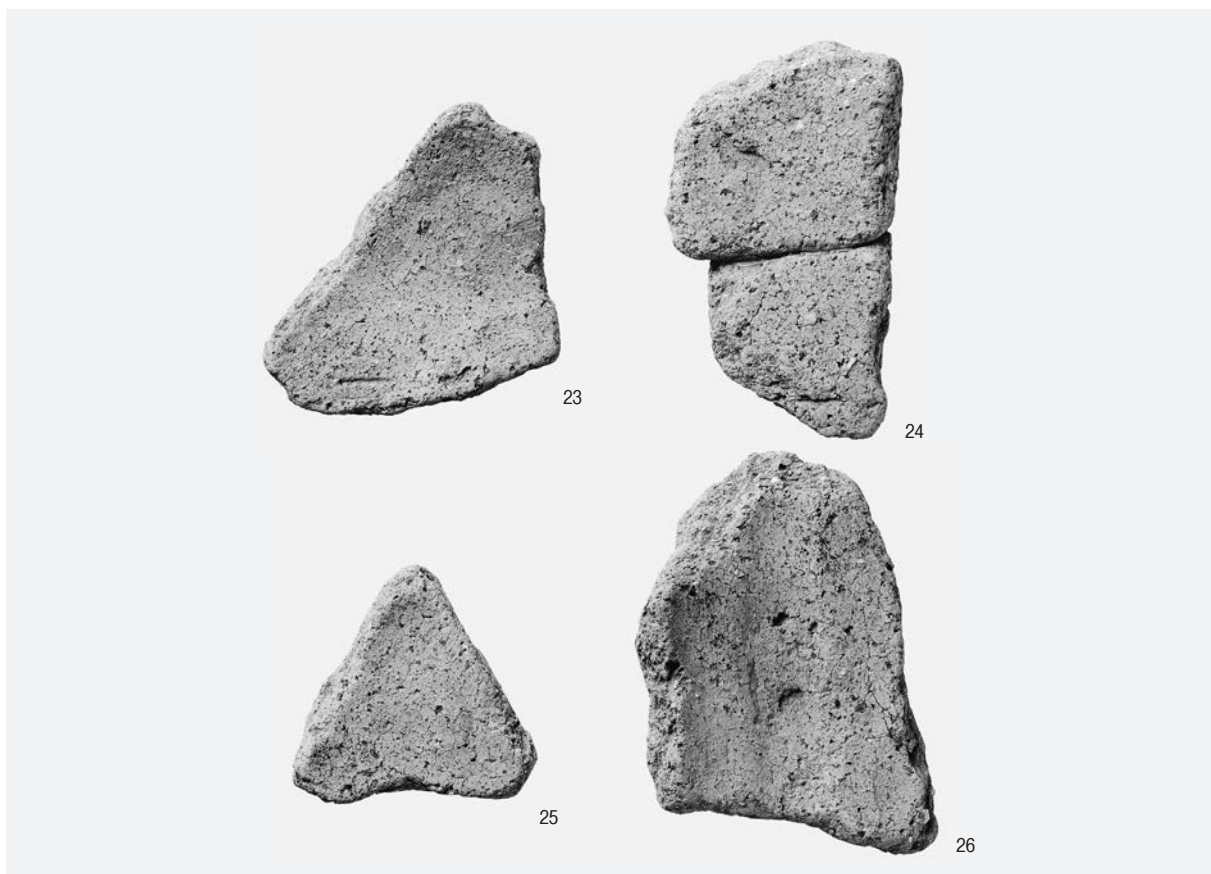
1 形象埴輪基部（2）（外面）



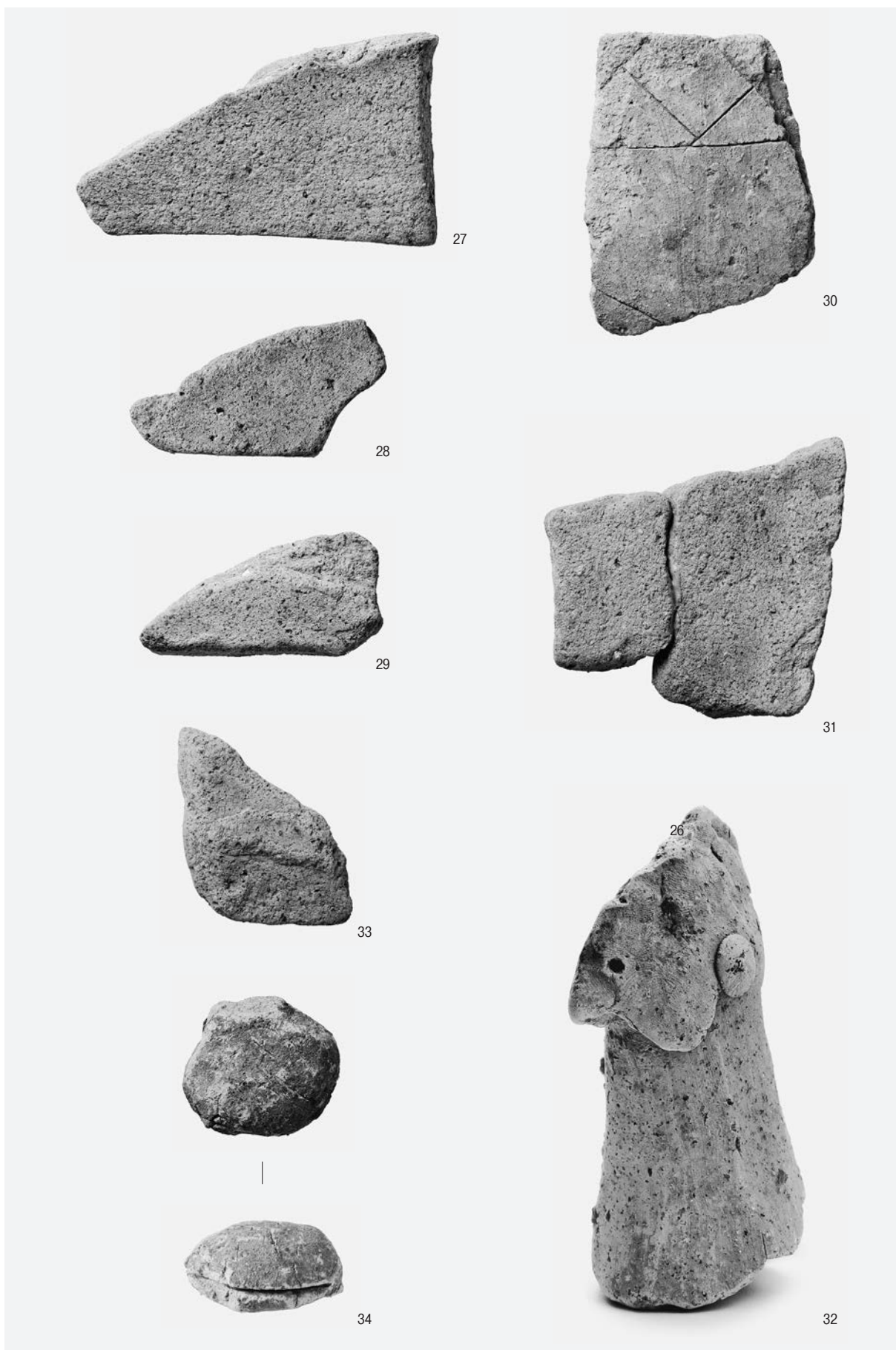
2 形象埴輪基部（2）（内面）



1 形象埴輪基部（3）（外面）



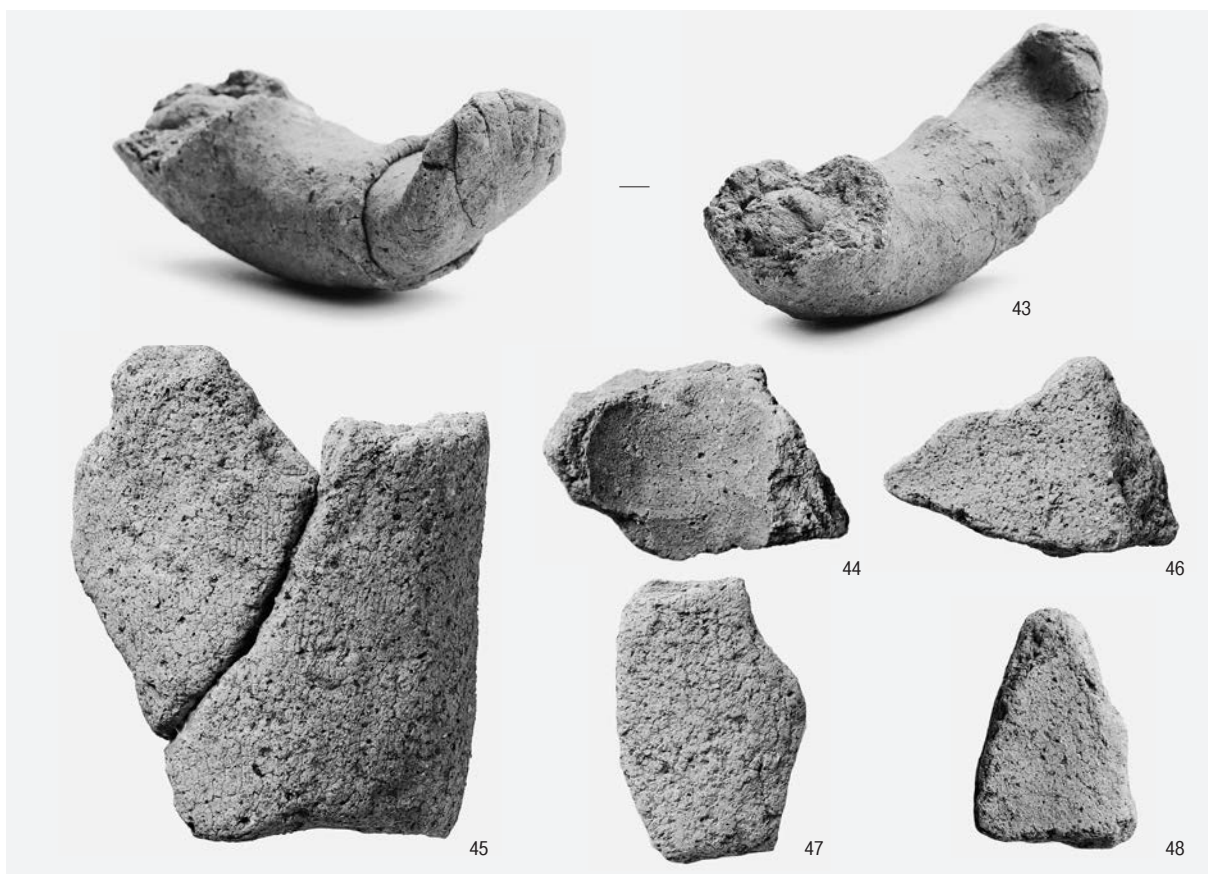
2 形象埴輪基部（3）（内面）



形象埴輪（1）



形象埴輪（2）



1 形象埴輪 (3)



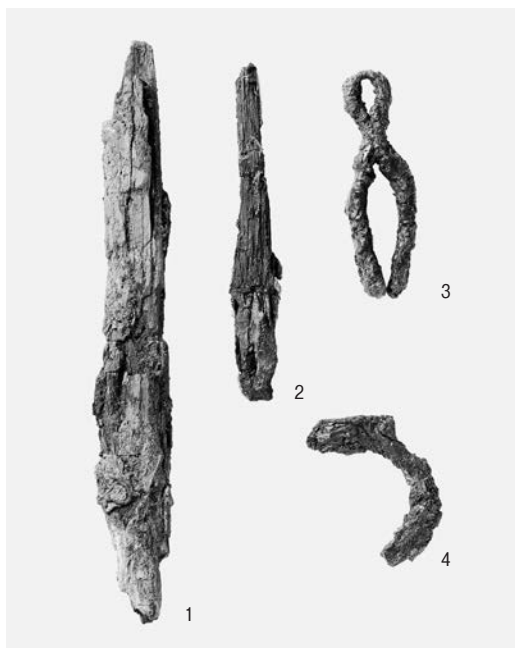
2 1号墳出土埴輪



1 2号墳西棺出土大刀



2 2号墳西棺出土短刀



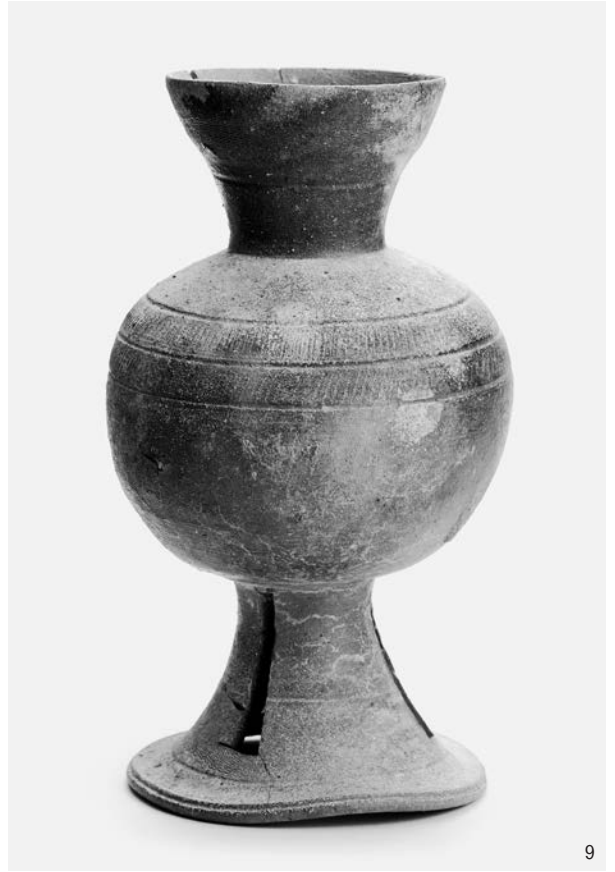
3 2号墳出土刀子、鑷子、不明鉄器



2号墳西棺出土鉄鏃



2号墳西棺出土須恵器



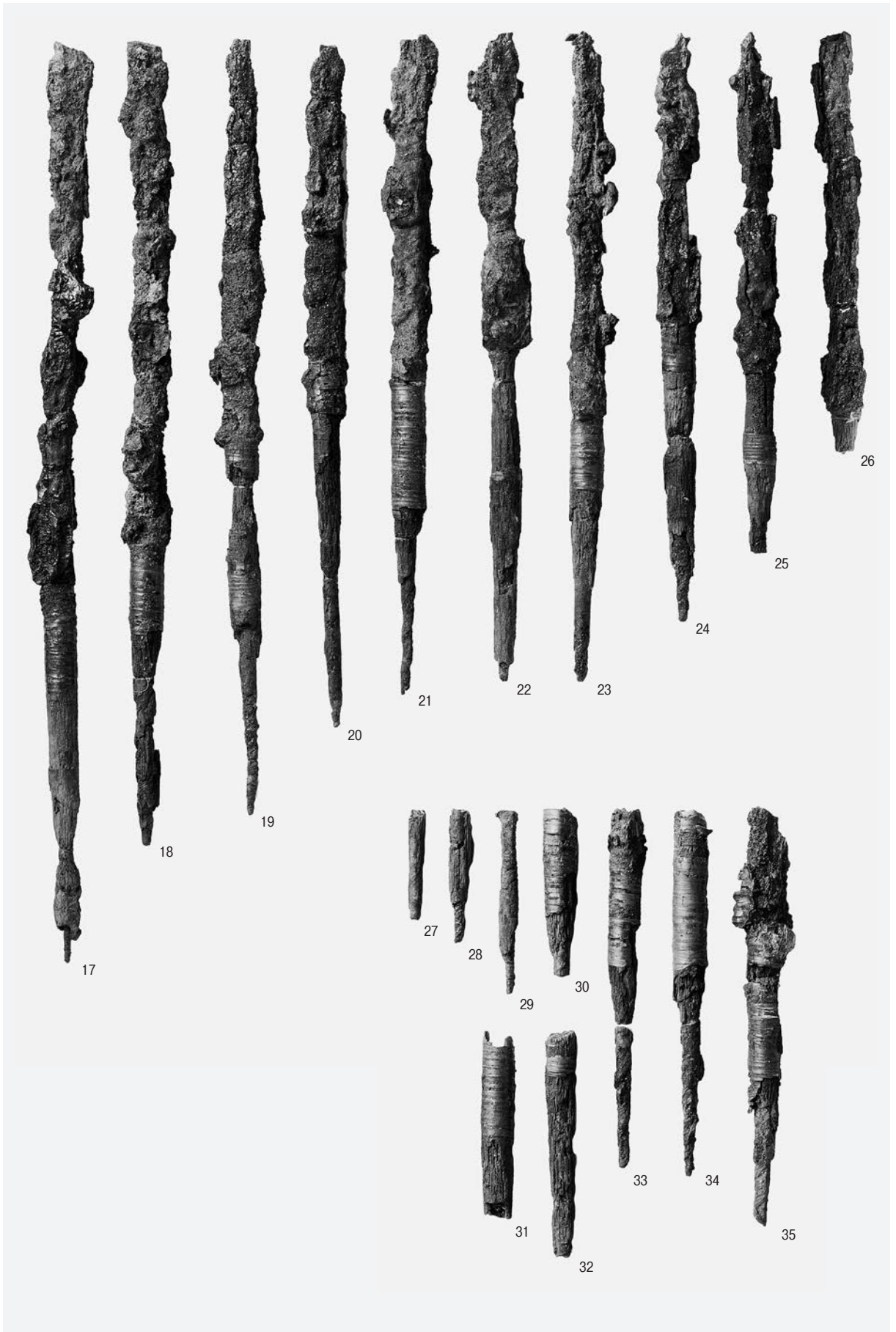
1 2号墳西棺出土台付壺



2 2号墳出土須恵器



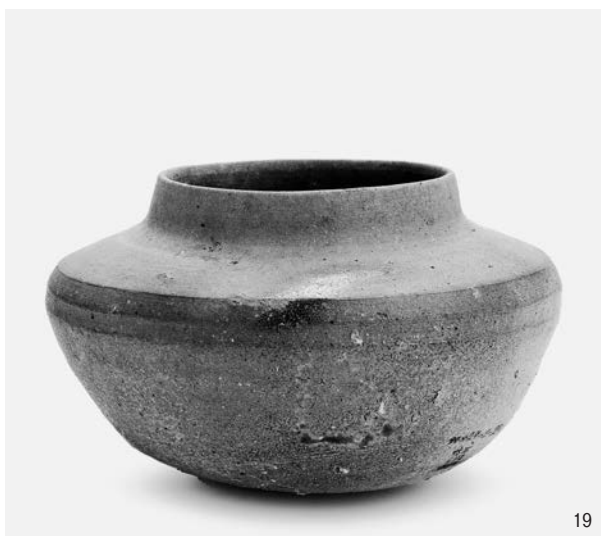
2号墳東棺出土鉄鏃（1）



2号墳東棺出土鉄鏃（2）



2号墳東棺出土須恵器(1)



2号墳東棺出土須惠器(2)



1 2号墳東棺出土須恵器(3)



2 2号墳東棺出土耳環



3 土製丸玉

報告書抄録

ふりがな	ぼうずやまこふんぐんしゅつどひんほうこくしょ				
書名	坊主山古墳群出土品報告書				
副書名	奈良大学考古学研究調査報告書第25冊				
編著者名	泉 眞奈、上野あさひ、漆原尚輝、辛川あかり、小林友佳、静 幸穂、竹川可純、田口裕貴、築山弥矢、土屋隆史、堤 圭三郎、豊島直博、中川恋歌、古谷真人、松島隆介（編集 豊島直博）				
発行機関	奈良大学文学部文化財学科				
所在地	〒631-8502 奈良市山陵町1500				
所収遺跡名	所在地			コード	
坊主山古墳群	京都府宇治市広野町寺山122			市町村	遺跡番号
				26204	17
北緯	東経	調査期間		調査原因	
34度86分51秒	135度81分14秒	19640515～19640916		緊急調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坊主山古墳群	古墳	古墳時代	墳丘 木棺	鉄製品 土器 埴輪	前方後円墳1基、円墳1基を発掘し、多くの副葬品が出土した。

坊主山古墳群出土品報告書

2020年9月発行

編集 奈良大学文学部文化財学科

発行 奈良大学文学部文化財学科

〒631-8502 奈良市山陵町1500

印刷 有限会社 真陽社

〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル
